
魔法少女リリカルなのは ～Destiny's Joker～

幻空 夢路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 〈Destinys Joker〉

【Nコード】

N3483V

【作者名】

幻空 夢路

【あらすじ】

それは運命か、あるいは偶然か、はたまたは必然か、それは誰も知らぬ。だが少年は少女と出会う。少年は願う、護る力を。少年は願う、自分が憧れる。仮面の戦士と光の巨人の力を。少年は願う、ハッピーエンドを……。

――「魔法少女リリカルなのは」〈Destinys Joker〉――
――「ker」―― 始まります!!!!!!

この物語はできる限りほのぼのギャグな話で行っています。多少はシリアスなどは入りますが、ギャグが多めです。

プロローグ どこだよここ(前書き)

はじめまして！幻空 夢路です！

初めての投稿なので誤字などが目立ったり、
話がおかしかったりするかもしれませんが、
そのことなどについても、アドバイス&感想よろしくお願いします。

プロローグ どこだよここ

ここは、なにもない、

あるのは砂と砂でできた丘、それもあまり大きいのではなく、まるで滅んでしまった世界かのような、いや、もしかしたらそうかもしれない。そんな地に、

「・・・・・・・・どこだよここ・・・・・・・・」

少年^彼はいた、

いやいや、ちょっと待て。たった今僕は海鳴市にいたはずだろ？腹減ったからお菓子でも買おうかと思って出かけてたら急にこんな場所にいるってどうよ？しかも気づいたのしばらく歩いてからだし、どんだけ鈍いんだよ僕はってただのんきなだけか、アッハッハーって笑ってる場合じゃなくて、ってあーもうなんかこんがらがってきたー！もーいい！いいよね？もう叫んじゃって！？ハイ皆さんご一緒ー！（誰もいないけど）・・・・・・・・不幸だ・・・・

「ってほんとにどうしょ・・・・・・・・」

彼はとんでも思考終わると同時にハア、とため息をつきながらトボトボ歩き出す。

「しかし何にもないなー、ホント。まるで世界が滅びたみたい・・・・・・・・」

しばらく歩き続けたが見渡す限り砂だけであり、何もない。このまま歩いてても無駄と判断し、歩きながら元の世界に戻る方法を考え

る。

(やっぱテレポーテーションを使えば・・・・・・・・ん?)

怪訝な顔をしながらしばらくうーん、と思考を巡らせていると彼の目に一つのが目に入る、それは――

「建物・・・・・・・・?」

この砂だらけの場所に建物が立っていたのだ、それは見た目からしてどうも研究所らしく、頑丈そうな壁に囲まれていた。

「おお! 助かったー! と行きたい所だが、何でこんな場所に立ってんだい・・・・・・・・?」

そもそも多くの者ならその建物が研究所らしいことや、頑丈な壁の事に気が付かないだろう。気付いたとしても気にしなかったり記憶のそばに置く、あるいは消すなどだろう。だが彼はのんk・・・・少しかわt・・・・かなり変わっているためそのことに気づく。また助かったものにも元から帰る手段はあるため、二重の意味で落ち着いていられる。

「行って、みようかな・・・・・・・・?」

好奇心に駆られ、その研究所に向かう。

そのとき、彼は気付かなかった。自身の掛けているネックレスがまるで共鳴するかのように輝いていたことを――

~~~~~

「・・・・・・・・うわぁ」

中に潜入したのはよかったものの、（途中、扉が閉まっている物があったが『レポートーション』で中に入って行った）潜入してからずいぶん中に来てからの感想がこれだ。それもそのはず、見てきた物が

「どう考えても違法な研究やってますと言ってるようなものばかりだもんねえ・・・・・・・・」

もはや何かとしか言いようがない物が入った培養器やら、なにやらすごそうなコンピューターなどばかりである。

「マンガやアニメで出てきそうなもんばっかだし。ハッ、てことは

僕はマンガかアニメの世界に来たのか!？」

それはありえない

「……なんか突っ込まれたような気が……、まあツツコミ役がいないと1人ボケても寂しいし、

――――さて、どうしようかこれ」

少し自分自身の雰囲気を変えながら一人問いただしたのは、この大きな扉。『危険』を意味するであろう絵がでかど描いてある。

「見た目からも分かるほどかなり頑丈に作られてるよねこれ。壊すの大変そうだな……」

かなり頑丈そうにできている扉に頭を悩ませる

「多分ここはこの研究所のほぼ中心、かな?。そしてこの扉の向こうが多分この研究所の中心ね。しかも結構頑丈度がほかと比べて強力だし、……ここが一番重要な場所って事かな?」

再びテレポーションを使い、中に踏み入る。そこには――

「What? . . . . .」

思わず英語発音になりながらも――

手足を壁に固定され、眠らされているであろう全裸の少女に自分の目を疑う

「ヲイヲイ冗談だろ？ 何でこんな女の子が . . . . .」

思わず自分の言葉がおかしくなってしまう。それも当然だろう、自分と同じ年か、あるいは年下かもしれない少女が壁に固定されていたらお人好しの彼には十分衝撃だろう。さらに少女の顔には何度も泣いたのであろう涙の後が顔にできている。



「……今助けてやる」

そのまま右手に『アグルブレード』を作り上げ、固定具を斬り外す。

——だがそれはある意味失敗だった

ウー！ウー！ウー！

「へ？」

『第一級レベル研究室にて拘束器具の破損あり！全警備員は速やかに研究室に行き、急遽<sup>D</sup>estiny's Child<sup>C</sup>を捕獲せよ！繰り返す……』

嚴重な部屋の物を壊せば、気付かれることは当然である。これはある意味失態だが、彼の性格を考えれば仕方ないのかもしれない。

「……G<sup>ガッ</sup>OD<sup>デム</sup>DAMN」

「こちら、研究室にて不法侵入者を発見！繰り返す！こちら……」

「……不法って、あんたらには言われたくないね」

いつの間にか現れた警備員の発言に思わずつぶやいてしまう。

「動くな！少しでも動けば撃つぞ！」

その言葉とともに前にいる警備員であろう者たちが一斉に杖を向ける。

「・・・・・・・・・・？」

なぜ撃つのに杖を向けてくるのか、魔法を知らない彼は謎に思っ  
てしまう。

「さあ、おとなしく捕縛されろ！」

リーダーらしき男が彼にむかって叫ぶ。このときこの男は彼は素  
直に捕縛されると思っていた、それも当然相手はまだ小学生のガキ  
なのだから。

—————だがこの男の予想は覆される。

「やだね」

「なっ・・・・・・・・！」

「そもそも、おとなしく捕まったところであんたら僕を逃してくれ  
るの？違うでしょ？」

「フ、フン、当たり前だ。ここの存在を知ったからにはおとなしく消えてもらう」

相手の回答に思わずうろたえてしまうが相手が冷静に対応してくるので男もすぐさま冷静になることができた。

「ハア……。ため息が出る、何でこーなのかねー大人ってのは？自分で言うのもあれだけど、子でもに武器？を向けてくるし、こんな小さい子供に泣くほど辛い事をやらせてたっぽいし、たく。まっ、それが大人、か」

額に手を当て心底あきれたように首を横に振る。

—————ただ、その顔は憎しみと悲しみに覆われていたが。

「まいいや、ともかく僕はこの子連れさせてもらうね、こんなとこに置いとけないし」

「ハッ、この数で何をしようってんだ、ガキが！」

最初の男とは別の男がしゃべる。

「ガキ、ね・・・」

そのまま彼は自分の手を見る、

「最初に言っておくけど、あんたたちこの言葉知ってる？」

――人を見た目に寄らないって言葉？」

「ほざけえッ！！」

男の言葉とともにリーダーらしき男が撃つよう命じる――

れた

刹那、  
彼らは光に包ま



## ブログ どこだよここ(後書き)

謎が多かったり、主人公の力、名前など色々とかけてないかもしれないませんが、これは貯めです！貯めてから発表したほうがいいと思うんです、僕は。

次のブログ2ではぼすべての謎を発表します。

感想&アドバイス待っています。

## プロローグ あなたは誰

それは突然だった。

今までは、何事もなく、ただ静かに、日々を送っていた・・・



・  
・  
・  
そしてこれからも、そんな日々を送るはずだった・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
ある日突然、私は白い服悪魔の者達に連れ去られた・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



・ 日々、日々私の頭はおかしくなりかけた  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

日々、日々私の心は壊れかけた・ ・ ・ ・ ・

苦しくて、辛くて、そして、

痛い。  
――

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
タイタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイ  
タイ――――。。

もういやだ

こんなのいやだ

どうして私がこんな目にあうの

・・・違う、

ちゃんと理由はある

それはこの力だ

この力のせいだ

――――望んだわけじゃない

――――欲しくて生まれたんじゃない

――――ただ持っていた、

――世界の王にもなれる力を、

――世界をも滅ぼす事もできる力を、



――あまりにも大きすぎる力を、

――あまりにもむちゃくちゃすぎる力を、

私は持っていた――。

過去に似たようなことはあった――

私の力を狙って散った命があった――

滅びた世界もあった――

い  
を  
呼  
ぶ  
◇

◇  
大  
き  
す  
ぎ  
る  
力  
は  
災

そ  
ん  
な  
類  
の  
言  
葉  
を  
聞  
い  
た  
こ  
と  
が  
あ  
る

まさにその通りだ――

私はそれだ――

だったら仕方ないのかもしれない

当然なのかもしれない

罰を受けるべきなのかもしれない

でも、

こんな  
いやだ

——  
もう  
いやだ、

自由になりたいッ

こんな力欲しくないッッ

一人ぼっちはもういやだッッ！

笑っていたいッッ！！

誰かと一緒にいたいッッ！！！！

幸せが欲しいッッ！！！！！！

幸せを持ってる人たちみたいになりたいッッ！！！！！！！！

だから、だから、

・・・・・・誰か

「助けてよ・・・・・・」



「――大丈夫」

突然聞こえた声に夢の中だった私の意識はすぐ覚<sup>覚める</sup>醒する。

意識を覚ますと、すぐさま声の主を探す。

声の主は見た目の年は自分とはあまり変わらないであろうぐらいの少年がいた。

彼は少し驚いていたが、言葉を続ける。

「君はもう、助けられてるから、救われてるから、もう、心配しなくても大丈夫だよ」

優しく、暖かいその言葉に思わず気が緩みかけるが、頭をブンブン振り、この人を睨みつけ、問う。

「……貴方は誰……」

~~~~~

あの研究所をぶっ潰して、少女と共にあの場所からある程度の距離がある場所まで来たが、そこまで大変だった。

まずあの警備員をぶっ飛ばすためにかなり大きな力を使ってしまったため、研究所が崩れ始め、脱出するのはかなり大変だった。

次にこの子の服だった。研究所に服になるものがあつたため（リ

リカルなのは f o e c e で第一話にリリィが着てたっぽいの）
それを使ったのだが、あまり姿を見ず着せるのは大変だった。（変
な事考えてないからね！）よく目が覚めなかったもんだ、こちらは
それで助かったが、・・・・もしかしたら強力な睡眠薬かと思い
調べたが、それではなく純粹に眠っていただけであった。

そして今にいたる。

「どうしようかねー、いつまでもここにいるわけ行かないし、この
子もなかなか目を覚まさないし、暇だ」

ゴロゴロと暇をもて遊んでいると、少女に動きがあった。

「お、目が覚め――――――――」

「助けてよ・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

―――――たった一言、その言葉だけで、元からあまり音などな
かったこの世界がさらに静まりかえるかのように感じてしまう。

その言葉があまりにも重く、悲しかったから――――――

「大丈夫」

彼は思わず声をかけてしまう。その言葉に急に少女が目覚めます。

それに少し驚くが、それでも続ける、その言葉を

「君はもう、助けられてるから、救われてるから、もう、心配しなくても大丈夫だよ。」

その言葉に一瞬少女はポケーっとなっていたが、すぐ頭をブンブン振り、キッと睨み付けてくる。思わずその仕草がかわいく感じてしまう（変な意味じゃないぞ）。

「・・・・・・・・貴方は誰・・・・・・・・」

そう警戒心と敵意全力全開で問い、その行動に少し考え込む。

（ここまで警戒してくるなんてね、まあ、そこまで酷い事をされてきたんだろうからな・・・・・・・・）

そうになると色々難しくなる、なにせ自分もやつらと同じ人間だ。警戒させないようにするのも難しいだろう。

「そう、だねえ・・・・・・・・」

とりあえず彼女の質問に答えることにする。

「誰って言われても、ぼくはただの通りすがりだからねえ、ただのt「それは嘘だよ」・・・・・・・・」

真っ向から否定された

「い、いや、そうはつきりと否定されると少し気ずつくんだけど」
私の前にいる時点でただのはもうありえないもん」・・・・・・・・・・」

その言葉に目を細める。

そして、少女の目を見つめる。

美しく、綺麗なエメラルドグリーンの瞳、

そしてその瞳にうつる闇。

研究所での拘束、第一級、先ほどの少女の言葉、キーワードが繋がっていき、ひとつの答えが出る。

「要するに君は僕が君を狙ってきたと思ってるんだね？」

そう聞いた。

私はなにをやってるんだろう。

こんな人の相手なんかせず、すぐここから逃げだせばいいのに。

すると彼の目が細くなりじっと自分の目を見てくる。私もじっと彼の眼を見つめる。

彼の眼はオッドアイだった。私から見て左が白、何色にも染まりそうもない、純粹で純白の白。右が黒、すべてを飲み込むような闇のような、だけど優しさを感じる真っ黒な黒。それが彼の眼だった。そしてその眼には、

—————闇があった。

（————私と、同じ？ ううん、違う、闇の意味が違う。だけど、その闇の深さは……………）

「要するに君は僕が君を狙ってきたと思ってるんだね？」

突然の発言に驚きながらも、自分の意思を理解した彼に答える。

「…………そう、そういうのだよ、あなたただで私の力をn」最初に言っておくけどさ、」……………」

いきなり言葉を遮られた。彼の顔をにらみつけるが、その顔はしてやったりと出てる。…………先ほどの恨みだろうか？

「僕が君の事を知っているのは、あそこに捕らえられてたことだけだよ」

……………ハイ？

この白黒さんは一体何を言っているのだろうか？ 知らない？

「？」

少女の完全フリーズの意味がよくわからず、彼は？ マークを浮かべてしまう。

—————だとしたら、それはそれでいいのかも知れない、

「・・・・・・・・そ、知らん「そういや、君の名前って何なの？」・・
・・」

・・・・・・・・いい加減この人に切れていいだろうか？

何とか湧き起こる怒りを抑えながら、^空上を見る。

「・・・・・・・・ラ・・・・・・・・」

「え？」

「ソラ・・・・・・・・私の名前はソラ・・・・・・・・。」

「ソラ、か・・・・・・・・アレ？」

彼はそのまま^空上を指す。

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・」

そう少女は真実でも嘘でもない答えを出す。

（名前なんて・・・・・・・・考えたことなかったな・・）

ソラはそのまま^空を見続ける。

「ソラちゃん、ね、・・・・・・・・そういやさ、」

ちよっと言いくいけど、と付け加えながら彼は申し訳なさそうに聞く。

「君、何であんなところに捕まってたの？や、言いたくなくやいけど・・・」

ソラは無言のまま空を見続ける。その無言の時間がなぜか果てしなく、息苦しいものと彼は感じてしまう。タブーに触れちゃったかな？、と思いながら彼女にびくびくしながら待っていると、

「私の・・・力のせい・・・」

重々しくだが、ソラは口を開く。

「・・・力？」

「そう、力――

世界をも滅ぼすほどのすごいの、ね。」

思わず眼を見開く。

その行為に少女はフツ、と力なく笑う――――

「驚いちゃった？こんな年もあり行かない女の子がそんな力を持つてるなんて？」

冗談でも言ってるかのように、まったく空っぽの、何もない、無
と言う表現しかできない表情で少女は言う。

しかし――――、

（いやいや、冗談とも取れないし、年も行かない女の子って、言っ
てられないでしょこりゃあ・・・）

とある学園都市最強の能力者、とあるグルメ時代の四天王や美食
會や名の知れた美食屋、とある喫茶店の小太刀二刀御神流の後継者
達、とある海賊時代の『覇氣』を扱う者達でさえ放つことのできな
い霧囲氣、それは決して殺氣や怒氣、覇氣などではない、ただ異常
な霧囲氣

――――ただし、それは真正銘人ではない者が放つ異常な霧
：
囲氣。

———これでわかったよね………

少女は静かに思う。

（冗談とかではなく、本当に世界をも滅ぼす力を私は持っているんだって………）

彼女の考えどおり、その異常な雰囲気であれば誰でも理解できるであろう。

（このまま慌てて逃げ出すか、綺麗ごと抜かして離れるか、さてどっちかな？）

彼女は知っている、人間はどこまでも汚く、どこまでも愚かである事を。

だからこそ少女は――

(……人間なんて、嫌い、愚かで、汚くて、そして欲望の塊。この人だってそうだよ、この人もほかのやつらと同じなんだから――)

だが――、

「えー、あー」

「そのー、なに？その力って・・・・・・・・一体どんなの？」

「・・・・・・・・ハイ？」

「いや、だからその世界をも滅ぼす力ってどんなのかなーって思っ
て。」

「い、いやいや、他に気にすることあるよ貴方！」

「えっ、何？」

「な、何って素で・・・・・・・・、怖くないの貴方！？こんな化物が
目の前にいるのに、怖くないの！？」

「化物って、・・・・・・・・ゴモラとかっただたらカッコ良くない
？」

「知らないから！ってゆーかゴモラって何！？」

「うんっ！！すごく良いツツコミ！やっぱボケにはツツコミがいなくちゃねー」

意味不明なことを言いながらうんうん一人うなずく少年にどんなわけがわからなくなってしまう。

「何なの、貴方、何で怖がらないの「君が優しいから」…………ふえっ？」

今、この人はなんていった？優しい？どこからそんな————

「まず最初に、」

考えてる途中でいきなりしゃべりだしたので思わずビクついてしまふ。

「優しくない相手だったらこんな見ず知らずの奴に丁重に自己紹介とかしないし、

二つ目に—————」

…………この人、まるで私の考えを読んだかのように、

「自分の危険性とかを教えてください。そこから少なくとも、悪い奴ではないと判断できるね」

「そう…………」

…………もうなんだかどうでも良くなってきた。

「ああ、あと」

何

いい加減対応に疲れたのか、ゲンナリしながら彼を見る。

気に吹き飛ばすものだった。

だが彼の言葉はその疲れを一

「・・・・・・・・そろそろ、その狐の仮面、外したら？」

「・・・・・・・・えっ」

少し言いずらそうにしながらも、言葉続ける。

同時にそれは私の中の何かを崩し始めた・・・

「な、何を・・・」

「化物とか、世界をも滅ぼすとか、そう君は君自身のことを言うてるけど、実際には違うでしょに？」

——やめて

「・・・違う、私は化物——」

「確かにそうなのかもしれないよ、だけど」

——やめて

「厳密には違うだろ？」

「・・・違わなくなんか――」

「違うだろ？」

――やめてっ

「それに世界を滅ぼす力があるなら——」

「やめてっ！！！」

今から彼の言うことは、おそらく彼女の幻想を殺すであろう。

心の支え

だが、それでも言わなくてはいけない——

人は時に、現実になんて耐え切れず幻想に逃げてしまう。それは彼女のような、人でなくとも心を持つものであればありえるであろう。彼はそのやり方について否定はしない。だが正しいとも思わない。

——しかし、彼女の生きている幻想は逃げるためではない、その幻想の中で生き続ければ彼女は間違いなく——

「――なぜ、あの研究所から脱走しなかったの？」

「――ッ！！！」

彼は、彼女の瞳の闇を見た瞬間、わかったことがあった、それは、
「彼女は人間を信頼できない」。なのになぜあの人間だらけの場所に
彼女はいたのだろう、また、辛いことをさせられているはずなの
に、なぜあそこにいたのか、力があるのに、それは――――

「君はその力を使うことができないんじゃないの？」

「・・・・・・・・・・そうだよ」

ぼそりとつぶやく。

「・・・・・・・・・・私はこの力を使うことができない、

私は、無力なの、私は、何もできないの！私はっ、抗うこともす
らできないの！！」

彼女の生きる幻想、それはへ自分のことは自分でどうにかできる
✓という名の強がりである。自分が狙われていて、それを自分でど
うにかできると勝手に決めつけているだけである。それではどうに
もならない、逆に自分を傷つけるだけである。

「・・・・・・・・・・気づいてたもん、最初から、・・・・・・・・だけどっ、
私は、何も、グスッ、できないっ。何もっ、ヒックッ、できないっ・

・・・・！だからっ、ああするしかなかった！ああするしかっ、耐えれなかったからっ・・・・・・！」

少女は自分の愚かさ、無力さに自分を恥じ、自分を情けなく思う。そしてあまりの理不尽さに、涙を流す。

殺す。

——だが英雄^{ヒーロー}は、その幻想をもぶち

ポンッ

「? ?」

——
自分の上に何か暖かいものを感じ顔を上げる、そこにいたのは——

「そんな時は、誰かに頼れば良いんだよ」

「まぶしい笑顔で自分の頭をなでてくる彼の姿が合った————」

「頼れって、それじゃあ貴方がっ!」

「言ったよね、へ大丈夫、君はもう、助けられてるから、救われて

るから、もう、心配しなくても大丈夫だよ。∨って」

「・・・・・・・・・・！」

「それにさ、何もしないに言ったわけでもないよ、僕にはちゃんと、
護る力がある。」

—————それに、どうやって君を研究所から脱出
させたと思う？」

あっ、と間の抜けた声を出す。ずっと気になっていたこと、どう
して自分はここにいいのかと言う疑問。そしてその答えが今の少女
に示すものは—————

「・・・・・・・・ほんとに良いの」

「ん？」

「私が、貴方に—————」

「ちょっと待って」

突然彼が言葉を遮る。

何事かと思い、彼が見ているところを見ようと立ち上がると、

「・・・・・・・・予感的中・・・・・・・・」

無理やり伏せさせられた。

「な、なにすr」どうやら相手はよほど君の事、じゃなくて君の力

が欲しいみたい」

そして理解する、彼の行動の意味を。

——ズゴゴゴゴゴゴゴッ

その音と共にやってきたのは研究所によって作られたであろうソラの捕獲隊があった。

——ものすごい兵器と共に。

「……戦車やら装甲車やら、ってホントにマンガかこの世界は！」

「何でこんなに……あなた、心当たりある？」

「まあ、軽く研究所をつぶしたことぐらいしか……」

「それだよ！てか何て事してるの貴方！？まあ、半分か、それ以上は私だろうけど……。」

「僕があんだけやっというて君がいまだ半分以上占めるってドンだけ！？」

思わず突っ込んだじゃったよ！仕方ないもん！など、言い合っていると、

ウィーーン ガチャンツ、ウィン ガチャツ

「「？」」

その音の元を見ていると。

「……………Transformers？」

「……………この世界ってホントにマンガ？ううん、私が言えないか…………」

二人はトランスフォーマーのように変形した装甲車などに啞然としてしまう。

「しかもトランスフォーマーの映画みたいにかなり凝った物だし、よく作ったなあ…………」

「感心してる場合じゃないよ！」

思わず彼がそのロボットに見とれてしまってたため、ソラが慌てて注意する。

『そこにいる貴様ツ！すぐにDestiny Childを我々に渡せ！渡せば命ぐらいは助けてやっても良いぞツ！』

「…………とまあバレバレの嘘を言ってますね」

「ねえ、どうするのってちょっと！」

突然、身を潜めていた彼が立ち上がり、ずかずかと捕獲隊に向か

って歩き出す。止めた時にはもう遅く、すでに彼らの前に立っていた

「まったく、女の子一人のために軍顔負けの装備と人数で追いかけますか普通？それにはいどうぞって易々渡すわけないっしょ？」

「女の子？・・・なるほど、貴様は知らないのか！」

「？何を？」

「いいだろう、どうせ死ぬんだ教えてやろう。貴様が女の子といった奴はな、人間じゃないんだよ！」

その言葉にソラがビクンと反応する。少年は眉を顰める。

「そいつはな、人間ではなく

——————精霊なんだよ！」

「・・・精霊？」

「そう精霊だ、それもただの精霊じゃなくその頂点に立つ者、精霊王だ！」

「精、霊王・・・。」

彼は静かに後ろにいるソラを見る。彼女は縮こまるかのように身

を抱き寄せている。

（精霊、よくファンタジーゲームとかであるよな、確かその精霊が水の精霊なら水の力を使えてって……）

「まさか彼女の力って……」

「そう、そいつは大自然の力を宿すのさ！まあ、本人はその力を使えないみたいだな。」

（だけど世界をも滅ぼす力って一体……）

「……聞くけど彼女は一体何の精霊？精霊は自然などの物から具現化した存在。なら彼女は……。」

「何だ聞いてないのか。そいつは星が具現化した存在だ」

「ブッ……！」

そのあっさりした言葉に心底驚いてしまう、なぜなら、星から具現化した存在となれば……

「わかるだろ？そいつは大自然そのものの力を秘めているんだよ！大地震、大嵐、大津波、火山の大噴火、はたまたにはビッグバンの力まで秘めてるんだ！ハハッ、どうだ！そいつのそいつの恐ろしさと重要さがわかっただろう！」

奴の言ったとおり、星が具現化したとなればそんな事を起こせるかもしれない、だがそのほかにも地脈やマナなど神秘的な力もある。それ全てを司るにが彼女の力なら……

「まさしく世界をも滅ぼす力だね・・・」

彼はスッと眼を閉じる。

「さあ、分かったか！？、分かったならさっさとDestiny Childを渡せ！」

「・・・ああ、分かったよ。」

（ッ！！）

ソラは大きく目を開く――――

「――――絶対にお前らみたいな変態クソヤロ
ーどもに渡しちゃいけないことがねえッッ!!!!!!!!!!」

「なっ！」

「！」

その言葉に捕獲隊、ソラは衝撃を受ける。

「貴様っ・・・分かって言ってるのか!？」

「残念！僕はバカだけどアホじゃないんでねえ!!」

「ッ！、バカめッ！全員、撃てえッ!!!!!!!!」

全捕獲隊員が杖を、メカが発射準備に入る。ソラが後ろで何かを
叫ぶ。そんな中、彼は目を閉じる。

たのは守る力

—— かつて少年がこの力を手にした時、願っ

戦士の能力と技

—— 願った力は、自分が憧れる 仮面の

人の能力と技

—— 願った力は、自分が憧れる 光の巨

よかった、願っというて。守りたいものが、守れる――――

「――――ウルトラシールド!!」

迫りくる魔力弾を全て防ぐ。

「何い!」

「・・・・・・!」

ソラは彼のその技を見てあることに気づく。

(あの力って・・・・・・・・!!)

————そして目にする、彼が首から掛けている自分と同じ
ネッククレスを。

「クッ、ためらわず撃てえ！いつまでも続けられないはずだ！」

そのまま捕獲隊は撃ち続ける。

「フウッ」

(ためらわず撃ち続けろって、そっちのほうエネルギー切れになりそうだけど・・・・・・・・、けどこのまま防いでばっかじゃ——
——)

チラリと後で呆然としているソラ見る。

「カッコが、つかないもんね！」

シールドを一旦切ると、すぐさま上空に飛び上がる。

「飛行魔法!？」

「あんなガキがか!!?」

捕獲隊の者達が様々な反応をしているが、そんなことには気を止めない。

両腕を腰に引き、バツ、と手前でクロスさせた後、腕を大きく広げて光を集める。そしてL字型に手を組み、

「ゼペリオン光線!!」

光線を発射する。

その光線はあたりの捕獲隊を一気になぎ払う。

「「「「「「「「ぎゃあああああああああああああ!!」
「「「「「「「「」

「な、何だ今のは!?!」

「今ので一気に半分やられたぞ!!?」

「ありゃ、さすがに全滅までとはいきませんでしたか。」

ムゥ制御がうまくいかないな、と地面に降り立って相手魔導師たちを見渡す。

「オオオオオオッ!!」

「うおっ!?!」

油断していたため、横からの攻撃に体制を崩してしまう。

「くらええええええつ!!」

「くらうか!」

すぐさま『ライダーキック』で蹴り飛ばす。

「げぶっ!?!」

相手はかなり吹き飛ぶ。

「おい、大丈夫か!?!」

「あ、ああ、だが分かったぞ、やつは見た目どおりガキで、戦いも素人だ! 優勢を保ってられるのも今のうちだ!」

「「「オオオオッ!!」」」

今度は腕を十字型にクロスして、

「「「ぎゃああああああああっ!?!」」」

『スペシウム光線』で迫ってきた相手をなぎ払う。威勢は良かったものの、一気に撃退。

「どっちかつーと集団で来てもらうほうがこっちはやり易いんだけどね。うーん、だけど確かにこのままじゃまずいな、どうしたもんか・・・」

「あなた!」

「ん？っておおいっ！ソラちゃああああん！？」

隠れているはずのソラがいつの間にか近くに来ていたため、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「何してんの！危ないっしょ！早くどっかに隠れて！」

「大丈夫だよ！それより貴方、今の状態結構ピンチじゃないの！？」

「まあ、そうなんだけど・・・」

「だったら、

――私と完全契約して！」

「・・・ファイ！？」

するとその言葉が聞こえた魔導師達はかなり焦りながら口々に言う。

「完全契約だと！？」

「バ、バカ！やめろ！」

「・・・・・・・・・・・なんか色々やばそうなんだけど、まさか契約したら過去をあげなきゃいけないとか、魔女になるまで戦い続けろとかじゃないよ・・・？」

「ちがうもん！お互いデメリットの無い契約だからこれ！」

それに男なのに魔女って……。……。いや、なんか急に頭に浮かんだんだ。などと話していると、完全契約の言葉を聞いて焦っていた魔導師達が再び一斉攻撃を仕掛ける。

「ゲッ、まず！ウルトラシールドで——————」

「完全契約したほうが効率が良いよ！私が唱えることを繰り返して！」

「だーっ！カーミー！分かったよ！やりやいいんでしょやりやあ！」

リント語が若干混ざりながら、自暴自棄に叫ぶ。

「赤き炎よ燃え上がれ」

「えーと？赤き炎よ燃え上がれ」

魔力弾が放たれる——

「藍き水よ清らかに流れよ」

「えー、青き水よ清らかに流れよ」

数え切れないほどの魔力弾が上空に上がる————

「黄色き雷よ凄まじく轟け」

「き、黄色き雷よ激しく轟け（ピカチュウが浮かぶ（汗））」

魔力弾が降り注ぐとする――

「蒼き風よ激しく吹き荒れろ」

「蒼き風よ激しく吹き荒れろ」

いくら完全契約を早くやっているとはいえ
そろそろやばいためさらに早口になる――

「紫の地よ静かにうなれ」

「紫の地よ静かにうなれ（もしかしてこの色虹がもと？）」

魔力弾が迫り来る――

「緑の草よしなやかにさざめけ」

「緑の草よしなやかにさざめけ」

そしてついに――

「輝く光よ邪悪なる闇をも打ち破るほど輝け！」

無数の魔力弾が直撃する――

《・・・・・・・・ねえ》

「・・・・・・・・ん？」

《実は・・・・・・・・あなたの力ってね、私から来てるの。
このネックレス、〈絆の証〉を介して、ね》

「……やっぱそうなんだ」

《……気づいてたの?》

「僕が初めて力を得たのはさ、このネックレスをはじめて掛けたときからなんだよね。それに君が同じものをしてたから、もしかしたらってね。まあ、そう考えたのは君が精霊王の力を持っているって聞いた後だけだね」

《うん、絆の証これを介して私の半分くらいは貴方に送られてるから》

「星の力を半分……道理で制御しにくいはずだ」

《フフツ、特訓しなきゃね……あとね》

「ん?」

《私、自分の名前を言ったよね、》

「言ったね。」

《あれ、実は半分嘘でもあるの》

「……なんとなくそんな感じがしてた」

《ふふ、そっか》

「ちなみにもう半分は?」

《本当のこと。だって今日から私の名前はソラだもん♪》

「そっか、よかったね。」

少年は少女に優しく微笑む

「まあ、そろそろ帰ろっか。」

《うん、・・・・・・・・ねえ》

「? 今度は何」

《あのね、――――》

少女はいたずらっぽく笑いながら

――――問う

《あなたは誰?》

少年はちよつと驚きながらもクスツツと笑うと答える。

「僕は、通りすがりの小学生、左風 ショウだよ」

捕獲隊の魔導師や、援軍に來た者達を全て行動不能にし、全滅させた大自然の王は、光り輝く純白の翼を羽撃かせながら、帰るべき場所に帰る――。

『Hyper Clock Up』

（余談）

ソラ「ねえ、ショウ」

ショウ「ん？」

ソラ「貴方私のネックレスを見たって行ってたよね」

ショウ「うん、そうだけど？」

ソラ「研究所で私が全裸だったとき？」

ショウ「そうそう、その時になってあ……」

ソラ プルプルプル

ショウ「い、いやね！？ あれは決して疚しい気持ちで

見たわけじゃないんだよ！？ ちゃんと手で見れないようにしてた
し！

まあ、ちよつとて言うかけっこー見ちゃったけどってあっ

ソラ「バカアーーーー！！！！」

ショウ「ごぶはあっ！」

プロローグ あなたは誰（後書き）

後書き プロローグは完全に終わりました。そしてほとんどの謎も全て解けたと思います。一樣世界観はリリカルなのはなんですが、全然キャラクター出せてませんね（汗）。しかも時にシリアスのつもりがほぼシリアスになってますし（汗）ですが！次はほのぼのな上、出本編に突入します！

ご期待ください！

あと電王とまどマギは今のショウ達の世界ではまだ放送されていません。

面白そうだからかけたと言う作者の都合です。

リント語

現代語

「カーミー！」

Ⅱ

「あーもー！」

キャラクター紹介

名前；ひだりかぜ左風 ショウ

日本人

年齢；不明
(ジュースをこぼした後がある)

性別；男性

好きなもの；食い物（食えて味が悪くなければなんでもOk!）、
仮面ライダーやウルトラマンなどの特撮物、マンガやアニメなど、
家族、友人、仲間小さな子供、笑顔

嫌いなもの；悲しみの涙、笑顔を奪う者、争い、大人、自分の親

性格；基本のんきでのんびり屋

容姿；眼がオッドアイであり、右側が純白の白、左側が真っ黒な黒
髪の色は日本人らしく黒色

（無印編開始時）身長はクロノより少し大きい程度

顔立ちは良い、ただ女装などをすると・・・・・・・・（シヨウ「ヲ
イツ!？」）。

能力；仮面ライダーシリーズ、ウルトラマンシリーズ（ほぼ平成）の技・能力の多くを所持している。

そのため、リンカーコアはないが、例えば、クウガのアマダムの力（封印エネルギーなど）、ファイズのフォトンブラッドの力、ブレイドのアンデッドの力、響鬼の清めの音や気などの力、電王の自身のオーラを変換させたフリーエネルギーの力、キバの魔皇力など、仮面ライダーの力多くを宿している。

ウルトラマンの場合、光エネルギーを宿している。

ただしこれらの力は別々の力ではなく、『一つの力が上記の力全て』であり、そのため、ブレイドの技を使えば、『ブレイドの力』だけが減ると言う訳ではなく、同一に全ての力が減る、言わば全ての力が融合したようなもの。

・・・・・・なんだかんだでむちゃくちゃな奴である。

だがこれらは、あくまでソラと契約したことにより得た星の力の半分から再現したものであり、仮面ライダー、ウルトラマンの技・能力だけではない（スーパージンや、とあるシリーズ、そのほかetcの技が出る可能性も）。

あくまで、星の力で仮面ライダー、ウルトラマンの技・能力を再現できるため、本人がそう使っているだけである。

一見、便利を通り越してチートに見えるが、これらの能力にはな

んだかんだでけっこう制限や限界がある。詳細は今後の物語で明かされていく。

技…仮面ライダーの技多く（銃撃以外）

ウルトラマンの技多く

武器；重醒剣 キングラウザー

キングラウザーを詳しくは [wikipedia](#) などで。オリジナルの性質に加え、本編では、他のライダー斬撃技にも対応するため他のライダーの剣の性質も持つ（例えば、電王の必殺技、一エクストリームスラッシュ（俺の必殺技パート2）の剣先を分離させ遠隔操作で敵を切り裂くと同じように、キングラウザーの剣先が分離する）。切れ味もすごいが、耐久力などの硬さもハンパない。

この剣には多少の自我意識があり（魔皇剣ザンバットソードの様な）、もし、ショウカ、剣自体が認めた相手ではない者が使おうとしても使うことができない（持ち上げられないほど重くなったり、

火傷する様な熱さになったりなど）。

また、ショウが暴走したりなどした場合、上記と同じことが起きるか、剣自体が暴れだす。また剣を振り降ろしてもあたる直前に何かに弾かれた様に剣が吹っ飛ぶか、すり抜けるかである。

自我意識があるため、剣自体がショウと離れた場所にある場合、ショウが求めた時か、勝手にショウの手元に行く。その際、相手にぶつかってダメージを与える事もできる。

この剣は、セブンのアイスラッガーのように投げて攻撃にも使える。ショウが操ることもできるが、剣自体の判断で飛ぶことができる。

デバイス（？）…エクストリーム

仮面ライダーWでてきたエクストリームメモリモデルの（一応）デバイス。エクストリームを詳しくはwiki pediaなどで。

人や物などを一粒子化（デジタル化）して取り込むことができ、それを使って、ショウやソラの武器を内蔵・保管・運搬している。AIはエクストリームメモリとオートバシンのがモデル。言わば性格などはその二つが合体したようなもの。

モデルのエクストリームメモリが単体でウェザー・ドール・パント撤退させたほどの戦闘力を誇っているので、エクストリームの戦闘力もそれ同等に強い。ちなみにだが、モデルとなったエクストリームメモリはサイクロン・ジョーカーメモリを取り込むことによって真価を発揮するため、エクストリームも似たような状態ではないかと思われる。

さらにエクストリームがモデル同様『謎が多い』や、『万能』を願って生み出されたものなので、所有者本人さえ知らないことができてたり……。ここまで来るとデバイスを超えたデバイスとなってしまうている（汗）。

備考

本来は、どこにでもいるただのんきなだけの平凡な少年だったが、ある日、小さな次元震に巻き込まれ、研究所でソラと出会う。『絆の証』は自分の家に元から置いてあったものであり、たまたまそれが気に入ったから首につけたところ、星の力の半分を手にした。（本人は星の力だと知らなかったが）非常にのんきだが、それを逆手にとって、いかなる状況でも落ち着いた判断ができる（なかなかそうは見えないが）。他人に影響を与えやすく、変わっていった人物は多い（ソラなど）。

実は、意外と悩みが多い。例えば、非常に鈍感なことやら（自称超鈍感帝王）。本気で切れると、前が見えなくなり、暴走に近い狂った状態になることや。小さな子供好きなせいか、ロリオンやらシヨタコンやらと呼ばれることなど（そのせいか、若干その気になってきたらしく、またそれも悩みである）。

実は案外モテており、場合によれば、とある唯一 I S が使える男や、ツンツン頭の不幸野郎に引けをとらない。

特撮ものやアニメ、マンガなどが大っ好きであり、小さい頃からまねたりしているため、癖やセリフを出すこともある。が、それらは意識してのことであり、時に仮面ライダーなどでの名言などに近い言葉を言うが、それはあくまでシヨウが自分自身からの言葉である。

異常なまでに大人を嫌っており、これには過去の出来事に関係し、さらにこの暴走にはある意味があるのだが……、それはまた今度。

近距離、中距離、長距離と戦えるオールラウンダーだが、実際には接近戦を得意とする。また、持久力、耐久力が強く、本人も自信がある。

—————余談だが、じつは、容姿はとあるハーフボーイルドな人物に似ており、度々ネタにされてる。

名前；ソラ

精霊王

年齢；不明（赤いマークが書かれて見えない）

性別；一応、女性（ソラ「一応って!？」）

好きなもの；シヨウ、手料理（主にシヨウの）家族、友人、仲間、
笑顔

嫌いなもの；悲しい涙、笑顔を奪う者、愚かな人間、争い

性格；落ち着いた性格であり、結構まじめ。

意外と子供っぽい？

容姿；はっきり言って美少女、それも十人中住人が振り向くほどの。シヨウにはもったいないほど（シヨウ「聞こえたぞ！」）

顔は日本人だが、瞳の色はエメラルドグリーン、髪の色は桜のようなホワイトピンク。

（無印編開始時）身長はなのは達より少し小さい程度（若干気にしてる）

能力；星の力を持つが、自分では使えなかった。使うには、『絆の証』で契約した契約者の助けが必要、契約した者には、星の力を与えることができる（シヨウとの場合は約半分個）。

シヨウと契約したため、自身の星の力を使う事ができた。技・能力は特に決めていなかったが、シヨウの進めにより、仮面ライダー・ウルトラマンのを使用することにした。そのため彼女にもシヨウと同じ力が宿っている。だがシヨウ同様、能力には制限や限界がある。それらは同じく今後の物語で明かしていく。

技；仮面ライダーの技・能力（銃撃・物理技のみ）ライダーキックなどを少し

ウルトラマンの技・能力を少し

武器；醒弓カリスアロー 醒鎌ワイルドスラッシャー装着状態

詳細はwikipediaで。特性はショウのキンググラウザーと似たのを持つ。

デバイス（？）；エクストリーム

ショウと合同で使っている。

備考

星の精霊王であり、非常に強大な力を秘めている。星が生まれた時、彼女も生まれており。生まれてからずっと一人で世界を旅してきた。その途中、彼女の強大な力を狙うものたちが次々と沸いてくるかのように現れ、つらい過去を生きてきた。自分の力のせいで滅んだ世界などがあり、その事から皮肉を込めて『化け物』と自称していた。

皮肉にも、そのことから彼女は時空管理局から『ロストログア』扱いされている。また、人間の闇をいやと言うほど見てきたため、人間をまったくと言っていいほど信用していなかった。だが心のどこかで『絆の証』を手にし、自分と共にいてくれるような一相手（運命の相手）を求めている。そんな中、とある組織に捕まり、研究所に連れ去られていた。それからしばらく研究材料にさせられていると、『絆の証』を持った一ショウ（運命の相手）と出会う。

ショウの事は全面的に信頼している。そんな彼の影響もあってか、徐々に人間に対する見方も変わってきている。しかし、今だどこかで自分の『化け物』を引きずっている。

まじめな性格もあって、一番の常人。そしてツッコミ役（ほぼショウ専用）。

遠距離戦を得意とし、ショウ並みに強大な力を持っているが、あまり戦闘力は強くない……。はず。そのためサポートに回ることが多い。主な理由はショウが彼女を戦闘にあまり入れたがらな

い事、他には、彼女が遠距離を得意とするため、後から彼女が撃ち、シヨウが攻め入ると言う理由もある（本人は不満らしい）。

絆の証きずなのあかし

だが、何のために、そもそも誰かが作ったものなのかさせ不明の誕生不明の物。その力やほかのことも多くも謎に包まれている。一つの話では精霊王、すなわちソラの願いを星が具現化したものではないかと言われている。

その能力は、精霊王と契約させ、そのために精霊王の持つ星の力を与える。そして、完全契約をすることにより、精霊王が契約者に憑依し、星の力を100%引き出すことができる。絆の証はその仲

介役と力の制御（力の流れなど）を務める。

与える力は精霊王と契約者同士で決めることができる。特に決めなければ約半分個になる。

これは彼女に相応しい人物を探し、その者を見つけると、運命が引き寄せ合うかの如く、その者のもどに行くと言う、例えるなら、運命を引き寄せあうガイアメモリと、心清き者しか装着できない霊石アマダムの特性を持っているともいえる。ちなみにだが現在の契約者であるシヨウは契約したおぼえがなく、また精霊王であるソラも契約したおぼえがないと言うだいじょうぶなのか？と心配になるようなことをしている。

絆の証は時空管理局ではロストログア扱いされている。

ここから先はある意味今作のネタバレとなります。

覚悟は良いですね？

謎の仮面の男

ショウやソラ、なのは達の夢や、幻影として現れる男。まるで彼らを知っているかのような口調で話してくる。どこかショウを連想させる。姿はシルエットとなつて見えないが、顔にXのマークが付いており、背中に翼の様なマントがあり、何より特徴的なのは

――展開したエクストリームが腰にあること。

キャラクター紹介（後書き）

幻空「とまあ、こんな感じですよ。色々細かいです」

ショウ「へー、良くできてるね」

ソラ「うんうん！」

幻空「どうやって来たかはあえて聞かないよ・・・」

ソラ「（ハイパークロックアップでなんだけどね）でも年齢鑑にジューズこぼすって・・・」

ショウ「仕方ないだろう！？そもそも意図的にやってる君の方が問題あるだろう！」

ソラ「年齢は女性にとってタブーなの！」

ショウ「てか君達^{精霊}に性別ってあったんだ・・・」

ソラ「何度もいうけど、あるよっ！！性別あるから！！」

幻空「空気になりかけてるんで喋ります。まあ、エルフにも性別あるしね」

ソラ「・・・エルフは精霊とは少し違うんだけど・・・」

ショウ「でもソラは星が生まれたとき生まれたんでしょ？ってことは年齢はろくじごぶはあっ！！」

ソラ「言うなバカアツ!!」

ショウ「な、何で……」

幻空「まあ、ショウはやられキャラですし」

ショウ「ひどい……。」

ソラ「主に自業自得だけどね。」

ショウ「そ、それより！僕の容姿に似てる人のことだけど！実際にはその人がモデルなんでしょ？僕の容姿!？」

ソラ「……逃げた。」

幻空「逃げましたねー。」

ショウ「うるせえ！」

幻空「まあ、確かにショウの言ったとおり、その人がモデルなんですよー。」

ソラ「やっぱり。って言っても分かる人も結構いると思うよ。まず名字のや名前とかで……」

幻空「ショウって名前は当初は『翔』って漢字のつもりだったんですけど、リリカルなのはって漢字の名前の人少なくない？って思ってた今の名前になったんです。」

ソラ「さらにモデルの人に近づいたね（汗）」

幻空「そんなとき、そんなとき！そして読者の皆様の中にはおそらく誰がモデルなのか分かる人もいます。今後の物語でそのモデルの人物を追及したいと思います。……シヨウの女装ネタと共に（ボソツ）……」

シヨウ「ちょっと待って！？今明らかに問題な発言があったと思うんですけど！？主に僕が男として大事なものを失う方向で！？」

はやて「ええやん、ええやん、面白そうやし」

シヨウ「はやて！？いつどうやってここに来た！？」

ソラ「実は最初るとき、連れて来てましたー。テヘツ☆」

シヨウ「テヘツ、じゃなあああああい！！」

はやて「何言ってるねん、人生には笑いがないと生きてけへんでー！」

シヨウ「その意見には賛成、だけどねえ、僕は！男としての！大事なものの！失うわけには――」

ソラ「そういえば、シヨウの顔って『女装すると……』らしいけど、それって顔つきはモデルの人の相棒さんみたいだから？」

幻空「いや、モデルの人の顔が『女装すると……』みたいなものになった感じだから」

シヨウ「聞けよ!!」

はやて「残念!もう決定事項やー☆」

シヨウ「うおおおおーっ!!」(無意識に井ノ原 真人風)

幻空「何がともあれ、こんなキャラたちですが、よろしくお願いします!」

シヨソ「「こんなって何だこんなってっ!!」」

はやて「どおどお」

第1話 出会（前書き）

やっと本編突入です！

第1話 出會

「今日も良い天気だね」

《そーだね》

などと周りから見れば独り言を言っているように見える事をやっているのは、私の契約者であるショウと、ショウの絆の証^{ネックレス}に取り付いた状態の私、ソラです。

なぜ絆の証^{ネックレス}に取り付いた状態かと言いますと、ショウ曰く私は目立つらしいからです。

あの研究所の脱出劇から数年、今はショウの住む世界、『地球』に私は身を寄せ、静かに暮らしている。あの組織も追ってこないのは、ハイパークロックアップの時空を越える能力に、どこに飛んだのか観測できない特性が付いてるからだと思う。だから、正確には、追って来ないと言うより、追って来れないんだと思う。

《ねえねえ、今日のお昼ご飯は何にするの？》

「うーん、そうだな、今日の昼飯は、「キヤアアアアアアアアアア避けて避けてええええええええっ!!」・・・・・・「ハイ?」」

思わず声が重なってしまう。突然の謎の悲鳴が聞こえた方向を振り向くと、

―――車椅子に乗った少女がものすごい速度で坂を降りてきた。

《のんきに言ってる場合じゃないよ!!》

仮面ライダーで夢に関する事だったような………。だからっ!! などとやっているが、暴走車椅子は近くまで来ている。

「って確かにこんな事やってる場合じゃないね。速くどかないと……。」

そこで彼の目にあるものが入る、それは、

――坂の先にある、海。

――アイ、キャント、フラアアアアアアアアイイイ!!

そんな叫びを上げながら海に突っ込んで行った青春ポイントを稼ぐ少年と、電波な少女が脳内で浮かぶ。このままではあの少女も同じ目に遭うのでは? そんな考えが浮かぶ。それは色々と危ない。実際に海に突っ込んで行った少年は右腕の骨を骨折している。さらに、目の前の暴走車椅子に乗った少女は車椅子に乗っているからして、おそらく足に支障があるのだろう。車椅子に乗っているからと言って必ず足が悪いという訳ではないが、それでも何らかの支障があると考えてもいい。そんな少女が海に突っ込めば……。

「不幸だ……。」

《えっ?》

するとシヨウは、右腕を腰に据え、左腕をを広げ、腰を低くする
と言う相撲の構えを取る。

「・・・俺の強さにい・・・・・・・・・・」

《え？え？やるの？やっちゃうの？気持ちは分からなくはないけ
ど・・・・・・・・本気？》

すでにシヨウと同じ思考にたどり着いていたソラはシヨウの行動
の意味を理解しながらも、戸惑ってしまう。

「お前が泣いたあああああああつ！！」

《本当にやったあああああああつ！！？》

少年はそのまま黄色いイマジンのセリフを叫びながら暴走車椅子
にぶつかる。

車椅子に乗っている少女、八神はやては思う、
なんでこうなったんや・・・・・・・・、

病院の診察の帰り道で、黒猫が前を横切って、そのまま道を通っ
たら坂に来たんで、少しブレーキを掛けようとしたらブレーキが効
かんくて、慌ててタイヤを掴んで止め様と思ったんやけど、そんな
はもう遅くて、掴めへんほどスピードがあってもうってって、ああ、

もう不幸やあああつ!! 皆さん避けてえええええええ!! やけど止めてえええええええ!! ああもう矛盾だらけやあああああああつ!!! ああ、前の人! 避けてえええええ!! やけど止めてえええええ!!

「・・・俺の強さにい・・・」

え? え? 本気? 本気で止めるん? 確かに止めてとは思ったけど・・・やるん?

「お前が泣いたあああああああつ!!」

「ホンマにやったあああああああつ!!?」

そのまま少年は暴走車椅子にぶつかる。

「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬつ!!」

ショウは衝撃に飛ばされかけながらも、何とか踏ん張る。だが暴走車椅子はなかなか止まらず、そのまま押され続ける。そしてついに、靴と踏ん張った時にできる靴後から摩擦熱で火が出る!

「《いや、ありえないからあああああああああああああああああ!!》」

「氣い、散らさせないでええええええええええええええええええええ!!」

「《はいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!》」

もはやカオス

暴走車椅子の速度は徐々に落ち始めるが、それと同時に、海との距離がもうかなり無くなって来ている。そして――――

「ギ、ギリギリセエエエエエエフウウウウ……。」

「《ふにやああああああああああ……。》」

崖っぶちギリギリで何とかこのmonsterを止める事に成功する。

「……………不覚ながら、クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ 栄光のヤキニクロードを思い出してしまった…………。」

「……………奇遇やな、私もや…………。」

《分かります。自転車でのシーンですね…………》

三人がそれぞれの感想を述べる中（ソラの声はショウにしか聞こえないが）、この奇跡を見ていた人たちから拍手が沸き起こる。

— ۱۵۵ —

夜天の主は、出会った

——大自然の王と、

ぢゃぢゃっつ!!!! あっぢいいいいいいいいいい
「-----!!!!!!!!」

ザッパーンッ!!

「海に飛び込んだああ-----っ!!!!??」

(なにやってるの-----っ!!!?)

.....せつかくの場面が台無しである。だがこれでこそボ
ケ&やられキャラ

※その後、ショウは助かった模様

第1話 出会（後書き）

後書き 後書き やっと本編突入です！長かった（書き始めてから四日ですが）そしてはやてのリリカルキャラとしての初登場！
まあ、多くの方はこの後の展開は読めますよね

第2話 Oの少女／それは兄のように（前書き）

Oの意味はO n l yです

第2話 0の少女／それは兄のように

「ホンマにすみませんなあ」

「イヤイヤ、これぐらい」

あの騒動の後、騒ぎを聞きつけておまわりさんが来たり、海に突っ込んでいったショウが海からヌツと出て来て（実際にはずぶ濡れになってあまりよく動けなかったせいだけど）それを見た人が「海坊主だーっ！」と叫んだせいで、さらに混乱に陥ったりして、・・・もはやカオス状態、大変な目にあった。

・・・にしても、あのおまわりさんすごかったな、騒動に対しては少しワタワタしてたのに、ショウを勘違いした瞬間、雰囲気が変わって、すごい飛び回し蹴りを放つんだもん。ショウはそれに對して「佐賀美^{さがみ}さん！僕は海坊主でもワームでもないわー！！」って叫びながら防いでたけど、（その前に、その佐賀美さんって人がすん止めしてたけど）ショウって、あのおまわりさんと知り合いだったんだ・・・

あと海坊主だと叫んだ人、海坊主さん達に謝りなさい。海坊主はただ海藻ワカメを被っただけじゃありません。

そして現在にいたる。

ある程度服が乾いたショウは、はやてって言う子を今家に送り届けている。理由としては、ブレーキが壊れてしまつて、またあんな事になったら大変だからとか。それにしてもこの子の慌て模様もすごかったな、ずぶ濡れになったショウに向かってごめんなさいを連発で謝って土下座しそうな勢いだったんだもの。・・・車

椅子に乗ってるのに器用だなあ……。まあ、あんな事があれば罪悪感を感じるのも分からなくはないけど、実際にはこの子が悪いわけではないんだけどね。それに対するシヨウの反応すごかった、はやてちゃん、涙目で謝ってたからめっちゃくちやワタワタしてたし。

……。変なこと考えてなかったよね？（黒笑）

ブルッ

「!?!?!」

「ん？どないしたんです？」

「え、い、いや、ナンデモナイヨ？」

「……。なんか、カナ表示になってる気が……。」

「あ、あはははは……。」

（何か今すぐく黒いモン感じたんですけど特に首あたりからっ！？）

などとソラが放っていた『黒いモン』にビクビク怯えていた。

「そうですか……あ、そ、そういえば左風さんって綺麗な
ネックレス着けてますね？」

へんな空気を感じたのか何とか話題を変えようとする。

「ん？これ？」

と自分の絆ネックレスの証を指差す。先ほどの恐怖はどこえやら……

それは、金色のSの逆文字で下部分ともう一つのS逆文字の上部
分がそれぞれくっついており、その間に赤、藍、黄色、緑、蒼、紫、
そして白の七色の宝玉が付いている（形状はウルトラマンパワード
のフラッシュプリズムの赤い部分と中心の青い石だけにした状態に
似ている。詳しく言うならフラッシュプリズムの赤い部分が逆にな
り、Sの逆文字型となっている。ただし、Sの逆文字と石の間には
少し空間がある）繋がりを意味するようなデザインである。

「せや、ホンマに綺麗やな」

と、少し絆の証に見惚れる。

絆の証の宝玉は七色の色が常に配置を変えている。だが宝玉だけ
ではなく、絆の証自体の美しさが見惚れるもので、ショウも当初は
これに見惚れていた。ショウがこれを気に入っているのもこれも主
な理由だ。

「そいや、この真ん中の石、なんかにくっついとるようでもないけ
ど、どうやってくっついとるん？」

「？さあ、？」

「あいたー!?!」

バシーンと綺麗なハリセンで叩かれた音がする。

「いたた、ハッ! 僕のボケに対する間一髪も入れない綺麗なツツコミに、どこからともなくハリセンを出してくるとは! . . . 八神殿、お主なかなかやるのお?」

「いやいや、そう言う左風殿こそ見事なまでのボケ、. . . やりますのお?」

「クツクツクツクツクツクツクツクツ」

《なんなのこの人達、怖いんだけど . . . 》

もはや完全に怪しい漫才人達に完全に引いているソラ。

「ま、楽しい漫才もここまでにして中は入ろや。」

「O u i , m a d a m e」

(楽しい ?)

二人の会話に明らかなおかしさを感じながらも、二人を見守るソラ――

「お邪魔します。」

「邪魔するなら帰ってや。」

「HA☆HA★HA☆HA★! 僕を家に入れたのが運の尽き! Trick or Treatだぜ!」

「なんでハロウィーンやねん!」

バシーン!

「あいたー!」

「……クツクツクツクツ」

――――先に不安を感じながら………

~~~~~

「はい、どうぞ」

「あつ、ありがとう」

取り合えずはやての家に上がったシヨウは、はやてからお茶をいただく。

「ふひー、そーいやはやてちゃんの親御さん達は?」

ただ何気なく、シヨウは聞いてみた。

「えっ？あ、あーちょっと今は留守にしておってな、今は居らんのよ」

(・・・・・・・・・・・・・・・・？)

そこでソラは何か違和感を感じる。

まるで何かを我慢しているような、

まるで何かを隠そうとしているような、

何かを・・・・・・・・・・

(あっ、そっか・・・・・・・・・・)

とたん理解する。その違和感を――

(この子は、かつての私に似てるんだ・・・・・・・・)

――かつての自分、それは誰にも頼らず、自分一人ですぐにかしようにしていた自分、誰かに迷惑を掛けまいと無理していた自分、それこそがかつてのソラ。

(この子は、抱え込んでるんだ・・・・・・・・全部、一人で・・・・・・・・あの子と一緒に・・・・・・・・)



自虐的にはやては笑う。

「……………確かに、君の嘘もあるけど。正確には、君と会ってからで気づいたんだ、君がムリしていることに」

自己険悪な顔をしながら少年は口を開く。シヨウがはやての嘘に気づかせることとは、

———なぜ、はやての診断に親が同行していなかったのか。

「……………そうになると、考えられてくるのはかなり少なくなる。

一つは、その親がそこまでの放任者か、もう一つ、は———

———」

「わたしの親、小さい頃になくなったよ。」

「……………」

もう一つは言う前に口を閉じようとしたが、その前にはやてがもう一つを、自分の口から言い放つ。

「いやー、すごいな左風さんの推理は、名推理やホント」

あんだけ少ない情報の中からよーたどり着いたわ、と述べる。

「わたし、小さい頃に親を亡くしとるからな、一人で病院に診察に行くんや、一人で、」



「・・・・・・・・・・はやて」

・・・・・・・・・・なにやっとなるんやろわたし・・・・・・・・

「それでいっつも一人でご飯食べるん。朝昼晩、毎日毎日、一人でいただきます言うて、一人でごちそうさま言うんや。それを何年も何年も、」

「・・・・・・・・・・はやて」

—————なに、口走っとなるんやろ・・・・・・・・・・

「一人ぼっちゃから、朝起きても、誰も、おらんし、やから、おはよう言っても、誰も返してくれへんから、意味がなくて、おやすみも、返してくれへんから、意味がなくて、」

「はやて」

—————言っても意味ない・・・・・・・・・・

「時々、行く、図書、館に行く、時に、いってきます、言ってもっ、行ってらっしゃい、言っつて、くれる人っ、がっ、おら、んからっ・・！、意味、なくてっ、ただいまっ、てっ、言っつても、おかえっ、りっ、言っつてっ、くれ、る、人も、おらんっ、か、ら、誰もっ、家っ、におっ、らんっ、からっ・・！、」

「はやてっ」

—————彼に言っつてどうする、何とかしてほしいとでも言

うんか？迷惑掛けるつもりか？困らせるつもりか？……

「わたしっ、ウツ、一人ぼっちやからっ……！、ヒック、一人ぼっちやか、らっ……！」

——もうやめて、こんなお互いがいやなだけや、もう……

「はやてっ！」

突然の大声にビクツッと体が跳ね上がる。

——フワッ

「あ、……」

すると、シヨウに抱きしめられる——

「………こんなさ、」

それはとても優しく、やわらかく、そして、暖かい。

「どこぞも知れない馬の骨の俺だけど、さ、これくらいは、できるよ」

ぽつぽつと、つぶやく。

「心の中に押しとどめてるもの、背負ってしまったてるもの、抱え込んでるもの、全部、吐き出しちゃっていいよ、それを全部、受け止めるくらいは、さ、」

抱きしめられる暖かさとは、また一味違う暖かさ、その暖かさの名は、

―――愛情

「できるよ」

その愛情は、まるで兄のような、父のような、強くて、優しく、そして、何より暖かい、

長き間、それを味わうことができずにいた彼女にとっては、それだけで、十分だった、全てを、吐き出すには、

「う、あ、あああああああああああああああああああああああ  
ああんッッ!!」

―――何度願っただろう、

―――何度夢見ただろう、

―――再び、この愛情を味わうことを、再び、この温もりを感じることを、

今、少女の欲望は、願いは、夢は、

——  
かなった

「………落ち着いた？」

「・・・・・・・・・・うん」

「全部、吐き出せた？」

コクッ

「そっか、よかった」

と、シヨウは微笑む。

あれから、はやては長い間泣き続け、まだ空の真ん中であつた日はすでに沈み、あたりは暗くなっていた。

そして――

(うううううううううう)

少女は果てしなく、困惑していた。

(あうう、なんて事しとるんやわたしは、い、いくらお父さんやお兄ちゃんのような愛情を感じたからって、いや、まあ、わたしにはお兄ちゃんなんておらんだけど、たぶんそれやろう。を、感じてあそこまになっちゃうなんて、も、もうシヨウさんに顔合わせれへ――)

「おーい」

「ひゃ、ひゃいつ!？」

「いや、ひゃいじゃなくて、」

ちょっと困ったような顔になる。いくら少女が顔を合わせれない  
と思っても、この少年はそんなことお構いなしに顔を合わせてくる。

「・・・・・・・・顔真っ赤だけど大丈夫？」

「ひゃ、ひゃいじょうびゅ！」

思いつきり噛んだ。盛大に。

ちなみにはやての顔の赤さかというと、顔全体がもうりんごちゃん、あるいはトマト？・・・・・・・・そこは読者の皆様に任せよう、のような赤さだ。

「そ、そう。・・・・・・・・ふむ、さて、はやてちゃん」

「は、はい」

何とか落ち着きを取り戻したはやてはショウと向き直る。

「今、太陽は下に沈んじゃってますよね？」

「うん」

まあ、確かに太陽は沈んどるなあ

「もう辺り暗いですよね？」

「・・・・・・・・うん」

・・・・・・・・なんかいやな予感がしてきた・・・・・・・・

「それでって、なぜ涙目になるっ!?!」

「ううん・・・グス」

グスッ、だってえ〜

「いや、ううん、じゃなくて!」

《あゝ、女の子泣かした〜。》

「そこ、うっさい! そもそも泣かすような事してないぞ僕!」

《シヨウ・・・あなたの罪を数えなさいっ!!》

「なんで!?!」

念話でワーワーギャーギャー言い合う。

「はあ、まあ、ともかくね、」

「うん・・・」

なぜため息をつくのか分からへんけど何とか涙を押さえ込む。やって自分勝手な理由でシヨウさんに迷惑かけたらあかんやんかな、ちゃんと我慢せな・・・

もう辺りが暗いならば、おそらく彼は家に帰ろうとするだろう。そもそも、ここまで付き合ってもらったのだ、これ以上はワガママはいえない。まだ寂しさを感じながらも彼が次に言うであろう言葉

に覚悟を決める。

———だが、この野郎は意図も簡単に二人の少女の常識を突き破ってくる

「……キッチン、使わせてもらうね？」

「《……ふあい？》」

二人の少女はなんとも間拔けな声を出す。その返事に、シヨウは面食らっていた。

「いや、ふあいじゃなくてさ……。」

「いやいや！ 別におかしいよ！ 私の反応！」



《そうだよ！おかしいのあなただって！》

はやてからしてみれば自分から言っているだけだろうが、シヨウにとっては、一気に二人から文句を言われている状態である。

「おかしいって、別におかしくないでしょ？」

「《どこがあ！》」

「だってさ、

————はやてはみんなで晩御飯食べたいでしょ？」

「あっ……。」

《………！》

その突拍子<sup>優しさ</sup>さに二人は息を飲む。

「というわけなのです。」

シヨウのサムズアップ！

「てことでキッチン使わせてもらいますよ？はやちゃん？」

「えっ？えっ？」

呆気にとられているはやてを横に、そのままキッチンに向かうシヨウ。

「えーと、これはこうで、あつ、こいつはこうね！」

既にキッチンの使い方を掌握し始めているシヨウ。そのシヨウにポケーとしながら近づくはやて。

「うーん、とは言えまだちょっと不安があるな、はやて！」

「は、はい！？」

突然呼ばれビクツとしてしまう。その様子に思わず笑いながらシヨウは、

――父のような、兄のような笑顔を浮かべ、

「晩御飯作るの、手伝ってくれない？」

そう、はやてに尋ねる。

その言葉にソラはクスツツと笑う。

一瞬呆気にとられたが、その言葉の意味を理解し、胸にこみ上げてくるものをなんとか制御しながら、

「うん!!」

全てを失った日より前にはできていて、  
全てを失った日からできなくなった、

――――心の底からの、飛びっきりの笑顔で  
答える。

## 第2話 Oの少女／それは兄のように（後書き）

ちよつと更新遅れました。色々ありまして（汗）。

今回ののはやてですけど、ちよつとキャラが崩れていると思う人もいるかもしれませんが。ですが、これは僕の見解ですが、こんな感じの反応をはやてはすると思うんですよ。まず、親の死を隠したことについては、それは、自分の親がいませんって一人ぼっちの状態で言えるとは思えませんもん。それははやてにも当てはまると思います。いくらのんきなどころがあるとは言え、それでも、ちよつとは警戒すると思いますから。

次にはやてのシヨウに対する甘え方ですが、これも当然何じゃないかなーって思うんですよ。本編ではシグナム達が来た際、甘えるとかそんな行為はあまり見ませんでしたけど、それは、これも僕の見解ですが、どちらかというと、シグナム達はいわゆる保護する対象、いわばはやてが彼女達の保護者になる感じだったからではないでしょうか？実際に衣食住の面倒をみるとかそんな事いつてましたし。ですからこう、いわゆる子供として甘えられる感じがあまりなかったからじゃないんでしょうか？ですから、父や兄のようなシヨウにはこう甘えるようにしてみました。実際にシヨウは兄的な存在として書くつもりですし。

しかし……あんなまほのぼの書けてねえええええ！シリアスが多い！ヤベーツス！！文章も視点の書き方も少し分からずらいし、それにはやての関西弁も少しちゃんと書けているか不安が……。

もうちよつと改良してみるか……。

そのためにこのことに関してのことなどでのアドバイス&感想お願いします！

### 第3話 守護者の約束

「ごちそうさま！」

———いつもなら、一人だけの言葉やった。やけど・・・

「ごちそうさま、そしてお粗末様」

今は、一人じゃない、今だけは、決して、一人じゃない。一緒にいただきますして、一緒にごちそうさまをしてくれる人がおる。やから、今だけは、違う———

それは、今だけかもしれない、だが、それでもはやてにとっては、例え短い時間だったとしても、とても、幸福な時間だった。

「お皿、洗っとくぜー」

カチャカチャとシヨウは、音を立てながら皿を組み上げ、台所に持っていく。

「あ、ええよ、そんなにしなくても、わたしがやるから。」

・・・・・・それに、シヨウさんにこれ以上長居させたら悪い

し．．．．」

最後のほうだけ、声が弱くなる。どうしてももう少し欲しい  
と言う願いが出てしまう。

「だいじょぶだいじょぶ。別に迷惑じゃないからサ」

お気楽に返事しながら皿を洗い始める。

「で、でも！ショウさんの親が心配するし．．．．。」

「僕、親がいないからそんなこと平気だよ。」

．．．．．え？

今、なんて．．．．．親が、おらん．．．．．  
？

「すっ、すみm「すみませんとか別に謝らなくていいよ」．．．  
ッ！で、でも！」

「大丈夫だって。僕もはやちゃんに失礼なこと聞いちゃたんだし」

「せ、せやけど・・・。」

「それにさ、」

ぴたりと皿を洗う動きを止める。何？と思いながらはやてはシヨウの後姿を見る。

「・・・・・・・・俺はあんな奴らを正直、親とも思ってすらいないし・・・・・・・・。」

静かに、そう言う。その表情は後姿のために見えなかったが、その言葉に深い悲しみ、怒り、そして、憎しみが含まれていることを感じる。

「・・・・・・・・まあ、そんなわけだからさ、気にしないでよ」

「そ、そうなんですか・・・・・・・・。」

はやては少し呆気ながらも返事をする。

「・・・・・・・・さて、」

皿を洗い終わったシヨウが真剣な顔をして、はやてと向かい合いの椅子に座る。

(ゴクツ)

その真剣さにはやては気を引き締める。

「……………何しようか？」

その言葉にはやて(とどうやってかは不明だが、ソラも)がズコ  
ーッと綺麗にずっこける。

「いや、まあ、もし帰って欲しいなら帰るけど「なんでやねんっ！」」

バシーンッ！

「いてえ！？なんで！？今のはボケじゃないよ！？」

「十分ボケやわ！真剣な顔をされたから気を引き締めたのに、さっきまでのシリアスを返せや！」

「シリアスって、僕あんまシリアス好きじゃないんだけど」

「さっきまであんな重たい空気作っついて、どの口が言う！これか？これかあ！？」

椅子から身を乗り出し、シヨウのほっぺを掴んでうみゅうみゅし  
ている。ひやめなひゃいひゃ<sup>はやちゃん</sup>やひゅん、とうにうにほっぺをされな  
がら文句を言う。



「まったく、身勝手はレディーに対して失礼やで！」

「小学2年生が自分のことをレディーというのはどうかと、まあ合  
つてるけど」

「そこ！うっさい！あとわたしは小学3年生や！」

Oh!？コリヤシツケイ!？となぜかカタコトな外人さんのよう  
な口調で訂正する。

「もう、失礼な人やなあ」

「さーせん」

「だけどそやな、うーん……」

とショウに何してもらおうかとはやてはうんうん唸り始める。そ  
れをショウは「そーいや、仮面ライダーで、水や氷技を使う仮面ラ  
イダーって少ないよなー」と場違いなことを考えていた。それに対  
しソラは「何考えてんだこの人……」な顔で絆の証の中からショ  
ウを見ていた。

「じゃ、じゃあ、何をしようかって言うより、お願い何やけどな・  
・」

「ウェイ、ウェイ、何でしょう？」

少し顔を赤めながらはやてはもじもじしながら口出す。ショウは  
特にその仕草に気を止めず、話を進める。ソラは、ビミョーな顔を

していたが。

——そして少女は爆弾を落とす

「……わたしの、家族になってくれへん？」



「僕はポケキャラだ」

「はい」

「だからツツコミはあまりやらない。」

「はい」

「だけどね」

「はい」

「これだけ言わせてくれ、

—————なんでやねんっ!!」

パコーンッ!!

「あいたあっ!?!」

どこからともなく『なんでやねん』と金色の文字が書かれた緑のスリッパを取り出し、はやての頭をはたく。

「いたあ、ないすんねん!」

「なにすんねんじゃないわ!どこぞの知らない馬の骨のワイにいきなり『家族になって』ってどうやねん!」

はたかれた頭をさそりながらシヨウに文句を言うと、シヨウがいきなり関西弁になり、はやてに色々問題を言っていく。

「ちよい待ち！なんでシヨウはんは関西弁しゃべれるん？」

「ふふふ、では教えようではないか、はやて嬢、それはワイがなぜか関西弁っぽい所があるからや！」

《全然理由になってない！？》

ガビーンとソラが変なショックを受ける。

「そうかそうか、シヨウはんは関西弁をなぜかししゃべれるんか、・・・なら関西弁同士の言い争いや！」

《なんか納得してるし！あとなぜそうなっちゃうの！？》

「ふふふ、いいやろう！」

《だからなぜ！？》

はやてに対するツツコミは当然本人に聞こえてないため意味がなく、シヨウに関しては、聞こえるはずなのだが、完全に無視。である。

のんきなためき関西人  
八神はやて

VS

どこぞの青髪なピアスよりは断然にちゃんとした関西弁な人  
左風シヨウ

FIGHT!!

「そもそも、さっきいうた通りな!どこぞも知れへん野郎にいきなり家族になってっててのはおかしいわ!今日あったばっかやろ!？」

「じゃあ、シヨウはそんな怪しいこととか、変な事とかするん？」

「いや、しないけど……。」

シヨウに28ダメージ!

「それに、シヨウはわたしのこと助けてくれたやん!……それにあれ、暖かったし……。」

「へ？」

「な、にやんでもにゃい!」

バシーンツ!

「なんでや!？」

はやてに12ダメージ!

ショウに32ダメージ！

「そもそも、助けたって、……ただおせっかいしたただけやん！」

「ちゃうもん！ちゃんとわたしのことを考えてくれたやん！抱えこんどったもん吐き出させてくれたやん！」

「だからおせっかいやって！そもそもこれ関係ないやん！」

「ううううう。」

はやてに23ダメージ！

「そ、それに！わたしが言っとる家族になっててのは、同居とか、一緒に暮らしてって意味やに！」

「いやそりゃ、わかつとるけど、……色々と問題がな？……」

「あかんの………？」

「ぶほおお！？」

上目使い＋涙目のCOMBO！  
ショウに124ダメージ！！

「ぐ、だ、だけどなあ……」

何とか耐え切った！

「・・・・・・・・」

「m a m m a m i a。」

上目使い＋涙目＋目からキラキラ＋至近距離のCOMBOにp o  
w e r u p！！！！

ショウに257ダメージ！！！！

「はぁ・・・・・・・・。」

思わずため息が出る。いくらなんでも見知らぬ相手を、とはどうかと思ったが、正直まだ8歳か9歳の女の子を一人ぼっちにしておくのは気が利ける（というか、色々問題があるはずだろ！？）。だとすれば・・・・・・・・

「わかったわ・・・」

「ホンマに！？やったぁ！！」

こういうしかないだろYO・・・・・・・・。

WINNER！のんきなたぬき関西人 八神はやて

《なんだかツツコミどころが多くてわかんなくなった・・・・》



細けえことは気にすんな（アंक風）

「えーと、シヨウには、これかな？」

「シヨウは『ポケ担当な関西っぽい人』の称号を手に入れた！

「まあ、最初のよりはマシかな？」

《まだやってたんだ……》

「でもこれでシヨウはわたしの『家族』決定やな！」

「まあねー、けどはやて」

「ん？」

シヨウがはやての目線に合わせるように背を低くする。

「僕は最初言ったとおり、家族なんていなかった」

「・・・・・・・・」

いつも通りの顔で喋るが、その言葉はそれとは正反対な意味が込められているのを感じ、じっとショウの言葉を聞き続ける。

「だから、正直言って家族ってどんなものか分からないんだ」

ショウの放つ言葉、それはかつてソラにも、家族になった時に言われたことであつた。

「もしかしたら、家族って言葉とは違う家族になってしまうかもしれない。僕バカだし、抜けてるし、とんでもない間違いを起こすかもしれない。だけど、ね、」

ポンッとはやての頭に手を置き、笑い、そして言う

「僕は、自分なりにがんばって、家族になっていきたい。僕は、自分なりにがんばって護っていきたい、

—————君達の、居場所を、夢を、時を、この町を、笑顔を、護っていきたい。これが、僕の、左風ショウの、約束」

スッと右手の小指を出す。

「・・・・・・・・うん！」

それに自分の小指を結びつける。

「「ゆーびきーりげーんまーんうっそつーいたーらはーりせーんばーんのーます、ゆーびきった！」」

そうして、二人の家族は、お互い、笑いあう。 ソラもまた、この二人を見て微笑む。

### 第3話 守護者の約束（後書き）

感想&アドバイス待っています。

#### 第4話 秘密がばれた!?

—————side ソラ

「むー、あんまり面白い番組やってへんな」

「まー、この時間帯じゃしょうがないっしょ」

今、はやてとショウはテレビで何か面白いものがやってないか、検索中。ショウの言ったとおり、この時間帯はあまり子供にとっては面白いものはないかも。

「録画したテレビとかってないの？」

「一応あるよ」

「んー、なにになに、って録画多いね・・・」

「仕方ないやん！わたしあんまり外で遊ばへんのやし！」

「そーでした・・・・・・・・。又、ウオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!？」

「うにゃ!? 隣で急に大声ださんといでな！」

「それは謝ろう！だがはやちゃん・・・・これは仮面ライダーではないか!!! 見るのかい？ 君も見るのかい!？」

「なんかすっごく張り切っとな・・・・・・・・まあみるよ、時々やけ

どな、シヨウも見るん？」

「フッフ、見るも何も、見まくつとるわっ！クウガからずくと！語ってやろうかはやちゃん！？」

「しやんでええよ、つてもう語りだしとる！？」

なんか話題それてるよ……。まあ、いっか楽しく時間過ごせば、ん？なんでシヨウの熱説が楽しいかって？だってその熱説をボケながら話してるもん。そのボケにはやてがツツコンでるから、ボケな人と、ツツコミな人には楽しいんじゃない？実際にお互い笑ってるし。……のどかなあ。

「まあ、漫才はこれぐらいにして、そろそろはやても風呂入ったら？というかそろそろ子供は寝る時間ですよー」

「何子ども扱いしてんねん！まあ子供やけど。せやな、そろそろ入ってくるわ」

と言い、風呂に向かおうとする。

《シヨウ、私もお風呂に入りたいんだけど》

「あー、ちょっと待ってね、はやてが眠ってからにしょ」

シヨウははやてに精霊王に関することや、自分の能力に関することにはあまり関わってほしくないみたいで、ばれない様にしていたらしい。こんなのいつかはばれるけど、その時は、これらを受け止められる時期、すなわち、大人になってからにしたいという願があるの。だから、今はこんな行動をしているの。

すると、はやて途中で止まり、シヨウのほうを向く。

「せや、シヨウも一緒に入るゝ？」

はやてがニマニマ笑いながらとんでもない事シヨウに提案する。  
はやて、あなたって子は――――――

「別にいいよ」

・・・・・・ハイ？この白黒さんはなんと言いました？いい？  
別にいいと？

はやてはトマトな顔をポカンとしてるぞ。しかもこいつは仮面ライダーの番組を再生しようとしてるから気づいてないし、と言うか・  
・・・・・・

「何言ってるんじゃこの変態クサレロリコン野郎おおおおおおお  
おおおおお！！！！」

「ぐぶはあああああああつ！！？？」

絆の証から出てきて思いっきり蹴飛ばしてやったぜ！（サムズアップ！）

———side はやて

あ、ありのまま今起こった事を話すで！

ショウが風呂入っておいでって言うたから、風呂入ろうと思って  
いこうと思ったら、面白いことが思い浮かんだんで、実行してみた  
ら、ショウからまさかの素でのOKが出てきたんや、それにあんぐ  
りしとると、いきなりネックレスから人が出てきて、ショウを思い  
っきり蹴り飛ばしたんや！そして、サムズアップ！思わず見惚れて  
しまうほどの美少女が出てきて、蹴り飛ばしたんやで！そしてサム  
ズアップやで！重要やから二回言うた！

・・・ホンマに綺麗、とかわいい人やなく。

・・・ちよつとショウとO☆H A★N A☆S H Iやな・・・

———side ショウ

ぐふっ、





無意味だった。

「いやいや待ってほしい二人とも！『さあ、地獄を楽しみな』的な感じでこないで！？ほんとに理由を教えてください！？」『答えは聞いている！』ですから！？」

だんだんと丁寧語になっていくシヨウ。そんな風になってしまうほど恐ろしいのだ、今の二人は。

「まだ気付かんとは、まあわたしらは鬼じゃない、この哀れな罪人に教えてあげようではないか」

「ハイ！ぜひともお願いしますーっ！？」

もはや涙目のシヨウ。哀れだ主人公……。

「なら最初には、はやての質問に対することね」

「え？質問？」

シヨウに？マークが浮かぶ。

「ほんとに気付いてないのねー。（黒笑）」

「お、落ち着いて！ソラさん！落ち着いて！あれってテレビ見ながら返事したのが悪かったの！？それとも素っ気ないことが酷かったとか！？」

「……はやてと一緒にお風呂入っていいって言ったことよーっ！」

近所迷惑になるぐらい、思いつきり叫ぶ。その叫びにはやてが少し顔を赤くする。そしてシヨウは――――

「へ？ 別におかしくないじゃん。」

と素で答えてくる。しかもなんで？ と言った表情を浮かべている。

「あるよ！ 思いつきりあるでしょー！！」

ムキーツと腕をブンブン振り回しながら、叫ぶ。それにはやてがさらに顔を赤くする。先ほどの黒いモンはどこえやら、シヨウも完全に恐怖を忘れている。

「いや、だってさ、」

「だって何！？」

息が思いつきり荒げてしまっているソラに対し、

「はやては、足が悪いんでしょ？ だから風呂入るのに手伝ってほし  
いって言ったんじゃないの？」

当然かのように、と言うより当然なのだが、落ち着いて答える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。」

二人は間拔けな声を出す。

これに関しては、はやても気になっており、当然じゃないことを  
考えていたはやてとソラにとっては、まさに盲点だった。

「あつ、って……何？僕が良からぬ事を考えてはやてと一緒に  
お風呂に行こうとしてたと思ったの？」

……コクッ

「どんだけ信用ないんだよっ!!」

そう叫ぶと、ひざを抱え、のの字を書き始める。

「じゃ、じゃあ今度はわたしや、なんでいきなり美少女がショウの  
ネックレスから出てくんの!？」

「……………どう説明してくれるんでしょうね、ソラちゃん」

「え、あ、あれ、なんか立場逆転してるうー！ー!？」

ショウがソラをジト目で睨み、自分の求める答えがソラにあると  
理解したはやては睨んだ目線をショウからソラに移す。ソラはそれ  
に涙目でたじたじである。

—————行動は災いの元。

「口は災いの元でしょおおーっ!？」





驚愕の目をショウとソラに交互に向けるが、ショウはその視線に当たった瞬間、はあ、とため息をつく。

「星自身の力とは別な力でも、星で起きたものならば、それを星が記憶して覚えている。それがどんなものであろうと、それは星で起きた出来事、現象なの」

「そして星が具現化した存在であるソラは地球の記憶からその現象を引っ張り出して、どんな現象をも、星の力でできる範囲なら、大きさ小ささ関係なく再現できるって言うチートさだよ。例えば、星自身の力ではない太陽光を、ソラの力でなら再現することができるんだ」

「め、めちやくちやん・・・・・・・・」

「僕もこの話を聞いたとき、大蛇丸とかの『穢土転生』や上条当麻の『イマジンプレイカー幻想殺し』、一方通行の『アクセラレータ一方通行』が思い浮かんだよ・・・・・・・・」

「他のは知らんけど、ナルトは見とるから『穢土転生』も知つとるよ、やからそれが思い浮かぶのも分かるよ・・・・・・・・それ  
も再現できるんちゃう？」

「いやいやいや、それはないよ！・・・・・・・・だよね？」

はやての考えを笑いながら否定するが、やはり不安でソラに聞いてしまう。

「いや、私それどんなのか知らないから」





「ううゝ、やってめちゃくちゃん、シヨウ達的能力ゝ」

「まあね・・・・・・・・ほら、手を見せて」

手の痛みに若干涙目になりながらもシヨウに手を見せる（その際、偶然上目遣いになり、シヨウがドキツとしたとかしなかったとか）。

「あゝ、赤くなってるよまったく。でも僕達的能力は確かに、今はやて見たいな考え方なら、完全チートだろうね」

「へ？」

手をシヨウがすりすりと摩りながらはやてに呟く。・・・・・・・・痛いの痛い飛んでけだろうか？

「一応、この能力には限界や、リスクもあるんだよねゝ」

「えっ、そうなん？」

「ん？そうだけど？」

シヨウの呟きにはやてがソラに真意を確かめるが、本当のようだ。

「どんなリスク？」

「そうだね・・・・・・・・例えば、マンガやアニメでもよくある大技使うにはチャージが必要とか、ある特定の方法でやらないと発動できないのとか、かな。ほかに、使い方とかを失敗すれば、僕自身が吹き飛ぶとか、ようは、ちゃんと理解もしてない力を使えば僕だけがダメージを負うとか、・・・・・・・・下手したら死ぬってのもあ

るし、中には……」

「めっちゃ危ないやん！」

星の力は決して万能ではない。ただ単に応用がとて広く利く力の量が多いだけ、ばんばん無数の力を使用できるわけではない、頭の中に戦い方が入って来るわけでもない。技や能力のどれを使うにしても、どう使うか、どんな効果か、どんな反動か、どんな副作用が来るか、それらを理解せず使えば自分の身を滅ぼす事となる。

例えばウルトラダイナマイト、超人戦士のウルトラマン達の中でさえも禁断と知られるタロウあの技をよく知らず使えば、自分の体が粉々に吹き飛ぶのは明白。クウガのライジングマイティキックをよく知らず使えば、半径3kmが火の海に変わってしまう。他にもエネルギー量を考えずに技を放てば、力の量が多いだけにとてつもない被害が出てしまう。その上ショウは人間、放出できる力には限界があり、これを超えると自分自身が残酷な方法で『吹っ飛んでしまう』。

これらは当然のことだが、ショウ達の場合は星の力が丸々半分あるため力の量がハンパなく、これらが異常にも重要なのだ。

「———ってことは完全にチートじゃないってわけなんや」

「そだね、中でも一番重要なのは『制御』かな？」

「そりゃまたなんで？」

「星の力丸々半分あるじゃん？力が多い分、『制御』が大切になるんだけど、その『力』をちゃんと安全に制御できるまでがスングク

時間かかるんだよ……ようは技を特訓して習得する時間が馬鹿長い」

「な、なんでなん？」

「力の量が多いからね、慎重にやらないといけないから」

「それに結局はさっき言ったことがほぼ全部この習得するのに関わってくるから、だから時間かかるんだよね」

「ほえ」

はやてが感心したような声を出す。

「やけど、仮面ライダー全部の技と能力ね」

「まあ、簡単に言えば僕が使う力は主に仮面ライダーディケイドみたいなもんだよ」

「あ、それ、ええ例え」

「まあね、あと一応言っておくけど、僕が使えるのは仮面ライダーほぼ、と言うより多くの技と能力だから。」

「？なんで多くなん？」

「そりゃ使えない技とかあるよ、アドベントとかさ、他にも銃撃は僕使えないし。使うのはソラだから」

「ほへ？なんでまたそんな風に？」

「さー、僕も分からのだよ。そのせいか、クウガのペガサスの超感覚はソラのになっちゃてて、僕は使えないんだよ、結構好きだったのに……………」

「で、でもそっちのほうがバリエーション多いじゃん！私は銃撃とライダーキックとかだけだよ！？ウルトラマンは私あまり知らないから使えないし！仮面ライダーも知ってるの少ないし！」

ショウがなんか落ち込み始めたので、なんとか立ち直らせようと、ショウの力のいいところをあげていく。

「ま、まあ要するに、ショウ達はよく知らんことはできへんってことやね？」

「……………そーゆーことです」

「だーかーらー！落ち込まないでよ！」

いまだ落ち込み気味のショウ。

「もう、ショウのバカ……………。あとはやて」

「ん？」

「……………貴方は私の力のこと、ちゃんと理解した？」

————その言葉に落ち込み気味のショウがピクリと反応する。

「うん！ちゃんと理解したよ。」

「・・・・・・・・それは理解したつもりじゃなくて？」

「へ？う、うん・・・・。」

ちよつとソラの雰囲気を押され気味だったが首を縦に振る。

「じゃあはやて、私のせいで・・・・・・・・滅びた世界が複数あることも、理解できる？」

はやての顔が驚愕に染まる。それに対し、ソラはため息をつく。

「いきなり複数の世界とかわって言われても分からないよね、ちよつとここから、かな？—————」

ソラが話し始めたことはショウもかつて話されたこと、

——世界には、この世界含めて、次元世界と言う世界が複数あると言ふこと、

——魔法と言う、超科学として扱われる存在、

——この世界では、ありえないようなことが他の世界ではありえること、

それらをソラははやてに話した。当初は信じれない、といった表情だったが、ソラの真剣さ、シヨウの沈黙からそれが事実であることを知る。

「こんなものかな？はやて、わかった？」

「うーん、まあ、だいたい、かな……。やけどソラのせいで世界が滅んだって……」

「そのまんまの意味」

ソラはぼつさりと答える。

「私の星の力は貴方が言ったとおり、チートすぎる力、まして、魔法とは、かけ離れた存在。そんな力を狙わない奴がいらないと思う？」

その言葉にはやては心辺りがる。はやては親を亡くした時、その財産は多くないとは言え、すべて彼女の物となった、そしてそれを

狙い、近寄ってきた者達はいた。今は、『父の友人』のおかげで何とかなっているが、ソラの言うのはおそらくその『近寄ってきた者達』のような人達であろう。

「心当たり……あるでしょ？」

「……………」

はやては無言で頷く。

「私の力を狙ってきた奴らは大勢いた、そして散っていった。どうしてだか分かる？  
それは、  
愚か者

———戦争よ」

はやての表情が驚きと悲しみになり、ショウは渋い顔をしていた。  
だがソラは、

———無表情だった、

元から何もないような、空っぽの、冷たいほどの、無。  
それだけの表情だった。

「私の力をほしいあまり、人武器を持ち、人を殺した。

私の力をほしいあまり、人は友も、家族も、裏切った。

私の力をほしいあまり、人は何もかもむちゃくちゃにした。

もう既に私はそこにいなかったのに、それに気付かず、人は戦争

を続けた。

次々と一兵器（殺す道具）を作り、次々と破壊していった。そして、————壊れた」

ソラは自分の言っていることを気にせず、まるで人形のように、機会のように、口を動かす。

それがどんなに恐ろしいことでも、言っていく。

「それは、一つに留まらず、他の世界でも、私が訪れた世界で、何度も、何度も何度も何度も起きた。ただこの力がほしいあまり、人は全てを破壊した。……確かディケイドだっけ？　なんか、似てるよね、その人と私は色々な方面で」

はやてがその言葉にビクツとなる。彼女がその言葉を発したとたん、雰囲気、空気が変わったのだ。

それはかつてショウがソラとであった時に出したもの、真正正銘人ではないものしか出せないものを、彼女は放っているのだ。

「……………それとも、悪魔がよかったかな？」

フツツと無の表情で無の笑いを出す。はやては顔を俯かせたまま、何も動こうとしない。

重すぎるのだ、10歳未満の子供にはあまりにもこの空気は、重すぎたのだ。心なしか、少し震えている。

「どう、はやて？」

ゾツとするような声で、はやてに問う。



「それでも私を、ちゃんと理解したなんていえる？それでも――」  
――

「キングストーンフラッシュュ！！！」

その、一言。たった一言の場違いな、空気を読まない発言がガラリと空気を変える。

はやてとソラはショウの発言に完全にポカンとしている。それに気付いてないのかショウはさらに言葉を続けていく。

「説明しよう！キングストーンフラッシュとは、仮面ライダーブラックと仮面ライダーブラッシュ！アールエックス！が使用する技であり！その効果は幻術・妖術を打ち破ったり、敵の正体を暴くなどの力がある！！」

「「どうでもいいけど（ええけど）、あなた何言ってるの（言ってるねん）」」

ズビシ、と突っ込む。

「いやいや、だからキングストーンフラッシュは幻術・妖術を打ち破ったりとすごい効果を持つんですヨ」

「だから何（やから何）！！？」

「さっきの空気を打ち破った」

「！」

「………」

その言葉にはやては驚き、ソラは黙り込む。

「まあ、そういうことよ。それに僕、シリアスあんま好きじゃないし」（v<sub>1</sub>）b」

「……あはは」

「………」

こんな彼に思わずはやては笑ってしまう。

そうだ、彼はこんな人間なのだ。はやてはショウと一緒にいた時間は短い、それでも分かる。彼はこんな人間だと。だからこそ笑ってしまうのだ、こんなことができてしまう、彼を。なんだかんだ

とバカな行動があるが、全てちゃんと分かってやっている。

「理解してくれたところで、はやて」

「ん？」

「ん」

とソラを指差す。

「？」

その行動にソラは首かしげているが、はやてはショウの言いたいことを理解する。

「ソラ」

「・・・何」

はやては車椅子を動かし、ソラと真正面になる。ソラもはやての行動を理解したのか、表情が真剣になる。

————— …… そっ

「!?!」

するとはやてはソラの両方の頬に自分の両手を当てる。その行動にソラは驚くが、すぐに落ち着く。

「ソラは、・・・優しいなあ」

「なっ・・・！」

思わず驚愕する。

「だってそうやろ？ ソラは私に自分は危ないって、だから近づくな  
って、それは私を護ろうとしとるからやろ？ 自分自身から」

ソラははやての言葉に困惑してしまう。なぜこの子はこんな事を  
言えるのだろう、なぜこんなに優しくするんだろうと、化物の自分  
になぜ向き合ってくれるのかが分からなかった。

（これじゃあ、これじゃあまるで――――――）

と隣にいる人物を目線を動かして見る、

「自分の危険性とかを教えてくれてるから。そこから少なくとも、  
悪い奴ではないと判断できるね」

「自分が危ないって教えてくれとるから、やからソラは優しいって  
言うとるんやよ？」

——— ショウみたい・・・・・・・・・・

自分を救ってくれた人物を見る。

そして、はやてを見る。

「やけどな、わたしはソラを危ないなんてちっぽけも思っておらんよ、」

「・・・・・・・・なんで」

「だってソラは優しいし、他人を傷つけることがいやな人やと思うんやもん。それにな、しつとる？」

はやては優しく微笑む。

「—ディケイド（破壊者さん）はな、仲間がおるんよ、自分の帰る場所となってくれる人、自分を支えてくれる人、ちよつと困った人やけど、いろいろと助けてくれる人、心を支えてくれる人、他にも色々な人たちがおるん。やからディケイドは悪魔と呼ばれようが破壊者と呼ばれようが、がんばれたんや、やったらソラも同じやや、ソラには

——— 私達、家族がおるやろ？」

ソラが今度は目を開く。ショウがクスツと笑う。

「でも・・・・・・・・」

「でもないで」

はやてが言葉を制す。

「ソラはシヨウの家族やったんやろ？ やったらわたしと家族になってくれたシヨウのおかげでソラもわたしの家族やない。なんもおかしい事はないやろ？」

ソラが戸惑ったのかシヨウを目線を動かして見る。その目線に気が付いたシヨウは、ソラに頷く。

「・・・・・・・・二人ともずるいよ・・・・・・・・」

ソラがそう呟く。

「それでもええよ」

はやてがまた微笑む。

「うむうむ」

シヨウが再び頷く。

「ふう・・・」

「なんや、頬膨らまして〜。」

はやてがソラをこのっ、このっ、っと突つつく。ソラがやめてよっ、と嫌がっているようだがどこか喜んでいた。

「ふふ、さーてこの話も終いだ！ 早く風呂入ってこ〜い！」

ショウが明るく二人にそう告げる。

「オッケー、じゃあショウ、一緒に入ろや！」

「結局入るのですね、僕は。ま、いいけど」

「じゃあ、ソラも一緒入ろや」

「え？」

「いやちよつとまてえい！なんでソラが入るんだい！と言うか入りきらないだろう！」

「だいじょうぶやで、風呂結構大きいから。」

「……だつてさ」

「だつてさ、じゃなくて！色々最初に言ってきたのは君らでしょお  
おおっ！！？」

「細かいことは気にしない気にしない」

「気にするわあああああっ！！」

迷わず180度回転してBダッシュで逃げ出そうとするが、

ガシッ！ガシッ！

いつの間にかすぐそばまで来ていたソラとはやてに両サイドから

腕を掴まれ、逃走ができなくなる。車椅子なのにここまでの機動力、恐るべし、八神はやて。

「いや、十分おかしいだろ！テーブル挟んでいるし、思いっきりダッシュしたのにどうやってすぐそばにいるんだい！」

「なんの！これしきで逃げ切れると思うな！」

「ソラちゃんんっ！！??」

「あはは・・・」

「あはは、じゃなあああああいつ！！ってやめろ！僕を風呂まで引っ張るなってアツ——」

（数分後）

「ハアーツ、ハアーツ、し、死ぬかと思った・・・・・・」

男の意地にかけての必死の抵抗により、何とかはやて達の悪魔の誘いから逃れることのできたショウ。オーバーだろ、と思う人もいるかもしれないが、本人にとっては一大事である。主に男として大事なものを色々と失う方向で。



『わー、おっきなお風呂!』

『せやろせやろ? バリアフリーなめんなあ!』

風呂場から二人の少女の声が聞こえてくる。

「まったく、はやちゃんもソラちゃんも困ったもんだ。片やとんでもない行動をしてくるし、片やノリに乗っちゃってそのとんでもについてくるし、ヤレヤレだぜ」

『ソラ! 背中洗いっこしよ!』

『ん、いいよ』

そんな聞こえてくる話し声にシヨウの顔が緩む。

ソラは様々なつらい目にあってきた。その傷は今だ癒えず、残っているはず。そんな傷を癒せるのはこんな何気ない一日常(幸せ)ではないのであろうか? そんなことを考えると、シヨウの顔は緩む。

「僕一人じゃ彼女の傷を癒すのに限界があったしね、それに、はやてにとってもこれはいいことだ・・・」

はやてもまた家族を失い、苦しい目に会い、心に傷を負っているはずだ。そんな彼女に『新しい家族』と言う存在は、その傷を癒すために最も効果的なはずだ。

お互いがそばにいただけでお互いの傷は癒える。これをすばらしいと言わなければなんと言う?

「そして、これを守るのも一守護者(僕)の役目ってね・・・」

フッ、と笑うと仮面ライダーの録画を再生するためにリモコンを手

『きゃあああああっっ!!?ど、どこ触ってんのはやて!』

『ええやんか背中洗うついでに☆軽いスキンシップや』

『スキンシップって、ちょ、やめっ、そこはらめええええっ!!』

『胸やわらかっ!? (。Д。) どんだけっ!? プリン!? マシユマロ!? ゼリー!? いやもうどう表現したらええんか分からんほどのこのやわらかさ・・・!』

『は、はやしええええっ!!』

『ほわっ!? お、押さんとい、きゃあっ!・・・いたたたってソラ!!? どこに顔突っ込んだるんにゃあっ!? う、動か、動かんといやあん!?!』

『ふごもごぐ、ふあもごもむつも・・・!! (そこはだめ、そこはこすっちゃ・・・!!)』

『『ひゃあああああああああんんん!!!!』』

取れなかった・・・

「いやちよつと待てええええええ!!」

勢い良く立ち上がるとズンズンと風呂場に向かう。そして彼は思

った、仮面ライダーは見れなさそうだと――

#### 第4話 秘密がばれた!? (後書き)

ショウ「まったく、君らは何をやつとる……」

ソラ「私悪くない！悪くないもん！！急に胸を揉みだしたはやてが悪いもん！」

ショウ「確かにそれもそうだぞ、はやて……」

はやて「あれは軽いスキンシップやねん、軽い」

ショウ「黒子かおまえはっ！てか人の胸のこと叫ぶなよ、近所に聞こえたかも知れないぞ？夜も遅かったから誰も聞いてないと思う……けど」

ソラ「！！（。D。）」

はやて「何を言う！あんなやわらかさに声を上げずにいられるかあっ！ソラの胸のやわらかさを感じたことがないからそんなことが言えるんや！！一回触ってみい！」

ショウ「いやしないから。そもそもソラがやわらかいことは知ってるよ？ほっぺは引っ張るとんでもなく伸びるし、開脚なんてもう見てるこっちが痛くなるほど開けるんだもん……」

はやて「ほうほう？これは一度試さなあ？んん？ソラ君？」

ソラ「え？ちょ、何指をうねうねさせてってやめてー！ー！！」

ショウ「コラーツ!! (僕のボケ立場は・・・ (泣))」

幻空「アドバイス&感想、お待ちしております!」↑あえて無視

## 第5話 ジュエルシード（前書き）

とんでもなく遅れましたああーっ！！マジすいません！ほんと！なんか色々ところらの事情が重なってしまって、なかなか書けずにいまして、いやもうマジすいません。遅れてですが、第5話、始まります。

ちなみに最後に少しアンケートがあります。

## 第5話 ジュエルシード

———side

「ふっふん、ふっふん、ふっふっふん」

はやてと暮らし始めてから数日、とある銀髪シスターから生まれた、『お風呂』リズムを口挟みながら、シヨウは商店街を歩いていた。

「いやゝ、今日は魚が安かったから、晩飯はお魚さん中心だねゝ」

商店街での買い物を終えた彼は、買い物袋を肩に担ぎながら、のんびりと歩く。

「刺し身、焼き魚、魚の煮込み、ジュルリッ、フッフ、晩飯のことを考えてたら腹が減ってきたぜい、」

自分の奇妙な行動は周りの人を引かせている事に彼はまったく気付いていない。余談だが、シヨウが出かけたのは昼ご飯（あ、スバル達もびっくりな量の）を食べ終えてからであり、そのためそれほど時間は経っていない。恐るべし、超大食い野郎……。

「なんかうまいもんでも買って食いますかゝ、えゝと、お菓子屋はつと……お？」

不意に、何かを感じる。

「・・・・・・・・何で今頃来るかなあ・・・・・・・・？」

不意にシヨウが感じたもの、それは予感。

（予感つってもほとんど感じるのがいやな予感とかなんだからなく）

ハア、とため息を着くと、彼は自分の足を予感のした方へと動かす。

「ア、ア、testing testing、聞こえますか  
ソラちゃん？」

「テストイングなんかなくてもいいのに・・・・・・・・聞こえてるよ。どうしたの？」

「いやな予感がした」

「・・・・・・・・」

その言葉だけで十分、なぜなら、シヨウの予感は当たる確率は非常に高い。

その当たる確立は文字通り、百発百中。これはシヨウが生まれた時から持っていたもので、ソラに本気でレアスキルではないのかと疑われた。

「・・・・・・・・分かった、私もすぐ合流するよ」

「G I G、はやてにはありのままのことを言っというて」



「分かった」

はやてにはすでに自分達の事を知られているので、異能の力や厄介事だからと言って、隠れて行動したり、隠し事や嘘をあまりついたりしないようにしている。これはシヨウが提案した事であり、これはシヨウが嘘をつく事が嫌い（そのせいか、嘘をつくのが下手。これも理由）な事と、はやてに色々な抱え込まず、自分達みたいになんと相談する様にとの意味を込めている。この意味を聞いたはやては「そんな事ないもん！！」と顔を真っ赤にして叫んでいたが、はやてを巻き込むかのようなだが、正確には違い、あくまで相談や連絡などをしたりするぐらいである。例えば、火の粉が降りかかったとしても、シヨウがそれを振り払うと断言しているため、はやてはほぼ安全である。

一通り念話を済ますと、予感のしたほうにいく自分の足を速める。

「そこまですごい予感じゃなかったからいいけど、やっぱり予感はやだね」

~~~~~

「ここ、か………」

予感のした場所、公園（なのはがA、Sの第1話で練習していた所）に着くと、あたりを見渡す。

「予感は何かが起こると前もって感じるからだから、そのおかげで、

その何かが起きた時や起きる前、最悪、起きた後だったとしても、何か起きてから行くよりはその場に早く来ることができるからいいよね……でも、ほんっとなにもないな」

あたりは誰もいないが、いつも通りの静けさであり、特に変わった様子はない。

（特に異常は感じないけど、今回のことは突然起こるのか？……・）

少し考えにふけていると、

「ショウー！」

「ん？ おっ、来たかいソラちゃん。」

「うん、どお？ なにかあった？」

「うんにゃ、何もないぜー。たぶんまだ何も起こってないんだろうけど……ッ！！」

不意に後ろから何か巨大な力を感じ、すぐさま振り向く。そこにはいつの間にか強い青色の光が発光しており、そこからその巨大な力を感じる。

「これは……魔力！？ それも莫大な……どうしてこの世界に！？」

「へ？ これが魔力なの？ へへ、こんな感じの力なんだ。」

「うん、そう、ってショウ!のんきに言ってる場合じゃないよ!これかなり危険だって事分かってる!？」

「えゝ、別にいいじゃん、すげーじゃん」

「よくないよ!あとすげーじゃんってな・・・・・・・・!？」

「？」

色々とツツコンでいたソラの表情が急に驚きの顔に変わったのを見て、その目線の先を見ると・・・・・・・・

いかにもホラー映画に出てきそうな人形の巨大バージョンがいた。

「出たああああああああああっ!!??？」

「嘘おおおおおおおおおおおおおっ!!??？」

「イヤ、君が驚いちゃいかんだろがよ。」

「いたっ!」

パソコンとどこからともなく金色の文字で「なにしてんねん」と書かれた緑のスリッパを取り出し、軽くはたく。

「それよりアレなんだい！お化け？お化けだよね主に『付喪神』と言われるっ！？」

「ううん、違うよ。」

「冷静に真っ向からの否定ありがトウースッ！？と言うか、なぜ分かったあれが付喪神ではないと！？じゃアレなんだい！！」

「いやちよつと、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！だってアレ、妖気を感じないもん。だからあなたの思っている付喪神とは違う。そしてアレは多分魔力によって誕生したものだと思うんだけど・・・」
「・・・ボケキヤラなのに色々とまたツツコミたい所があるけど、あえてこれだけ聞いておく。・・・なぜ、僕の思っている付喪神とは違うと言う？」

「付喪神って言っても色々いるんだよ？一般的に広まっている付喪神とは違ったのが」

「そうかい、・・・つとこんな事してる場合じゃないね・・・！」

ホラードール（たった今ショウが名称）は既に動き出しており、公園から出て行こうとする。幸い今だ踏み潰されたりして壊れたものはないが、このまま行くと、そうなるものが出てくる。さらに――

「あのホラードール、町に向かってない？」

「（ホラードール・・・？）確かに、このままだと町に行くね」

「色々まずいだろ！ここで止めないと！」

「どうするの？キャッチリングとかを使うの？」

「それもありだけど、ここでこんな大きい奴とやり合つてると一般人が目撃したり、最悪巻き込むかもしれないから、ここから隔離した場所で戦ったほうがいいね」

「それはいいけど、どうやって？」

「こーすんの」

と右腕に光のエネルギーを集め、それを空に放つ。

「メタフィールド！！」

『メタフィールド』、それはウルトラマンネクサスが作り出す「不連続時空間」、言わば異空間。

ネクサスはこれを使い、スペースビーストの被害から人々を守り、人知れずビーストを撃退していた。

ショウが使っているのは、それに少し手を加えた、弱体化したのだ。

「――ふうう・・・」

「だいじょうぶ？」

辛そうなショウを、ソラが心配そうに顔を覗いてくる。

「大丈夫さ、ただすんごく疲れただけ……」

ショウの作り出すメタフィールドは、オリジナルとは違い、

- ・ 3分間しか発生できないがない

- ・ 自分の身体そのものではなく、自分の力を使った物

- ・ 敵の能力の低下がない

- ・ 自分の能力のパワーアップがない

- ・ 空間の光景は岩山のような場所ではなく、メタフィールドを発生させた空間を写した光景。

とオリジナルとは違う所があり、共通点は、

- ・ 異空間であること

- ・ 現実世界からは不可視

この技はあくまで、オリジナルでも主な理由であった、周りに被害を出さないためのものである。ただし、三分間だけなどのリスクがない代わり、大きな疲労が伴われると言うリスクがある（リスクをなくすために大きな力を一気に使うため、体に不可がかかる事により起きる）。

「ひーこら、きついな……っ！」

「わっ！」

ホラードールがシヨウ達を踏み潰そうとした様な攻撃を後ろに飛ぶことにより、とっさに避ける。

「危ない危ない、んー、疲労で隙ができちゃうのが傷だな、もう少し鍛えないと」

「その考えは後にして、今はアレをどうにかしないと！」

「そうなんだけどさ……。」

「？」

「アレー、……やっぱ戦わないといけないかな？」

~~~~~

~~~~~side???

「ここだよね、ジュエルシードの反応があったのって？」

「うん、そうなんだけど・・・」

こんにちは！高町なのはです！最近わたしは、魔法少女としてユーノ君の探し物、ジュエルシードを集めています。そしてそのジュエルシードの反応があった場所に来てみたんですけど・・・

「何もないね・・・」

「なの・・・」

辺りには何もない状態。ジュエルシードが発動したなら、それによってできた暴走体とかがいるはずなんだけど・・・。

「気のせいだったのかな？・・・」

「多分、違うと思うよなのは」

「ユーノ君？」

私の隣の下にいるフレットのユーノ君が話してくる。

「ジュエルシード発動には僕も感じたし、二人そろって気のせいだったのはおかしいし」

そう言うと、ジッと前の公園を見つめている。

「んー、じゃあ結界か何か・・・？」

「結界だったら僕達を感じるはずなんだけど・・・」

「だ、だから！私達に感じさせない結界だとか！？」

必死になって自分の言った意味を説明する。

べ、別に一発で否定されたから必死に言ってるんじゃないんだからね！？

・・・・・・・・・・なんだかアリサちゃんみたいになっちゃったの。

だけどユーノ君は私の話全く無視して前の公園を見つめているの。
つてええっ！？

「ね、ねえ！ユーノ君ちゃんと聞いてるうっ！？」

「ぐええっ！？」

「話を聞いてくれないなんてあんまりだよお！」

「ちよ、な、なのはっ、なのはっ！首閉めてる首閉めてる！」

「ふえ？あああっ！ご、ごめんユーノ君！だいじょうぶ！？」

慌てて掴んでいた手を離す。

「ゲホ、ゴホ、た、たぶん……。」

「ううう、ごめんね。」

「いや、ボーツとしてた僕も悪いし。」

「でも、さっきのユーノ君変だったよ。なんだか食い入るように公園の方を見てたし」

「うん……。」

そう言うのと、また公園の方を食い入るように見つめる。

「? どうしたの?」

「いや、なんて言うか、妙な感じがするんだよね、あそこ」

と公園の方を指す。

「妙な感じ?」

「うん、何かがあるような気がするんだよね、あそこ」

「何かって、何もないよあそこ」

「そうなんだけどね……。」

「けどそれだとジュエルシード反応があった事と矛盾ができるし、何かがないとおかしいよね。」

「ちょっと辺りを調べてみるね」

「ふえ？何か見つける事できるの？」

「うーん、わかんないけど、試してみる価値はあるよ。」

するとユーノ君の足元から翡翠色の魔方陣が現れる。

（確かに、今の見方じゃ何も見えない、だけど見方を変えれば・・・
・・・！）

「見つけたあっ！！」

「にゃあっ！！？」

思わず飛び上がる。

「あ、ごめん」

「だ、だいじょうぶ。そ、それで何か見つかった？」

「うん、僕の妙な感じは当たってた。あそこに異空間が発生してる」

「・・・へ？異空間？」

素っ頓狂な声を上げる。それもそうだよ、いきなり異空間だなん
て言われて、そりゃ上げるよ。

「異空間って・・・よくそんなの勘付いたねユーノ君」

「……僕も正直驚いてる……」

ユーノ君の勘は結果魔導師としての？それとも野生のk――――

「……なのは、今変なこと考えてなかった？」

「ふえ！？え、う、ううん！そ、ソナコトナイヨッ！？」

あううつ、ユーノ君がジッと睨んでくるよう。フェレットだからかわいいはずなのに睨むとすごく怖いんだよう。

「……まあ、ともかく今はあの異空間内に入ることだね」

「え？それって大丈夫なの？」

転移でいけるかな？と考え込んでいるユーノ君に思わず聞き返す。だって異空間だなんて、別の空間なんでしょ？現実世界とは同じだとは限らないし……

「その点については大丈夫だよ、転移が出来そうなら中も見ることが出来るだろうし」

「あっ、なるほど！」

確かに、先にどんな場所が見れば色々対策できるもんね。

「それじゃあ、早速やってみるよ」

そういうと再びユーノ君の足元に翡翠色の魔方陣が展開される。

がんばれ！ユーノ君！

———side ユーノ

調べに入っただけいいけど、さっきから気になっていたことがある。この異空間は一体だれが・・・？

魔導師が最初に思い浮かんだけど、もしそうなら、結界を張ればいいし、そもそも魔導師が異空間なんかを作れるものか？と言うよりムリだろ、何らかのレアスキルなら話は別だけど・・・。

そしたらこれはジュエルシードによるものか？だけど何でまた異空間なんか、今まで見てきたのはなんて言うか、怪物見たいのだからなあ、分からない・・・。

考えても仕方がない、今は調べるのに集中しよう。ん？なのはが応援してくれてる？・・・よっしゃあ！がんばるか！！

———side ソラ

「やっぱ戦わないといけないかな、って当然だよ！何言っちゃってくれちゃってるの！？」

「言葉がおかしいぜ、ソラちゃん・・・（僕がボケ担当だよね・・・）」

急にショウがホラードールと戦うのを嫌がりだし、それに対して絶賛混乱中！

「なんでそんな言葉が出てきちゃうの！？色々まずいだろうって言うてたのショウじゃん！」

「だってアレだよ！？見てみな、あのいかにも映画から出てきましたって感じの恐怖！の人形さん！『ロジャー・ラビット』か『魔法にかけられて』か！そもそも僕はお化けが苦手なんだよ！」

「・・・うええ・・・。」

「いや確かに同じ霊だけど君が苦手ってわけじゃないからねだからお願いだから泣かないでー！」

うにゃー！と思いつきりショウが叫びます。だって苦手だって言われるとグサツとくるよ。

でもそうしてる間にホラードールが辺りを無茶苦茶にし始める。

「オオッ！？メタフィードの物が！？おいおい、やってくれるね人形ちゃん、って破片こっちに飛んできたあっ！？」

「グスッ、もう！だから戦わないといけないうて言ったのに！」

「すみません……。ハア、やるか……」

シヨウは深いため息をつきながらしぶしぶホラードールの元に向かう。

……私が戦えばいいじゃんとは言わないんだね、シヨウ……。

——side シヨウ

ハア、僕はお化けが苦手だって言うのに。

「しかしどうしてこんなことになってんだい、人形さんよ、」

巨大なホラードールを見上げながら答えないと分かりながらも問いかける。

『ウウウウウウウ……』

ホラードールがゆっくりと手を上げる。

「ん？」

そして、そのまま僕に振り下ろす。

ドズウウンッッ!!

大きな音と衝撃波と共に、辺りに砂煙が巻き起こる。

「キャッ!」

これらを少し離れた所で見ていたソラちゃんの所でさえ、その衝撃波が届く。

「ショ、ショウッ!」

ホラードールに押しつぶされたかもしれない僕のことを案じて、必死に名前を叫ぶ。うれしいね。だけど

「ほわ、びっくりした」

まるで何事もなかったかのようにムクッと起き上がる。服や髪などは先ほどの汚れてしまっているが、それ以外はなんともなく、ダメージをまったく負っていない。このダメージを負わなかったのは、ホラードールが僕を押しつぶす前に、僕は『トリロバイトメタル』を使って体を硬質化することにより、もともとの攻撃がただの押しつぶしだけなこともあって、ダメージをまったく負わずにすんだのだい!

「もう、ショウ!びっくりさせないでよ!」

「おりよ?心配してくれるのソラちゃん?うれしいね」

「ウミユツ、」

僕の発言にソラちゃんが赤面する。からかいのつもりで言ったのになんで赤くなるんだ？風邪か？

「まあ、心配後無用！何とかしていきますよ」

むんむん、と腕をブンブン振って余裕を見せてみせる。

『ウウウウウウ』

再び、ホラードールが向かってくる。今度は両手を振り上げ僕を押しつぶそうとする。それを僕は、

『BEAT』

『KICK』

『ライオンビート』、『ローカストキック』を使い、真正面から受け止める。

『!?!』

「ぐぬっふっふっふ、驚いてるね驚いてるね。悪いけどね、力勝負には自信があるよ、強化してるけど」

この二つは腕力と脚力を強化する技で、組み合わせのコンボとしての強化性はない。実際に仮面ライダーブレイド本編でレンゲルが『モールスクリュ』と『バイトコブラ』を組み合わせでコンボしようとした際、ギャレンに「カードは慎重に選ぶんだ」と指摘されていた。だけど今回の場合はこれでいい。これは力勝負なのだから。

ちなみに今のところ僕が勝ってるゼツ！まあ、体格差とかもろろのせいでまったくそのように見えないが。

「まあ、そろそろいいかなっと！」

『MAGNET』

『バッファローマグネット』を使い、相手の足を思いっきり引く！

『ウウアアアアッ！？』

ドズウウウウウンッッ！！

ホラードールは悲鳴を上げながら後ろに倒れこむ。

「まあ、こんなもんかな？」

「こんなもんかなって、後ろに倒しただけじゃん」

少し離れた場所にいたソラが近くに来る。

「うん、まあ僕としては『キャッチリング』や『ポーラーブリザー』を使って相手の動きを止めようかと思ってるんだけどね」

「あなたってあんまり攻めることをしないよね、攻撃するチャンスはあるのに」

「忘れてもらっちゃ困るねソラちゃん。僕は守護者だよ？攻めより守りのほうが得意なんだ」

「分かってるよ、褒めてるの私は」

アハハ、とソラが笑う。まったくこの子は……。そう思いながらも笑みが出る。

「まあともかく、」

———キュウイイイイイイッ

エクストリームがどこからともなく現れ、キングラウザーをショウに渡して行く（ドラグレッツダーのように）。それを手に取ると、スツと『突き』のような構えを取る。

「『ポーラーブリザード』を使ってこいつの動きを———」

『リコちゃん、どこお・・・？』

「・・・・・・ハイ？」

思わず抜けた声が出てしまう。後ろにいるソラちゃんも同じように、ポカンとしている。そりゃいきなり『ウウウウウ』とか『ウアアア』とかしか言っていなかった奴が急にちゃんとした言葉で喋りだしたら驚くっしょ。

「なんとこの人形ちゃんと喋れましたよソラちゃん」

「・・・・なにこれ、あたし聞いてない」

「鳴海亜樹子かい・・・・まあ、喋れるなら聞けるかな？ 暴れる理由を」

と上半身を起き上げたホラーd、じゃなくて人形さんと向き直る。

『アレ・・・暴れてたんじゃない、リコちゃんを探してたの、』

「リコ・・・？それって君の持ち主の名前？」

コクン、と人形さんは頷く。

「なるほどね・・・じゃあどうして辺りのものを壊し始めたの？」

『だって、急に光に包まれて、何って思ってた驚いて、慌ててた』

それが僕達には暴れているように見えたって事です。

「了解。最後にだけどなn「なんで私達を襲ってきたの!？」いや人の話し遮らないでっ!？」

なんかいきなりソラちゃんに話し遮られたあっ!？

『だって、他の子達みたいにな、いじめてくると思ったから、』

「「他の子?」「」」

『公園にいた間、いろんな子がいじめてきた、』

公園にいた間、と言うのはおそらくリコと言う名の少女が人形さんを落として行ってしまっから事だろう。そしていろんな子とはこれもおそらく公園で遊んでいた子供達だろう。そしてその子供達が人形さんを面白がって突っついたりいじったりといじめた、で

すか。

「えーと、要するに人形さんは『人形さんじゃない、リリ。』オホン、リリ嬢は別に僕たちを傷つける気はなく、あくまで押さえつける気だったと？」

コクン、とりりさんは頷く。そもそもよく考えて見れば最初の踏み潰しも敵意などを感じなかった。まるであれは前に進もうとして下にいた僕達に気付かず歩こうとしていたような……。

と言うことは……。

「なんかマジスンマセン」

土下座、ともかく土下座。最近多いようないが気がするが仕方がない。勘違いとは言えどちらかと言うと、僕の方が悪いような気がする。

「いや、シヨウが謝る必要はないと思うけど……」

それでも罪悪感はある。

『大丈夫、』

「「？」」

『お兄ちゃんも同じ勘違いなら、お兄ちゃん悪くない、だから謝る必要はない、それに勘違いの原因を作った、わたしのほうが悪い、』

「めっちゃいい子だよこの子ソラちゃん！なんかもう泣けてくるぐ

「いい子だよ!! なかなかいねーぞこういう子!」

「いやあ、私もそう思ってるから・・・」

もう、リリさんのあまりのいい子さにむっちゃ驚きだよ! こういう子が世の中たくさんいれば少なくとももっと世界も平和だったろうによろ。人形だけど。

「それで、・・・どうするの?」

「へ?」

「いや、へ? じゃなくて。リリをどうするの?」

「あー」

当たりたくない問題に当たった。確かにこのままっていうのはちよつとまずい、と言うかめちゃくちゃまずい。

「どうするのって言われてもどうするべきかねー。そもそも原因が分からないからどうしょも」

「原因か・・・」

ソラちゃんが考え込むポーズで考え込む。

「ねえ、リリ。あなた今の姿になるきかけになりそうなおかしな事とかなかった?」

『ううん、おかしなこと、』

「なにかある？」

『特にない、』

「そう・・・。」

「万事休すか？」

さて、どうしたもんか・・・

『青い石が、落ちてきて、それがわたしにふれた瞬間、ピカッってなったことは、おかしいことじゃないし、』

「「それだ」」

いやいや、急に石がピカッて光ったりしたらおかしいからね！？
リリちゃん！？

「で、その石は？」

「あー、リリ嬢の中だね」

「え？」

おー、驚いてるね。そりゃいきなり体の中だと言われたら驚くよね。ん？どうして分かったんだって？そりゃ多くのウルトラマンが共通に持つ技『透視』で体の中を探ったんだよ。

リリ嬢の言ってた「石」は辺りに見当たらなかったから、もしかしたらなんて思ってからだの中を見てみたらビンゴってわけなの

さ。

「なるほど・・・」

「うまいアイデアでしょ？」

「変なことに使わなければその『透視』も便利だね・・・」

「いやちよつとまで、なんで僕が変な事に使う前提になってんの？僕はそんなことには使わないよってそんな目で見えるなあああ！！」

ソラちゃんがすっごくいやな目で見てくるんだけど！？いやそりゃ時々頭を横切ったりするよ！！？だからってさあ！？、

「そんな事よりどうするの？この子の体の中にあるならどうやって取り除くの？」

「そ、そんな事って・・・」

ソラちゃん、酷すぎますよ・・・僕には死活問題なんだぞ・・・

「ショウ、落ち込んでないで早く一緒に考えてよ」

「もういい、もういいよ気にしないから。はあ、どうするもこうするも、もう考えてあるよ？」

「！」

ソラちゃんがまた驚きの表情を見せる。隣に座っているリリ嬢も

驚いてる。

「なめないで欲しいね、だてに守護者をやってないよ」

胸を張っている。そりゃそうだ。たった一人の子(?)を救えないで守護者なんてやっていけない。護りたいものを全て守るためにこの力があって、強くなったんだ。この場をどうにかできなきゃ意味がない。

「とまあ、かつこよく言ってみました☆」

「なんでこの人はこうなのかな・・・？」

なんでだって？そりゃ僕がボケキャラだからさ！サムズアップ！！

『でも、』

「うん？」

「？」

リリ嬢が不安な声を上げる。

『リコちゃんを、見つけれない、』

「それに関しては心配後無用。」

『ふえ？』

「君を元に戻したら、僕達が君のご主人を探してあげるから。」

笑いながら言う。リリ嬢はポカンとし、ソラちゃんはぼーぜんとしている。何？意外すぎたか？

「まったく、」

ソラちゃんが両手を腰に当てながら呟いてくる。

「勝手に決めて、勝手に巻き込むんだからあなたは」

「僕が言わなかったら君が言ってたでしよう？」

「まあ、そうだけど……」

ブーと顔を膨らませながら言ってくる。ブーたれソラちゃんもかわゆす。つといかん、邪念が……

「ほんじゃまあ、いくぜ？」

手をまるで水を汲むように胸元まで動かし、それと同時に光が手の内に集まる。

「ルナエキストラクト」

そして集まった光をスウツとリリ嬢に放つ。
その光は優しくリリを包み、そして、

「……元に、戻ったね」

「だね」

ただの人形に戻り、地面に落ちているリリに視線を向ける。

「しっかしリリ嬢をあんな姿に変えた石ってのは一体・・・？元の姿はさっきの姿みたいにくくくないじゃん。ちよつと汚れてるけど」

そう言い、空中に浮かんでいる青い石に目を向ける。

「ジュエルシード、なるほどだからなの・・・」

「ジュエ、なんじゃそれ？」

「『ジュエルシード』。強大な魔力の結晶で、周囲の生物や物などが抱いた願望、いわば願いをかなえる力を持つてるの。」

「へえ、それって結構いい物じゃん」「だけど力の発現が不安定で、簡単に暴走しやすい代物。『ロストログア』って呼ばれてる相当危険なものだよ、さっきのリリの姿もコレが暴走したものだと思う」・・・前言撤回、なんでそんなあつぶないものがこんな近所に！？」

はやての家数分もありやすぐ着くぞ！？

「わかんない、こういうのはこの世界にはなくて、別次元の世界にあるはずなのに・・・一体どうして・・・？」

「ムムム、なんか色々裏がありそうですねこのやつかいモン。ただ危険なら、」

「？」

「封印すべきじゃ？」

ソラちゃんを見て確認を取る。

「できるよ。たぶんクウガの力でも」

「そうと決まれば！」

バツ、つと両手を左右に広げ、右足を前に出す。そこから封印エネルギーの炎が現れる。それを足に纏い、一気に走り出し……！

「マイティイイーーーーーキイイッ Tuckerーーーーー！！」

放つつっ！！

マイティキックはジュエルシードに当たり、封印の文字が刻まれる。するとさっきまでジュエルシードから感じられていた魔力は嘘のように消え、コトンツと地面に落ちる。

「封印完了」

「うん、これで安心かな？」

「安心かな？ って、」

安心だよ、100%とは言えないけど。そう思っているとソラちゃんはまだ考え込む。

「……やっぱ気になる？」

「うん・・・」

無理もないよね、この世界は『魔法』なんてものは存在しないのにこの世界にあったら。

「考えられるのは何者かがこの世界にジュエルシードを持ってきたことかなんだけど・・・」

「『魔術師』とやら、でしょ？何でこの世界に・・・」

ん、と二人で考えにふけてると。

「あ、あの！」

「ん？」

「ヨウ？」

「そのジュエルシード、渡して頂けませんか!？」

白い服のコスプレ少女が、頭を下げてお願いしてきた。

第5話 ジュエルシード（後書き）

小説のナレーションの書き方について悩んでまして、それについて読者の方々にアンケートを行って決めようと思います。アンケート覧はこちら

1、第三者視点、すなわち地の文を使うか

2、各キャラクターの視点を使うか

3、1と2両方を使うか（今回使ったように）

アンケート期間は約一ヶ月です。よろしくお願いします。

それから文章の書き方などのアドバイスもよろしくお願いします。

第6話 白き魔法少女

「このコスプレは・・・カードキャプターさくら、か？ いや、ちよっと服が違うな、どこかで見たような服だけど、なんだっけ？」

「いやいや、気にすることそこじゃないよね！？」

「おう、そうだった。スマンねコスプレ少女、これは危なっかしいモンだから渡す訳にはいかんのよ」

「それもそうだけど、それだけ・・・？」

ん？ ほかにあったっけ？

「ち、違います！」

コスプレ少女が顔を真っ赤にして叫びながら顔を上げる。

「これはちゃんとした！ ってあれ？」

「え？」

「Wow」

ななんと、コスプレ少女の正体は！

「な、なのはちゃん！？」

「え？ え？ ソラちゃんにショウ君？ どうして！？」

「なのはちゃん、……………ついに目覚めたか……………」

「ふえええっ!?!」

「いやちよつと待って!?!盛大に勘違いしてるよねあなた!?!それ
も思いっきり間違った方向に!?!」

「えっ?だってこんな姿してたらコスプレに目覚めたと言ひよ
うがないじゃん」

「違ーう!これは『バリアジャケット』って言って!魔導師の防護
服なの!魔力感じるでしょ!?!」

「ああー、ほんとだ。へー、バリアジャケットやらはコスプレなの
はー」

「あ、はい?」

「なのはの事は呼んでないから……………。ってそうじゃなくて!
コスプレじゃないのこれは!仮面ライダーと同じで防護服みたいな
もののな!」

「何を言うソラちゃん!全然違うだろ根本的に!」

「なにが!」

「仮面ライダーは、魔導師じゃなあああああい!?!?!」

「……………反論できない」

「せ、正論」

「だ、だけど！」

「あのー、そろそろよろしいでしょうか？」

・・・・・・？

辺りをキョロキョロ見渡す。だけど誰もいない。
いるのは僕、ソラちゃん、なのちゃん、あとなのちゃんの肩に
いる・・・・・・イタチ、じゃなくてフェレット、かな？ だけだ。

「透明化・・・？」

「おーい、誰だーい、出てこーい」

「あの、こちらです」

再び声がしたのでその方向を見てみると、

心情がひどく分かったよ……。

ちなみにソラちゃんの反応は……？

「うわー、かわいい！フェレットなんてなかなか見ないからどんな感じかなって思ってたけど、やっぱりベリーキュートでチャーミング！」

「見事にキャラ変わってましたとき、チャンチャン」

「え？え？そ、それでいいの？」

「なのちゃん、かわいいは正義なのだよ！だからオーケー」

ちっちゃな動物にハグして喜んでるソラちゃんなんてめったに見られるものじゃないよ、このかわいさは僕にこうかばつぐん！……
いかん、また邪念が……

「ええと……」

見事に混乱してますねなのちゃん。まあまずそれより、

「そろそろそのフェレットさんを離してあげなソラちゃん、苦しそうだよ」

「えー、」

「えー、じゃありません。離してあげなさい」

「ば、僕もそうしてくれると助かります……」

ほらほら、本人(?)もいつてるじゃないの。

「とゆーかよく喋るフェレットにビクつかずにいられたねソラちゃん。」

「え?だって動物が喋ることは別におかしくないじゃん」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

井上さんポジションですね、分かります。

「と言うよりソラちゃんが言ってるその喋る動物ってのは、ただの(・・・・)動物じゃなくて妖狐や猫又とかの妖怪の(・・・・)の動物じゃないの?」

「あ」

「やっぱり・・・・・・・・」

ソラちゃんは一様常人だけど時々乗っちゃってハチャケちゃうんだよねー。なのちゃんとユーノ君、だっけ?はなにやら聞きなれない言葉を聞いて少し思想が停止しているもよう。しかし言っておくがこの町には忍者やら霊やら妖怪やら退魔師やら超能力者やら吸血鬼やらというらしいですぜ! b y ソラちゃん! ん?なぜ僕がそれを信じてるかって?そりゃあ、まあ、僕がコレ(・・・・)ですからね、嘘ともいえないでしょ?

「何がともあれ、おーいなあのちゃんにユーノくーん」

「妖怪は実在する・・・・?夜中にトイレ行く時にお化けが出てく

るかもしれない・・・？一人でトイレ行けなくなる・・・！」

「・・・妖怪って・・・なんだ・・・？」

「いやマジで戻って来ーい」

「ハッ、私はちゃんと夜中にもトイレ行けますう！？」

「いや、それは任せるけどそろそろユーノ君の話を聞かないカ？」

「・・・妖怪、妖kあつ、はい。ええと、・・・なんだっけ？」

大丈夫か・・・？

「ジュエルシードを渡して欲しい事についてじゃないの？」

「あつ！そうです！それです！」

「おお、ナイス推理ソラちゃん」

褒めたとたんムツフン、とない胸張ってますよ。

しかしジュエルシード渡して欲しいなんて何でまた・・・？

「ショウ君、ソラちゃん。さっき言った通りそのジュエルシードを渡して欲しいの！お願い！」

「それは最初言ってたから分かったけど、な「なんで必要なの？」もう怒っていいかなソラちゃん？」

数年前からだけど勝手に人のセリフを遮るのはやめて欲しい。

「一樣こっちとしてもまだ大して年も行かない8歳の「9歳です」9歳のなのちゃんに危なっかしいジュエルシードを渡すわけにもいかないんでね。あと、なのちゃんってもう9歳だっけ？」

「大丈夫だよ！もうこんなに集めてるから！あと、今年とっくになったよ！」

ほら！とジュエルシードを4つ見せてくる。おおっ、よくこんなに集めたな。

「ジュエルシードの暴走で生まれた毬藻みたいなや犬(?)の怪物と戦ったりがんばったんだよ？」

「すごいと褒めたい所だが今さっき9歳の女の子から聞き逃せない言葉を聞いたんだが」

9歳だぜ？9歳の女の子が怪物と戦うなんて、オイ。

「こちらもまあ、戦ったけど暴走とはいえない安定ぶりだったね？姿はともかく」

「そだね、正直原因がジュエルシードって分かったら暴走しなかったあの子にすごく驚いてる」

「え、暴走しなかったの？」

「そんなことが・・・」

「ほんとだぜ？ 見てみる？ エクストリーム」

いつの間にか既に隣にいたエクストリームにさっきの映像を再生させるよう声を掛ける。いちいち映像を保存しているわけではないけど人間がさっき見ていたものをしばらく覚えてるようにエクストリームもさっき見たものをしばらく覚えてるのよ。それでその覚えてる映像を再生させてるってわけ。てか僕のリーダーにまったく引つかからず隣にいたこいつが怖いんだけど、なにやつ！？

少年少女動物映像閲覧中

「・・・ほえ」

「こんなこともあるんだな・・・」

さっきの映像を見てそれぞれの反応をしめす二人（？）
でもやっぱりリリ嬢の純粋さには泣けるでえ。

「私達の場合はこうはいかなかったのに、なんかずるい・・・」

「そう言われてもね・・・」

色々と苦勞をしたらしい、落ち込み度がひどい。

ふと気付くとクイクイとソラちゃんが服の袖を引っ張ってくる。

「ん？ どないしたソラちゃん？」

「ねえ、そろそろこのメタフィールド解かない？もういいと思うんだけど」

「それもそうだね、んじゃ解除」

パチン、と指を鳴すと、上のほうから光が現れそれが徐々に下まで降りてき、完全にメタフィールドが解除される。

「コレは君が作り出したものだったかのか・・・」

「ん？そうだけど？」

ユーノ殿少し考えにふけつとるが、どうしたんだ？

「さて、このジュエルシードに関してなんだが――――」

僕の行動があるものが視線に入ったとたん、止まる。

「「「？」」」

そんな僕の行動に三人（？）が？を浮かべ、僕が見ている方向を見る。

そこにいたのは何かを捜している様子の小さな女の子だった。

「なん・・・だと」

「ど、どうしたのシヨウ君！？」

僕のただならぬ様子になのちゃんが僕に様子確かめる。他のみ

んなもその答えを待っている感じだ。

だ、だってあの子は、あの子は・・・・・・・・・・！！

「仮面ライダーWに出てきた理香子ちゃん・・だと、前からそうだが何でこの町はこうどっかのキャラクター似が多いんだグベアツ！！？」

「それかい！」

見事に右ストレートが腹に決まったら、余計な神経使わせないで！ってソラちゃんに怒られてるんですが、なぜ？いやいやだってそうそういねーでしょどっかのキャラクター似の人なんて現実に。

「リリちゃん、どこにいるの〜」

その言葉に僕の耳がピクリと動く。ソラちゃんはいまだお怒りのようで気付いていない。ならば・・・・

「ねえ、君？」

「ふえ？」

その少女に近づいて声を掛ける。途中ソラちゃん達な何か言いたげだったけどかまわず近づく。

「えとね、さっき君が言ってた事が聞こえたんだけど、」

「・・・・・・うん」

少女は少し警戒しながら頷く。

(最近の子はしっかりし過ぎてるな)

思わず苦笑ってしまう。少女はその苦笑いにコテン、と首をかしげている。かわゆい……

「君が探してるリリちゃんってのは、この子のことかな？」

「あっ！リリちゃん！」

後ろに隠し持っていたリリちゃんを少女に見せてあげる。すると少女は顔をパァ、と輝かせた。

「寂しがってたぞー、リリちゃん。もう落として行っちゃだめだよ？」

「うん！ありがとうお兄ちゃん！」

少女は満面の笑顔でペコリと頭を下げる。よかったよかった。少女は頭を上げるとタタタッ、と公園の出口に向かっていった。

「あの子って、リリの持ち主だったんだ……」

隣にソラちゃんがやってくる。

「うん、まあリリ嬢と約束してた『ご主人を探してあげる』ミッシヨンは見事 accomplish! ってわけなのですヨ」

「よかったあ、リリちゃん持ち主の人と会えて」

また別の隣に先ほどのバリアジャケット、即ちコスプレもどきじゃない普段服でやってくる。

「ま、コレにて一件落着つてなわけで！」

とみんなに振り替えり、綺麗に閉めてみる。

.....ありがとう、お兄

ちゃん

「?！」

その声に僕達が驚く。その声のした方を見ると、

理香子ちゃんに抱かれながら、かわいい笑顔で僕達に笑いかけているリリちゃんがいた――――

なのちゃんとユーノは慌てて目をこすっている。ソラちゃんもブンブン頭を振るってる。

だけどそのときには既にリリちゃんはただの人形になっていた。

「Pの遊戯、か……」

「え？」

「『亜樹子は、本当に人形の声を聞いたのか？フィリップは、それが事実ならパペティアのガイアメモリが、操られた人形にも何らかの作用を及ぼしたのだろう、と言った。でも、俺には思える。あの人形が本当に堀之内の事を思って、亜樹子に依頼しに来たんじゃないか、って』と『真実は分からない。だが、まあいい。この街にはミステリアスと言う言葉がよく似合う。美しい謎は謎のまま、それも悪くない』と、いうことを言ってたよ、左 翔太郎は」

「えと、どういうこと……？」

「よくおぼえてたね……」

「記憶力はいいんだ。ようするにあれはジュエルシードのせいなのかは分からない、だけどそれも謎のままでもいいじゃん、ようはり嬢はお礼を言ったということで。『美しい謎は謎のまま、それも悪くない』、ってことよ」

そんな僕の言葉に全員がポケッ、としていたけどすぐにクスツと笑う。

「なんじゃい、そんなにおかしかったか？それともかっこつけすぎ？オイオイかっこよくするのは男がやりたいシチュエーション第2位に入るんだよ？とある武装明晰夢少年が言ってたよ？正確にはちよつとちがうけど」

ちよつと文句を言ってやる。

「ううん、ただそれもそうだなーって思っただけ」

なのちゃんが笑って言う。

「僕も、そんなに考えなくてもいいか」

ユーノがうんうん頷いてる。フレットだけにすごいシユール・・・・。

「私もなのはに賛成！それにさっきのショウすごくひどい」
「それ以上言ったら怒るぞ？」えー、いいじゃんー」

僕にとっては禁句タブーを言おうとしたソラちゃん。ブーブー言ってもだめ！最初のころは嬉しかったが最近よく言われるから若干鬱になつてきなんだぞ・・・・「女顔左 翔太郎！」ってのが主な原因で・・・・

「ま、これで真正銘一件らぁおっと、大事なことを忘れてた」

「ひよらー、やめひゃいかー」と言っているソラちゃんのほっぺをむにむに引っ張りながら大事なことを思い出す。

「「？」」

「ここを閉めるにはコレよコレ！」

ポン、ポポポポポポポポ、

どこからともなく太鼓の音が流れる。

「ハーイ、皆さんご一緒にー！」

スッ、と両手を真ん中あたりまで挙げる。ほかのみんなも「へっ？」って顔をしてるけど流されるがままにやってる。

「ほい」

ポポンッ

手をたたき、

「これにて、一件落着」キリッ

カンッ、

シンケンジャーのアレで閉める！

「ってこれがやりたかったただけかあああっ！！」

「ジンゲンマルツ!!?」

妙な奇声を出しながらソラちゃんにぶっ飛ばされる。なぜ!?

「そりゃそうでしょ! いきなりわけ分からないことやられたら!」

心読まれた!? 女性恐るべし……けど、

「これで今回のことはマジで終わりですよ」

ひょいつ、と近くに置きっぱなしだった買い物袋を持ち上げる。

「あ、うん、ありがとねショウ君」

「苦労を掛けました、」

「いやいやどうって事もないよ。じゃ!」

「なのはもユーノ君もじゃあね」

手を振ってお互い分かれていった。

~~~~~

「やれやれ、ただの買い物こんな騒動になるなんて、不幸だ」

「でもそんなに悪い事ばかりじゃなかったんじゃない？」

「まあ、それもそうなんだけどね」

色々疲れたが、一分間じゃない深イイ話も見れたしね。

（それにしても……………）

不意にソラちゃんの顔が暗くなる。

（ジュエルシード……………どうしてこの世界に……………よりもよってシヨウやはやての世界に……………）

「ソラちゃん？」

「え？」

「どないした？　なんだか顔が暗いぞ？」

「う、ううん、ちょっと考えごと」

「そう……………、ならいいけど」

ソラちゃんが暗い顔をしていたのでちよいと心配になる。おか



たジュエルシードがこの世界にあることだろうけど、心配になるねゝ、だって暗い表情はイヤじゃない？

「なのちゃんが魔法少女ねー。やれやれ僕の日常が危なくならなければいいけど、」

「私がいる時点でそれはもうないよー？」

「君の存在をも僕の日常に吸収してやんよ！」

「わっ、私シヨウに食べられちゃうんだ、可愛いそうなソラー」

「……本当にいいの？」

「えっ？」

「冗談冗談☆そんな事するわけないでしょ？そもそも何をどうしたら僕が君を食べることになるんだ？」

「え、あ、あはは、冗談ね、冗談なんだね、あははは……」

「ビビりすぎだぜソラC—————あ」

「えっ、なっ、何っ!？」

いまだ僕の先ほど発言にビビッてるのかソラちゃんがワタワタしている。やっぱまじめな人はいじりようがあるなー、ってそうじゃなくて！

「なのちゃん達にジュエルシードのことや魔法少女になったこと聞

くの忘れてた・・・」

「あ」

「・・・」

「明日で、いつか・・・」

「そだね・・・」

あ、明日があるさ!?

## 第6話 白き魔法少女（後書き）

第5話の後書きのアンケートの投票、アドバイス&amp;感想、お待ちしています。

## 第7話 その理由は（前書き）

再びスミマセン！！結構こちら側で忙しくて、なかなか小説を書く機会がなくて、更新がどうしても遅れてしまうんですね・・・・（汗）。なるべく速く書けるようにしないと・・・・。遅れてですが、第7話です。

## 第7話 その理由は

——— side ショウ

「デンデンデーン、デンデンデーン、デンデンデンデンデンデン  
ーン」

「なに歌ってるの・・・？」

「デンデンデーン、デンデンデーン？ゴジラのあのBGMを鼻唄っ  
てるのさ！」

「なんでまた・・・」

「ひま」

「じゃ別のことしなさい！」

ないからこれやってんのよソラちゃん。ども！こちらショウどうえ  
す！現在あれを歌いながらとある所に向かっていまーす！  
それはそれはー！

カランカランッ

「いらっしやいませー、あら、ショウ君！」

とある店に入り、お客が入ったと知れる鈴が鳴り、やたらと女性  
客が多く、おいしそうなお菓子やケーキが並べられている！（ジュ

ルリ（「u」）そして甘い香りが漂う中、美人な店員さんが迎えてくれる！もう分かったかな？

「それはそれ、ドロドロ翠屋でしたー！ハイ拍手、パチパチパチ」

「ほんと何やってるの・・・？」

「マジで暇」

「なのに何でこんなにテンション高いの・・・」

「上げてかないとシーンとなって逆に暗い空気になりそうだから」

「ここはご苦労様って言うべきなの・・・？」

何を言うソラちゃん。そうに決まってるでしょ、テンション上げっぱなしは疲れるんだよ？

「久しぶりね、ショウ君。久しぶりかしら？」

「二日ぶりです」

「全然久しぶりじゃない!？」

僕のボケに動じず、平然と接してくるこの人は高町桃子さん、ここ『翠屋』のパティシエ。この人のシュークリームは絶品だよ？

「さて、来てもらったからにはしっかり接待しなくちゃね！ご注文は？」

「んゝ、じゃあこっからここまで全部ください！」

「ようするはここにおいてある物全部食べるってことだね？」

「うん、そうだけど？」

「だめに決まってるでしょ！！？」

ソラちゃんが叫ぶ。

「えゝ、なんでよ？全部食べれるぜ僕は？」

「そういうことじゃない！そりゃあなたなら食べれるでしょうけど、そんな全部食べたらお店の人やほかのお客さんが困っちゃうじゃない！」

「確かに、こちらとしても全部はやめてもらいたいんだけど・・・」

「むう、他の人の迷惑になるならさすがにやめておくか・・・  
チッ（ボソッ）」

（（今舌打ちした！？））

ガビーンとなってしまうているソラちゃん& a m p, 桃子さんコン  
ビ。どうしたんだ？

「もし他人の迷惑にならなかつたら全部食べてたの・・・？」

「当然」

「病気になるよ!?!? なんかの!?!?」

「飛んだり、跳ねたり、殴ったり、蹴ったり、斬ったり、撃ったりよくしてるから大丈夫だよ」

「今、危ない言葉が出てきたような気がしたんだけど……」

「健全な意味なんで大丈夫です桃子さん」

「殴るとか斬るとかに健全はないと思うけど……」

「んじゃ安全で」

「どっちも似たような意味だね!?!?」

「んも、文句が多いよソラちゃん」

「あなたが言わせるんでしょ!?!?」

ギャーギャーと二人で騒ぐ。その光景にさすがの桃子さんもちよつと引き気味だ。

ちなみにその後、後ろで注文しようと並んでいた人達（ほぼ女性）に「速くして!」と怒られました。スンマセン……



~~~~~

「もぐもぐはぐはぐ……」

「前からだけ良く食べるよねあなた……」

結局僕が注文したのは翠屋にある全ケーキやお菓子をそれぞれ一個ずつだった。やっぱり物足りないな。もう半分超えちゃったよ。ちなみにソラちゃんはジュースとショートケーキね。

「もぐもぐ、もあ、もぐもぐ、みよくひうひやない、はぐはぐ、もらがへってふあ、はぐ、いむさはめきないと、もぐはぐ」

「何言ってるのか全然わかんないから、あと口に食べ物入れて喋らない」

「もぐもぐ、ゴックン。まあ、というわけよ」

「だから何言ってたのか分かんなかったんだってば！！」

再び、ギャーギャー騒ぎだす。まあ主に騒いでるのはソラちゃんだけどね。ん？なに騒ぐ原因を作ったのはお前だろうだと？何を言う、ボケに対しツッコミが騒ぐのは当然サ！まあ、僕はボケてなんかいないけどね、今はこのおいしいケーキとお菓子を食べたいし。

「つてことはあなたやっぱり天然ボケなんだ……」

「……僕の予感が告げる、今君軽く僕の心読んだよね？」

まあ、もう気にしてないけどさ。

さて、ここに来たお目当ての子は……………？

カランカランッ

「おっ、来たようだね」

「あっ、シヨウ君！ソラちゃん！」

「ようーう、なのちゃん」

「やっほー」

ここに来たお目当ての子、『高町なのは』嬢がここに参上！

「んで、両sideにいるgirlsは？」

と思ったら左右に他の女の子がいました。お友達かな？

「あ、ええと紹介するね。こっちがすずかちゃん、それでこっちがアリサちゃん」

「月村すずかです」

「ア、アリサ・バニングスです」

「すずかちゃんとシヤナ？……………スンマセン、冗談です。僕は左

風ショウ、こっちが」

「ソラ、よろしくね」

軽い自己紹介、初対面のときは大切だね。紫色の髪の子がすずかちゃん、ドラえもんは関係ない。金髪の子がアリサちゃんね、決して炎髪灼眼の女の子は思い浮かんでないですとも、ええ。

すずかちゃんは落ちついてて、アリサちゃんは活発そうな子だね、ちよつと僕達に対してドキマギしてるけど。

「あの、ショウ君」

「ん？どうしたなのちゃん？あー、いや、言わなくていい。『ジュエルシード』でしょ？」

「うん、そのことでお話したいんだけど・・・」

「All right、ソラちゃんも別にいいよね？」

「ん」

「うし、じゃあ、ってそういやユーノは？」

「えっ？ユーノ君？」

不意になのちゃんが念話ではなく言葉で話してくる。

「さっきから見当たらんが・・・もしかして別の場所にいる？」

「ううん、ここにいるよ」

するとあのちゃんもポケットからユーノを取り出す。
窮屈じゃないのか? と思いながら出てきたユーノはなぜかボロツと
なっていた、なぜ!?

「フーイ、ユーノ生きてるかー?」

「い、いろんなとこナデナデされた、もう、お嫁にいけない・・・
・・・」

「嫁じゃなくて婿だと思っただけど・・・」

「思想回路がおかしくなるほど、一体何があつたの・・・?」

「あ、あはははは・・・」

「フ、フフフフ・・・女子に動物となって撫でて
貰うのがうらやましいだって?」

すると不意にユーノがまるで呪いを吐くように喋り出す。

「なら一つ言わせてもらおう、・・・まずは、その幻想をぶち
殺す!」

あのちゃんの手中で突如ウガーツ! と思いつき起き上がる。す
ると最後の力だったのか、パタッ、と倒れてしまう。って、

「ユーノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!!
!?!?」

「どんだけやったのあなた達いっ!？」

「ふえーん、ごめんなさい!」

倒れてしまったユーノに必死に呼びかける僕、ユーノをここまでしたであろうなで魔の一人に叱るソラちゃん、それに対し涙目で謝るなのちゃん。

「ど、どうしたのよ!？」

「何があつたの!？」

「あなた達もじゃあああー！ー！ー！ーっ!！」

「「ええええええっ!？」」

「ユーノオオ!しっかりせい!水か!?ミルクか!?いや、ミルクはおかしいか?ユーノオオオオオオツツ!！」

もはやカオスだった・・・・・・・・・・

余談だけど、その後他のお店にいた人たちに「うるさい!」と怒られました。マジسنマセン・・・・・・・・・・

~~~~~

「んじゃあ、聞こっか。君達の話」

なんとか騒動が収まり、すずちゃん達はそれぞれケーキを買っていくと帰っていった。……そういや聖祥学園って結構なお坊ちゃまお嬢様学校だっけ、初めて生で見たよりムジンなんて、しかも続けて二回も……。ま、気を取り直して！

「なのちゃんがねぜ『魔法』を知っているのか、ジュエルシードがなぜここに散らばってしまったのか、てかもう今まで全部あったかと教えて！」

「結局全部!?!」

「大体分かればよろしい」

「いいの!?!それで!?!?」

「問題ない!.....まず

「最後メチャメチャ不安そうなんだけど.....」

「細かいことは気にするな。それで、なのちゃん達？」

「ええと、どこから言えばいいかな・・・？」

「なのは、ここは僕に話させてくれない？」

「ユーノ君？」

「ほう？」

「？」

僕達がそれぞれ？マークを頭に思い浮かべていると、ユーノが話し始める。

＼動物（？）説明中＼

ユーノの話を大体で言うところだ、

元いた世界で遺跡発掘中↓ジュエルシード発見↓調査団に保管してもらおう↓その時空船が事故に合う↓ここ（地球こと海鳴市）に散らばる↓責任感じて集めに来る↓力不足↓魔法の才能なのちゃんを持つ人に一時助けてもらおう↓するとなのちゃんが自分から手伝いたいと言い出す↓協力↓今

らしい・・・・・・・・・・

「ホント大体だね・・・・・・・・」

「でも一通り分かるでしょ？」（＞▽＜）b ビッ！

「まあ……」

「やけどこの行動はちょっとー、危なくないか？ ユーノ？」

「それは……」

ちよつと思つたことを口にしてみる。

「ジュエルシードが散らばったのはユーノのせいじゃないのに、それでも集めに来たのは凄いよ。それでもちよつと、言うかかなりの無茶だよ、一人で来るのは。場合によってはある程度の無茶は仕方のないことなのかもしれない、けど限度ってモンがあるよ。

そして結果的には一人で無茶したせいで大怪我した上、なのちゃんにも迷惑掛けちゃってるし。こんなに危険な……どのぐらい危険？」

「軽く次元震は起こせるぐらい」

「めっちゃ危ないじゃんか！ よく一人で集めに来たな！？」

お兄さん驚きだよ！？ そう声を荒げて言うと、ユーノは顔を俯かせてしまう。

……どうやら結構気にしてたみたいで……

「ユ、ユーノ君……」

なのちゃんが心配そうに声を掛ける。……ちよつと言い過ぎたかも知れんな。でも一応言って置かないとね、また似たようなことさ



れちゃたまんないから。

「シヨウ・・・・・・・・」

「フーム・・・・・・・・」

けどまあ、もう過ぎてしまったことだし、

「・・・・・・・・まあ仕方ない！」

パンツ、とテーブルをたたく。その行為にソラちゃんたちがビクツ、と跳ね上がる。

「終わっちゃったことをいつまでも気にしてたりしてもしようがない！次に生かしゃいい！そうくよくよすんな！原因僕だけど・・・・・・・・」

なんかup&downな言い方だけど、素直なことを言ってみる。そんな僕の言葉にポカンと彼女達はしていたけど、次の瞬間クスツ、と笑う。

「つていやなぜ！？」

「あはは、ううん、ただシヨウ君らしいなく、って思って」

「シヨウはそんな感じだもんね」

「若干腑に落ちんのだが・・・・・・・・」

「あの、シヨウさん」

「ん？」

するとさっきから黙っていたユーノが口を開く。

「ありがとうございます。なんだかちょっと荷が落ちたような感じがします」

「いや、そこまでたいしたことは言っていないと思うんだけど……」

「ううん、そこまでたいしたことを言ってるよ。だってユーノ君ずっとこのこと気にしてたもん」

「まあ、ユーノの無茶はまだどこぞの無茶苦茶少女よりはマシだね、うん」

「なんでそこでわたしのことをガン見してくるの!？」

「いや、なのは。シヨウの行動あながち間違っていないから」

「ソラちゃんまで!？ユーノ君も苦笑わないでよ!そしてシヨウ君そのガン見やめて!目を思いつき見開いてガン見するのやめて!」

「むう、ならば対象を変えよう」

「なんでそこで俺を見る……」

僕が目線を変えた先には無茶苦茶しました前科を持つ 高町 恭也

、なのちゃんの兄がいる。

「なんでそこで俺を見るかって？胸に手を当てて思い返してみな」

「……（胸に手を当てて思い返し中）……いや、分からん」

「うん、お前そこに直れ。スーパー上条タイムならぬスーパー左風タイムだゴラ」

「店のど真ん中でそれはまずいと思うんだけど……って早速始めようとししないで!？」

席を立てて無理やり恭也を正座させようとする僕をソラちゃんが慌てて止める。

止めないでくれソラちゃん、こいつには一度ガツンと言っとかないといけないんだよ……!!

~~~~~

side ソラ

なんとかショウを落ち着かせることはできた。急に大胆な行動を取るから焦るよもう……。

「あのショウ君、ソラちゃん。二人が持っているジュエルシールドについてなんだけど……」

なのはが申し訳なさそうに聞く。

「二人が持っているジュエルシールドを、渡してください！」「いいよ」
「即答!?!」

なのはとユーノが声をそろえて叫ぶ。まあ、こうなることは予想で
きた。

「うん、ほら」

となのはにジュエルシールドをポイツ、と渡す。

「わわっ」

それをなのはが慌ててキャッチする。

「あ、危ないよショウ君！」

「んいや、大丈夫、ちゃんと封印してあるから」

「それはそうだけど、ホントにいいの？逆にアッサリ過ぎで怖いの・
・・・」

「ヒドくね？ちょっと」

「ロリコンだからでしょ」

「いや、まったく持って関係なくね!?!それに僕ロリコンじゃない
し！」

それとかなりロリコンのことを軽蔑しているようだが、一つ言っておこう。

真のロリコンを阿呆な奴らと一緒にする「ロリコンのことは冗談で言ったの、それにいまからロリコンのことを熱く語ると自分はロリコンです、って認めてるようなもんだよ？」

「Oh, Noooooo!」

「えと、これわたしが原因・・・？」

「ううん、なのは気にしなくてもいいから」

なんか英語で絶叫しているシヨウになのはが心配そうにしていたから、別にしないでいいと伝える。

あっ、シヨウが撃沈した。

「あの、シヨウさん」

「うう、なんだい・・・？」

「ホントに、いいんですか？こんなにアツサリ渡してもらって？」

「いや、だから別にいいってば、そもそも逆に言えば僕達がこれを所持しておく理由もないし、メリットもないしさ」

「あ、ありがとうございます！」

ペコリとユーノが頭を下げる、それに対しシヨウがちょっと困った顔になる。なのはと私はお互いに顔を見てクスリと笑いあう。そこでふとあることを思い出す。

「あつ、そうだ」

「?、どした?」

「シヨウ、もうそろそろ・・・」

「あーあ、確かに」

お互い店の時計を見てとある用事を思い出す。

「?、どうしたの?」

「いやいやちようど用事を思い出してね、今日はここらで行かせてもらうよ」

シヨウがそう言うと言席を立てレジに向かっていった。それに私も慌てて付いていく。

「え、何の用事?」

「んー?」

お金を払いながらシヨウはなのはに向く。

「けんこー診断」

そう言うわたし達は店を出ていった。

余談だけどショウが払った金額は翠屋の全種類の製品を一つずつ食べただけあって、すごい金額だった……。お金はショウがはやてと会う前に既にショウが持っていたものを使っているらしいけど、貯金大丈夫なのかなあ……。？

第7話 その理由は（後書き）

第5話のアンケート結果は3になりました。UFZKさん、ありがとうございました！！

感想&アドバイス、お待ちしております。

第8話 俺の約束

———side

「そろそろ、ね」

彼女は時計を見る。もうすぐ彼女が担当する患者が来るころだ。

「元気にしてるかしら、はやてちゃん」

はやての担当医である彼女、『石田 幸恵』は、はやてのカルテを見ながら呟く。

はやては一人ぼっちだ、物心着く前親を失った。さらに彼女の病気のこともあって、なかなか外で遊べない上、学校にも行けない、そのため友達も少ない、否、いないだろう。

そんな彼女と唯一接点を持つ自分がせめてもの彼女に寂しい思いをさせないよう、なにかと気に掛けている。

「うん、気を引き締めなくちゃね！」

パンパン、と自分の頬を叩く。

ウィーーン

自動ドアが開く音がする。

「!・・・来たかしら?」

ちよっと覗いてみると・・・・・・・・

「んも、はやちゃんはおっちょこちょいさんなんだから（野原しんのすけ風）」

「メンゴメンゴ、病院に行く時間を1時間ぐらい間違っったわ」

「おかげで慌てて帰ってきた私達の苦労は水の泡だけだね」

「だからメンゴやってば」

見知らぬ二人と共にはやてが病院に入って来た。

「・・・・・・・・誰?」

「めっちゃ反省してるようには見えないんだけど・・・・・・・・メンゴって何!?!」

「むっ!メンゴを知らんのか!あんなソラ、メンゴってのは」

「フムフム」

「私が買い物に行く途中、女子高校生が使ったこと言葉や!」

「結局自分も知らないんじゃない!」

「『メンゴ』ってのは、ごめんのギャグな言い方だよ、昔流行ったつか古いよそれ」

「（。Д。）！？」

「なんでその古いのをあなたが知ってるの？」

「僕も買い物に付き合ってたその言葉を聞いて、気になって調べた」

「同行してたんかい！！」

「悪い、人達ではないようね……」

友達かしら・・・？と謎の二人組みこと、シヨウとソラのことを疑問に思っている石田医師。

「そ、そもそも苦勞するはめになったのはソラ達が忘れとったからやろ！？わたしわるくない！！」

「苦し紛れになに言ってるんだあなたは！シヨウも何か言ってあげてよ！」

「そうや！シヨウも何かソラに言っただれ！」

「だからなんで私が攻められるの！？」

「「シヨウ！！」」

「えーと、予約した（一応）八神ですけど」

「はい、八神さんですね」

ソラ達のやり取りを完全に無視し、アポイントメントを取っていた。

「聞けや！！（聞きなさい！！）」

「げぶほおッ！！？」

「お、お客様！？」

「大丈夫かしら・・・・・・」

色々と暴走している彼女達三人に不安が募る・・・。。。

~~~~~

「ところでその石田先生ってどんな人なの？」

先ほどのツツコミで今だ痛む背中辺りをさそり、はやての車椅子を  
押しながら聞くシヨウ。

「ん？石田先生はめっちゃ優しい先生やで！シヨウ達も会ったら分

かるわ」

嬉しそうにシヨウ達に言うはやて。この嬉しさはまさにはやての石田先生に対する信頼が現れている。

「優しい先生、か・・・・・・・・・・」

「・・・・？どうしたの？」

はやてのすぐ隣りを歩きながら、シヨウの様子がおかしいことに気が付くソラ。

「いや、ちょっとね・・・・・・・・」

「？」

あはは、と苦笑いながら誤魔化す。それに？を浮かべたが、特に気に留めないでおいた。

（大人の、ね・・・・・・・・・・）

複雑な感情を抱きながら、病院の待合室へと向かう。

~~~~~

「久しぶりです、先生！」

「久しぶり、はやてちゃん」

自分達の番を呼ばれ、診察室に入ってきたはやて達。はやては石田先生と仲良く挨拶をしている。

「それじゃあ、今回の診察をと言いたい所なんだけど、」

「？」

「後ろのお二人は・・・？」

「あ！」

見慣れぬ後ろの人達ショウとソラに石田先生がはやてに質問すると、彼女は何かを思い出したような顔になる。

「せやった、ショウ達のこと石田先生にまだなんにも言ってへんだんやった。あのな先生、ショウ達は、」

とソラを顔を見合わせる、ソラもはやての意思が分かったらしく、うんとお互い頷くと、

「「家族や！（です！）」・・・という名の同居にnだだだだだだだだだッッ！！足踏むな足を！」

ピッタリなタイミングで言う。だがそのあとにショウが付け足したとたん、ソラは自分の足で、はやては自分の乗る車椅子で両サイドから踏みつける。

「何で急に付け足すの！？別にいらなかったじゃん！！」

「そやで！それに同居人ってなんや！わたし達家族の絆はそんなもんなん！？」

「まだ言ってる途中！人の話を最後まで聞けつての！！あと早く足とタイヤをどけろ！冗談抜きで足の骨が折れそう！！」

そう言うとうとうくソラ達が足とタイヤをどける。ショウは痛む足をさそりながら話を続ける。

「僕が言いたかったことは、『という名の同居人であり、同居人という名の家族』だよ。ようは血の繋がりとか、遠い親戚とかの関係はないけど、それでも『家族』だって言いたかったわけ、君達が言ってたこととはなんら変わりはないよ」

そう言い終わるとあーイタタ、と足をよくさそる。ソラとはやてはその言葉にうれしそうにし、顔をほころばせる。

「そういうことならばよ言えばよかったのに」

「うんうん」

「勝手に人の話を遮ったのはそっちだよね……？あとその人がさっきから呆然としてるぞ」

「「え？」」

首を動かすと石田先生がショウの言ったとおり呆然としていた。

「あ、すみません先生、うるさしてもうて・・・」

「ううん、別にいいんだけど・・・ようするにあなた達は『家族』、と言うことね？」

「はい」 「・・・ああ」

石田先生の最後の確認にソラとショウは頷く。

「そっか・・・よかったわね、はやてちゃん」

「-----!・・・はい!!」

石田先生は優しくそうにし、はやてに言う。はやては石田先生の言葉に笑顔で答える。そんな光景にソラは嬉しそうにしていた。

・・・ただ、ショウは難しい顔で腕を組んでいたが・・・

~~~~~

~~~~~side~~~~~ソラ

~~~~~

~~~~~


『どうしたの?』それでは目的語がなく、意味が伝わらない。けど、シヨウは私の言いたいことに気付いてる。

先ほどのシヨウのおかしな様子、それを私は聞いている

「……ちょっとね……」

「ちょっととか、まあとか、話をはぐらかしてばっか、ちゃんと答えて」

ちょっと強めに言う、それにシヨウは困ったような顔になる。

「……そう言われても、あんまり言いたくないんだけど……」

「言って」

「んな殺生な」

「それとも——」

シヨウに近づき、腰を曲げて下から目線、即ち上目遣いで見つめ、

「私のこと、信用できない?」

聞く、それもちょっとかわいらしく。……自分で言うのもアレだけど。

「あ、あのね……」

それにシヨウがさらにバツが悪そうな顔になる。すると観念したの

か、ため息をつきながらしぶしぶ喋りだす。

「あんまり、大人のこと好きじゃないんだよ……」

「……？、石田先生はいい人みたいだけど？」

「いい人、悪い人関係なく、嫌いなんだよ……」

とショウは視線を窓の方にやる。もうちょっと聞きたかったけど、これ以上は聞いちゃいけないような気がした。

ガチャッ

「「！」」

診察室のドアの開き、はやてがひよこっとな顔を出す。

「ショウ、ソラ、検査終わったよ」

「やつと？はあゝ、待ちくたびれたあゝ」

「何も悪いところはなかった？」

「それは――――」

「私から説明したいと思います」

さらにはやての後ろから、石田先生が出てくる。それと同時にショウの目つきが鋭くなる。それに気付いた石田先生は顔を強張らせるが、話を続ける

「・・・・・・・・・・は、はやてちゃんの症状について話したいんですが、
・・・・・・・・・・保護者の方はどちらで・・・・・・・・・・？」

「「・・・・・・・・・・」」

わたし達はほぼ一斉にお互いを見合う。

保護者は未成年者を保護する者のことだ、主に親とか大人のことを
示す事が多いんだけど・・・・・・・・・・

はやて、は当然保護対象だから違う。

私、は結構な年齢だけど、大人かって聞かれたら正直・・・・・・・・・・

シヨウ、は・・・・・・・・・・あれ？何歳だっけ？

「・・・・・・・・・・僕、だね」

「だよね・・・・・・・・・・」

「やね・・・・・・・・・・」

年齢は忘れちゃったけど、それでも八神家の中ではシヨウが一番保
護者に近い、なんていうか、お兄さんとかパパさんに近いから・・・・
。。。。

「・・・それでは、俺が行きます」

「分かりました」

二人は診察室に戻って行った。

「なあ、ソラ・・・」

「ん？どうしたのはやて？」

「なんかシヨウの様子、おかしなかった？」

「・・・」

（はやても、気付いてる・・・）

というより当然だ。シヨウのあの敵意は感じやすい、まるで近づくなどでもいいように・・・。

「あともう一つなんやけど、」

「え？」

「シヨウって・・・なん歳なん？」

「・・・さあ・・・」

後で、聞いとかないとね・・・多分10歳か9歳だと思うんだけど・・・

~~~~~

———side——— 石田先生

「はやてちゃんの足の麻痺ですが、今のところ今の状態からあまり変化はありません」

「・・・そうですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気まずい空気が流れる。いや、正確には私にとって気まずい空気かもしれない。確か、左風さん。は特に気にしてる様子もなく、ただ終わるのを待っている程度なのかもしれない。

はやてちゃんの状態のことでも、治療のことを言っても「そうですか」「わかりました」だけで、ぼつさりと答えられてしまう。それにただでさえ敵意を向けられている状態なのに、「はやてちゃん」や「ソラちゃん」というとさらに敵意が強くなる。なにか悪いことでもしたのかしら・・・（汗）？

「ただ、多少ですが、足の麻痺が緩和されている様子もあります」

「・・・そうですか」

あつ、今ちよつとうれしそうにした。はやてちゃんやソラちゃんのこととはとても大切に思っているらしい。

「一応ご自宅では足の麻痺にどのようなことを・・・？」

「・・・足のマッサージや運動、栄養のある食べ物、そして治癒こ  
u-----」

「治癒？」

「・・・こんな感じです」

「そ、そうですか・・・」

今、明らかに治癒なんか聞こえた気がしたんだけど・・・

「・・・一つ聞きたいことがあります」

「あ、はい」

「・・・はやての足の麻痺の原因は今だ良く分かったないんですよ？」

「はい、今だ原因不明でして・・・」

顔を申し訳なさそうにして伏せてしまう。必死になって探しているが、まったく見当も付かない。まるで今の科学力では解明できないような、まるで病気ではないような………。

「……そうですか……なら俺はそろそろ行かせてもらいます」

スッ、と彼は立ち上がるとドアに向かう。  
その前に、聞きたいことがあった。

「あの、………」

「……なんでしょうか？」

「私、なにかお気になさることを、しましたでしょうか………」  
「？」

これだけは聞いておきたかった。私を見るどの敵意、あれがずっと気になっていた。

「……いえ、別に」

すると彼は私の質問の意味を理解し、そう答えた。ならどうして………？

「……わけありますから」

彼は私の心理を理解したのか、そう付け足した。

「あの………！」



「・・・今度はなんでしょうか？」

ドアに向かっていた彼を再び呼び止める。彼はいい加減めんどくさそうな顔をしていたが、最後に言っておきたいことがあった。

「はやてちゃんのことです」

「・・・・・・・・」

「ご存知かもしれませんが、はやてちゃんは一人ぼっちです。そのため、寂しい思いを多く送って来たに違いありません」

そこで私は一旦言葉を切り、はやてちゃんを窓越しから見ると、はやてちゃんはソラちゃんと一緒に笑いあっていた。

「・・・・・・・・」

左風さんは表情は分かりにくいですが、真剣に聞いてくれている。

「そんな彼女に寂しい思いをさせないために、少しでもその思いを減らそうとがんばっていますが、あまりいい成果は上げそうにもありません・・・」

ふと自分の手を見る。

「ですがそんな彼女の元に、あなた達が現れました」

キュッ、とその手を握る。

「はやてちゃんは今までより一番すばらしい笑顔でいられています。きっとそれはあなた達のおかげだと思います。……お願いします」

石田医師として、石田 幸子個人として、

「彼女の笑顔を、守ってあげてください。もう二度と彼女に、寂しい思いを、させないで上げてください」

深々と頭を下げる。

私の行動に心底面食らった様子で左風さんはいた。おそらくここまでのことをするとは思わなかったんだろう。

なにせ私とはやてちゃんは医師と患者という関係があっても、所詮は他人同士だ。いくら患者とは言え、あまりそこまではしない。ただし、あまりだ。自分の患者を病氣以外に心配する人（医師）だっている。なにかで聞いたけど、『人の命を救おうとしてるんだから、医者みんなイイ奴』と言う言葉があった。

同情とか偽善とか言われるかもしれないけど、私は本気ではやてちゃんのことを心配している。だからこそ、私よりも、はやてちゃんの近くにいられる左風さん達に頼む。

「……………」

左風さんは少し考え込む様子を見せる。

「……………石田 幸子医師」

「……………ハイ」

「・・・最初に言っておくが、」

彼はフウ、とため息を吐くと。

「当然だ・・・！」

「――――！！」

力強い返事を返した。

「・・・元々こっちは『天の道を往き全てを司る』ような人になるほどの気でいるんだ、余計な心配しなくても、」

そのまま彼はドアに向かうと

「守って見せるさ、俺の『家族』を」

そう断言すると病室を出て行った。

その時、彼の隣りに赤と銀の強調的なカブトムシのような仮面をした人がいたような気がした。

~~~~~

—————side ショウ

「あつ、ショウや！」

「ショウー！こっちこっち！」

「んなことしなくてもちゃんと見えてますよ」

診察室から出てきた僕は、はやちゃんとソラちゃん達の行動に苦笑しながらも返事をする。

「ねえ、ショウ、はやての足ってあんまり変化ないんだって……」
「？」

「？、なんでそれを？」

はやてを見るとアハハ、と苦笑っている。どうやら教えたようだ……。

「うん、まあ、確かに変化はないみたい」

「……そう」

ソラちゃんは顔を伏せてしまう。そんなソラちゃんの様子にはやちゃんが少し戸惑っている。

「だけど、」

「「!」」

「足も麻痺は多少だけど緩和されている様子があるみたいだよ」

優しく告げる。そうするとソラちゃん表情がパツ、と明るくなる

「やったね! はやて!」

「え、あ、う、うん・・・」

はやちゃんは驚いた様子でいる。多少緩和されている様子があったことは教えてもらってないんだろう。

それに緩和されていると聞かされたときは正直嬉しかった。毎日治療光線をはやちゃんの足に浴びせている効果があったのだから・・・ただそのことで問題があるのだけど・・・

「んじゃあ、帰ろっか」

はやちゃんの車椅子を押して病院の出口に向かう。

「・・・ねえ、はやちゃん」

「んー?」

はやちゃんは僕を見上げてくる。

「いい先生を、持ったね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うん！」

嬉しそうな笑顔で答える。

――――もしかしたら、あの人は佐賀美さん達みたい
に信用することができるかも知れないな・・・・・・・・。

第8話 俺の約束（後書き）

今回はちよつとだけショウのダークサイドが登場です。本来の素はボケボケショウなんですが、とある理由からこのサイドがあります。この理由には『佐賀美さん達』も関わってきます。その理由は今後の物語で……。ちなみに佐賀美さんの元は分かる人は多いんじゃないでしょうか？

石田先生が言っていた『人の命を救おうとしてるんだから、医者はみんなイイ奴』と言うセリフはONE PIECEのチョッパーの父、Dr. ヒルルクのセリフです。病院にいた子供達が読んでいた漫画を偶然見かけたか、何かで知ったんでしょう。そしてこの言葉が印象深く残っていたと。

そして次回、ついにあの黒き魔法少女が登場！やっとならせた……

ショウ「勝手に引き伸ばしたのはそっちだよな？」

ソラ「」コクコク

うっさいぞ主人公、ヒロイン

九之巻 雷の刃

———side ショウ

「ショウ、ソラ、そろそろご飯にしよう」

はやちゃんのだやかな声が聞こえる。

「んー、分かったー」

「オツケーイ！」

ソラちゃんと僕はそれに答える。

「ごっはん、ごっはん、ごっはん、ヘイ！ヘイ！」

指をパッチンパッチン鳴らしながら右へ左へと踊っておりまゝす☆
ん？何変なことやってんだって？何を言う！何しようが、僕の勝手
だろツツーーーーー！！

「変なことやってないではやてのこと手伝ったら？」

「はい」

スタスタとはやちゃんの料理を並べるのを手伝いに向かう。

「ホイホイ、はやちゃんそこは僕にお任せ」

「なんや、別にいいよ？わたし一人でもできるし」

「少しはおにーさんに頼りなさい。いや、本^{マジ}気で、本気と書いてマジで」

「そんな力まんでも・・・」

そう言われてもね、はやちゃんは『頼る』と言う言葉がまるで自身の辞書にないっぽいんだから心配なんだよ、頼むから入れてくれヨイ・・・おにーさんは心配だよ・・・

「んー、それじゃあ、お願いするわ」

「アイアイヨー、ソラちゃんも手伝ってねー」

「はーい」

せっせかせっせか皿を慣れた手つきで並べていく。これも慣れたものだぜ、けっこー長い間主夫やってましたから。

「~~~~♪・・・・・・・・・・・・・・・・？」

だいたい皿を並べ終えた時、不意に僕の手が止まる。

「ん？どないしたん、ショウ？」

「あ、いや・・・・・・・・・・」

しばらく意識を集中させる。この感じは・・・・・・・・・・

「ゴメン、はやちゃん！ちょっと行ってくらあ！」

「あっ、シヨウ？」

「どうしたの！？」

この感じは、残念ながら間違いないく……

「い……いやな予感がしたからちよっくら行ってくる！！」

「ちょ、ちよっと待ってよ！はやて、行ってくるね！」

「はい、行ってらっしゃーい」

ドタドタと騒がしい音を立てながら玄関に出て行き、レーダーで誰も見てないのを確認してから空に飛び上がる。

はやちゃん！なるべく早く戻ってくるからねー！！

———side はやて

「……行ってもーたなあ……」

シヨウとソラが飛んでいったほうを見つめる。少し心配やけど、シヨウたちなら大丈夫やろ。そう判断するとテーブルの上に並べた晩御飯を見る。

「・・・・・・・・・・」

少し見つめた後、リビングに行ってテレビをつけて、ショウ達を待つことにする。

・・・・・・・・なんとなく、今晚御飯を食べたらあんまりおいしくないような感じがした・・・・・・・・

——side ショウ

——ドクン、ドクン

それは静かに鼓動する・・・・・・・・

「どうじゃこの野郎!？」

ジュエルシードに封印の文字が浮かび上がり、発生していた魔力がどンドン収まっていき、完全に魔力が消え去ると地面にコテンツ、と落ちる。この前の『リコちゃんのご主人様を見つけよう!』で魔力の感じを覚えたからね。

「ふう、危機一髪。発動する前に止めれてよかったよかった」

ん、何かが起こることが予感で分かるし、そしてその何かがジュエルシードだってことが大体分かるからもう対策はバッチリかな? そんなことを言っていると、

「ハア、ハア、ショウ、は、早すぎ・・・・・・・・・・」

「ソラちゃん・・・・・・・・付いて来たの?」

「付いて来たよ!!」

なぜか怒鳴られた・・・・・・・・ただ僕は急いで行って来ただけなのに、ねえ、これって僕が悪い!?

「まあ、勝手についてきたのは私だけど・・・」

「オイゴラ」

じゃ怒るなよ!!

「はあ、まいいや。」

———「んで？君達は何者なんだい？」

さっきから僕達を見ていた二人組みに声をかける。二人組みは少し遠いところにいたけど、問題なく見える。こんなビルの屋上にそうそう人はいないからね、しかもこんな夜中に、ね。

「………気配はそれなりに消していたんですが」

「気配を消していたとかは知らないけど、少なくとも僕は気配を探るとかできないから、リーダーと言うものを使って辺りを見ているんだよ」

僕達を見ていた二人組み、と言うより正確には一人と一匹なんだけど、の一人はおそらく魔導師だ、居た事がバレて気配を隠す必要がなくなり隠していた魔力を感じる。

確かバリアジャケットだっけ？は黒が強調的でなんか死神を連想させるコスP、じゃんくて服装だ。髪の色は金色で、瞳は真紅、年は多分なのちゃんやはやちゃんとあまり変わりはないであろう。

・・・・・・・・なぜ子供が？

もう一匹は額に宝石を着けたオレンジ色の狼だ、だけどただのじゃないね、こっちからも魔力を感じる。

「ちよつろとそのアンタ、その手の中の物渡してくれないかなあ？
じゃないと、ガブツと行くよ？」

と思っただけ喋ってきましたよ。

「フツ、ついに僕も剣と魔法の世界に入り込んだか・・・・・・・・」

「もうとつくのどんぴにそんな感じの世界に入っちゃってるよ、シ
ョウ」

「少しぐらい妄想で現実逃避させてくれ、色々ありえねえことが
起こりすぎてて頭が痛いんだ」

「おい、聞いてるかい？」

ああー、聞こえない聞こえない、動物が喋るだなんてそんなこと聞
こえないーアアアアー。

「そのジュエルシードを、渡してください」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきまでの空気をピシヤリと閉じるような凜とした声が響く。何を隠そう金髪の死神少女の声だ。

「・・・・・・・・一応僕としてはジュエルシードの事なんてどうでもいいんだけどさ、」

僕の言葉にソラちゃんが少し目を見開くけど、ソラちゃんに目配りをし言葉が続ける。

「誰にも渡していいんだけど、例外とかあるんだよね、まあこんなことはどうでもいい、重要なのは、

もし僕がいやだと言ったら？」

「・・・それなら、

――力づくで奪います」

「え？」

間の向けた声を出す、

――

、

『S
c
y
t
h
e

f
o
r
m,

S
e
t

u
p
』

――――刹那、少女が僕の目の前に現れ、雷の鎌が僕に振り下ろされた。

――ガキンッ！！

「………パワーは弱いほうだけど、」

その鎌を、

「君自身のスピード、そして、……ええとなんだっけ？ 確かデバイス？ の鋭さがそれらを補っているんだね、……なかなかいいじゃん」

黄金の大剣、僕の『キングラウザー』で受け止める。

「!!」

防がれたのが予想外だったのか、大きく目を見開くとすぐに僕と距離をおく。

「ギリギリセーフだったね、冷や汗かいたよ」

「あはは、もしだめだったらメタルで防ぐこともできたんだけどね、それでもエクストリーム、ナイスタイミング！」

——— キュイイイイイイイ

僕達の頭上にいるエクストリームにサムズアップを送るとエクストリームはまるで喜んでいるかのように鳴く。いや、実際に喜んでいるのかもしれない。

「さてと、いきなり襲い掛かるのは酷くない？ 常人ならそくアウト

だったぜ? golden girl?」

剣先を少女に向け、言い放つ。

———side ???

最初は簡単に行くと思っていた。

彼女はアタシのご主人だ、だから彼女の強さはアタシが一番分かっている。フェイトの『素早さ』とバルデッシュの『鋭さ』にかなう相手はそうそういない。そう自信を持って思っていた、それに相手はトロそうな奴だ。簡単に行くと思っていた、なのに、

「さてと、いきなり襲い掛かるのは酷くない? 常人ならそくアウトだったぜ? golden girl?」

目の前のこいつはアツサリと幻想^{それ}をぶち殺しやがった。

「フェイト！大丈夫かい！？」

急いで声をかける。

「……だいじょぶ、だけど「フェイトって言うんかい？」！」

不意にアイツが喋ってくる。

「僕は左風 ショウだ、以後よろしく。できればフルネームを教えてくださいると嬉しいんだけど？」

「お前！！」

アタシは思わず声を荒げて叫ぶ。

「一体何馴れ馴れしく話しかけてるんだ！」

「んなこと言われましてもねえ……」

アイツは、ショウって奴はバツが悪そうに顔を困らせる。

「僕はもともと戦闘の意思なんてなかったのに、急に戦いを挑んできたのはそっちだよ？だから僕はマジメに戦う理由がない」

「なっ、ふざけてるのか！！」

なんだかいやだこいつは、まるで掴み所がない。それにこいつからは魔力っぽいものを感じるけど、違う、こいつから感じるこの力は全然そんなのじゃない………！

「フェイト、気を付けてくれよ。こいつの力は少なくとも魔力じゃない」

「？、でもアルフ、あの人からは……」

「確かに魔力を感じるんだけど、違うんだよ、全然こんなとは……」

確信なんてない、だけどそんな気がするんだ。強いて言うなら『野生の勘』って奴かい？

「………分かった」

さすがアタシのご主人様、理解してくれたらしく、警戒心をさらに強め――――

「ああ、最初に言っておくけど、僕達が使うのは魔力とは違う力だから」

………。

「あっちから固定してきたあ！…？」

なんで！？フェイトも目を大きく見開いて驚いてるよ！

「なんで敵に情報教えるの!？」

しかも驚いてるのはこっちだけじゃなかった。髪がホワイトピンクの女が隣りのショウって奴に叫んでいる。

「……こいつは掴み所がないと思ったけど、違う、ただのバカだ!!」

「いや、別に使う力の性質が違うことを教えても別に大して問題ないでしょ？特に特別な性質って訳でもあるまいし、あくまで性質が違うだけで使いようは魔力と似たようなもんだし」

「だからってえ……」

ホワイトピンクの女も呆れあきれた。

「えと、ありがとうございます……?」

「フェイトオ……」

お礼も言わなくてもいいよ!

「どいたまして、それにさ、

子供に本気で戦う気はないし刃を向ける気もないよ、僕は。それも女の子に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉にホワイトピンクの女は黙り込む。その言葉は大した物だ、だけど、

「あんまり舐めて貰うと痛い目見るよ・・・・・・・・？」

アタシ達はそれぞれ構える。

———side ショウ

「しっかり戦闘態勢ですか、やる気満々のようで・・・・・・・・」

作戦名『ボケかましてシリアスぶち壊し』は早速失敗してしまったらしい。

「どんな作戦よ……、まあともかく、あの狼のほうは私がなんとかするからね」

「僕としてはさっさとトンスラして逃げたいんだけど……」
「？」

僕の中では『逃げるが勝ち』ですから、戦いになりそうなら必死に逃げるんですが。

「そうも行かないでしょ？それに、あの子をほっといてもいいの？」

「……」

ソラちゃんも気付いていますか、あの子の瞳、すごく悲しそうだったことに。

「そうわれちゃいますと僕もいよいよ覚悟決めないといけないんですがね、まあ、僕としても気になることがもう一つあるからね」

「？」

さっきのアレ、ありゃあ、一体……？

「おしゃべりはすんだかい！？」

オレンジのわんこが早速突っ込んできた。ザッ、と構えると、

「あなたの相手は、」

僕の前にソラちゃんが出てきてカリスアローを構えて数弾エネルギー弾を放って牽制する。

「こっちだ!!」

そして上空に飛び上がる。

「待て!!」

わんころもそれを追いかける。これでここに残ったのは僕と目の前の少女、フェイトことフェイちゃんだけ。

「……………話し合いでどうにかできない?」

「……………できません」

彼女は自身のデバイスを構えると、

「『話し合う』だけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない、伝わらない!」

僕にまっすぐ向かって雷の鎌を振るってくる。

「平和的解決法を否定する返事だな!!」

後ろに飛ぶことでそれらを避ける。

———side ソラ

「どうやらあっちも始まったようだねえ」

わたし達の目線にはシヨウとあのフェイトって子が戦っている。心配はする、だけど、

「別にだいじょうぶだけど？」

「………！」

その言葉に相手が少し驚く。心配はするけど、それ以上に信頼感がある。シヨウがそんな簡単に負けるとは思えない。

「シヨウはあなたのご主人より強い、実際に最初の一撃は防がれてるでしょ？」

「そんなのマグレに決まってるさ！」

「どうかな？そのセリフを言った大抵の場合は相手がものすごく強かったってオチが多いよ？」

「そんなわけないさ！フェイトの強さは私が一番！」

ゴッ、と狼は向かってくる。

「知ってるんだから!!」

「それは、」

私も武器を構える。

「お互い様だ!!」

———side ショウ

「ハアアアアアアアツツ!!!!」

振り回される雷の鎌を右へ左へとヒラリヒラリと避けていく。

（相当な使い手であること、ってか小学生はここまで強くないぞ基本的!?!）

今僕がこの子と戦いながらもっとも驚いてるのはこの子の腕だ。並なんかじゃない、十分上位に入るほどだ。小学生だろ!?!重要だから二回言う!!

ガギイインッ!!

「とわっ！」

「ッ！」

鎌と剣が擦れ合う音が辺りに響く。

（この人——————）

「・・・・・・・・・・私がぶつかり合った時、」

一旦僕と距離を置いたフェイちゃんがポツリと喋りだす。

「あなたはただ単純に受け止めて防ぐんじゃないくて、それを受け流している」

「ほう、僕の防ぎ方に気付くか」

さっきからヒラリヒラリと避けているが、僕は体をそらして避ける以外、剣で彼女の攻撃を受け流すことも行っている。そりゃ受け防ぐこともしてるけど、受け流しの方が多い。

「ただ単に受け止めて防ぐより受け流すはより難しいのに・・・・・・・・・・」

「そりゃどうも、僕は守ることが得意なんでね、だけど一応言っておくけどそれに気付く小学生のほうがよっぽどだぞ？」

「・・・・・・・・・・どうも」

(――――やっぱり、強い！)

そう言うのと再び向かってくる、と思ったら前から消えた。

「だけど！」

体を180度回転させ、

ガキーン！！

後ろからの攻撃をしっかり受け止める。

「しっかり気付けているよ！！！」

「！！！」

再び距離を置く。

「・・・・・・・・なぜ？」

「ん？」

「どうしてさっきから防いでばかりなの？」

「・・・・・・・・あー」

『さっきから』と言うのは最初からのことだ、彼女が言うとおりの僕

は最初から防いでばっかだ、攻撃なんてしていない。

「攻めることならできるはずなのに……………」

「まあ、そうなんだけどさ」

ま、事実だ。けどね、これにはちゃんと理由があるんだよ。

「一応最初に言ったよね？子供に本気で戦う気はないし刃を向ける気はないって、それも女の子に？」

「……………」

「まー、それでも例え相手が子供でなからうがなかなか本気で行く事も刃を向けるとも思えないけどね、僕は」

そもそも僕は戦うことは好きじゃないんだ、本気でいくも何もそんなに戦いはやらないよ僕は、避けては通れない戦いが無い限り。……………まさにこれがそうなんですが。

「……………そうですか」

そう言うとな度は今までとは少し違った構えを取る。

『Arc Saber』

「ハアアアッ！！」

フェイちゃんは勢い良くバルディッシュを振り、鎌を飛ばしてくる。

「――――！！」

ズガアアアアンツ！！！！

アークセイバーが僕に当たり、煙がモクモクと立つ。

「やった！？」

「うんにゃ、まだだ」

その煙の中から僕が無傷で出てくる。

「直撃だったはず……！」

「まー、そうだったんだけどね。でも僕言ったよね？ 『守ることが得意だ』 って？」

ピラピラとキングラウザーを見せる。『アークセイバー』だっけ？アレが当たる寸前にキングラウザーの側面を盾にすることで防いだんだ。少し吹き飛ばされかけたけどなんとか踏みとどまった。

僕がキングラウザーを武器として選んだのはこの防御としても適してるからね、それにカッコイイし（ほかも十分カッコイイからスングク悩んだ）。

「さあて、どうするか………」

なんとかこの戦いを治めて、さっきのアレについて聞きたいんだけど

ど、

「ハアアッ!!」

「と!!」

そう簡単には行かせてくれないらしい!!

足元を狙った攻撃がくるが、それをすぐさま飛び上がって避ける。

「フォトンランサー!!」

僕が上にいるのを彼女が確認した途端、計6個のスフィアが彼女の周りに作り出される。

『Fire』

「息のあった攻撃だな!!」

バルデッシュの合図と共にスフィアが全てほぼ同時に発射される。

「ガイアスラッシュ!!」

キングラウザーを左手に逆手で持ち、右手を左腰に据えて『ガイアスラッシュ』を放つ。

スガガガガガッ!!

赤い三日月型の光弾と雷の槍がぶつかり合い、相殺される。だけどそれをフェイちゃんは狙っていた。

「いない・・・?!」

すぐ横から雷の鎌が飛んでくる。

（『アークセイバー』!）

「でりゃあッ!」

体を捻りながら回転し、なんとかそれを避ける。

「あつぶなあ?!」

「ハアアアアアッ!」

間入れずにフェイちゃんが鎌を振るってくる。

『M a c h』

刹那、今度は僕が消える。

「!?!」

「悪いけど、」

「ッ!」

僕が現れたのは――――

「高速移動は君だけの専売特許じゃないぜ!」

――結構フェイちゃんとは距離の離れた場所!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんさその顔は!!」

フェイちゃんが戸惑った顔になる。別にいいだろ!? こっちは戦いたくないんだから!!

「だけど、私は戦います・・・・・・・・」

「読むな、人の心を」

なんなんだよ一体、女性ってのは全員人の心が読めるのか・・・・・・・・？

まあ、んなことより今の状況をどうするかだよな。一応ずっと防いだままで相手のスタミナ切れを待つこともできるんだけどな、フェイちゃんちょっと体力にはあんまり自信なさそうだし、体細いし。・
・なんか最初会った時、若干弱っているけど強がってますって感じがしたのは気のせいだよな・・・・・・・・？

「やけどそれじゃあはやちやんと晩飯に間に合わないし・・・・・・・・」

今僕の使えるウルトラマンや仮面ライダーの技の中に相手を眠らす技はない。『フルムーンレクト』も多分意味ない、精神を落ち着かせてもすぐ戦意を上げてくると思うし。キャッチリングとかでも避けられそうだな、あの速度だと。

つか相手を眠らす技なんてウルトラマンにも仮面ライダーにもあつたか・・・・・・・・・・？

「・・・・・・・・・・」

フェイちゃんは再びこちらに向かってこようとする。
むりやり意識をそぎ落とすしかないか・・・！？

「ハアアアアアッ！！」

「クッ！」

ガギイツ！！

フェイちゃんの攻撃を受け流し、両肩を掴んで、

ゴチンッ！！

「あうあ・・・・・・・・！」

「おお・・・・・・・・！」

必殺の『ZU・TU・KI』！を思いっきりぶつける。だが自分もダメージを受けてしまった・・・・・・・・フェイちゃんは僕同様石頭だった・・・・・・・・！

何やってんだなんて言わないでくれよ？必死に考えた結果一番平和

的な解決方法はこれだったんだヨイ……。

ドガアンツ!!

「ぶほおっ!？」

「キャッ!？」

僕達がフラフラとしていたらいきなり後ろの上空から爆発が起きる。するとその爆発からわんこがヒュルルと落ちていくって、

「アルフ!？」

「ちょ、ソラちゃん!？」

「え? ああ、ちゃんと撃退しといたから」

「いや、そりゃ見りゃ分かるけど、具体的にどんな方法!？」

「えーと、『ファイアバレット』、『ライダーシューティング』、『ディエンドブラスト』、『ディケイドブラスト（追跡型）』、あと……」

「うん、一言いわせてくれ、」

一言おき、スウ、と息を吸い、

「やりすぎじゃあああああッッ!!!」

叫ぶッ!!

僕のがんばりはなんさ!?

———side フェイト

わたし達はジュエルシードを今日も探していた、アルフには「無茶しちゃだめだよ」って心配されたけど、それでもやめるわけにはいかない、母さんのためにも………!

そして見つけたと思ったらすぐそれは封印された、わたし達以外の人に封印されたからだ。だけどわたし達にはそれが必要だった。だから、酷いことをしてでも、犯罪をするようなことをすることになっても、手に入れる必要があった。

その人はとても強かった。見た感じはその、……のんびりそうだったのに、どの攻撃も受け流され、そして負けた。

わたし達がしたことは犯罪だ。わたし達は罪を犯した、なのに――

―――
「マジスンマセンでしたあ!」

なぜかわたし達が謝られる側になってしまっている。しかも謝って

る人は丁重な土下座までしている。

「あの、なにもそこまでしなくていいですから……………」

「いやいや、こればっかは僕達が悪いから！！^{マジ}本気で！！本気と書いてマジで！！本日二回目！！！！」

「ええと、……………」

「いや、一応アタシ達のほうが悪いほうなんだけど……………強盗みたいなことしてるし」

「そ、そーだよ、やり過ぎだつてばシヨウ」

「仮に強盗だとしても火炎放射とかロケットランチャーとか使わんわい！！てか原因を作った君が言うな！！」

「うつ……………」

そういわれると年はわたしと近そうな女の子が顔をしかめ、視線を泳がす。

「そりゃ、ちよつとはやりすぎたと思うけど……………」

「やり過ぎじゃ！！」

「あ、あれでちよつとって……………」

シヨウって人が噴気し、アルフがゲンナリする。確かにアレはちよつではないと思う……………アルフ結構ボロボロにされてたし。

「君は手加減と言うものを知らんのかい!!」

「あ、あの時必死だったから私悪くない!」

「もうマジスンマセン。あとソラちゃんそこに直れ」

「だからそこまで気に留めなくていいって、アタシはこの通りピンピンしてるし……」

アルフの怪我はショウさんが治してくれた。アルフの怪我を見て「不幸だー!!」って叫びながら慌てて治してくれた。私は治癒系魔法は使えないから、その場でオロオロするだけだったけど……

「そっ、そもそも同じ女の子同士だったんだし、そこまで大事じゃないでしょ!」

「限度があるだろ限度が!!」

「だ、だからもういいってば」

アルフも回復されてた時は凄く驚いてた、どうして敵の傷を治すんだって。すると即答で「やりすぎたから!」と言い返されたときも凄く驚いてた。

最初はショウさん達を警戒してたけど、さすがに――――

「そもそも女の子のお肌は大切なんだぜ!? 多分!!」

「多分じゃない！大切なの！」

「じゃなんで傷つけることした!？」

「ううっ」

———ここまで必死にされると、警戒心もなくなる。

「うう、実際には自業自得なんだけどな、アタシ……」

「?、自業自得って……?」

「いや、それが」

小声でアルフに聞いてみる。

「ちょっと、て言うか結構あいつの主人を罵倒するような事言っちゃってね、それであいつが怒って無茶無茶撃ってきたんだよ……」

「ア、アルフ」

きつと主人(?) 思いな子なんだろう、さっきから視線を泳がせてるのも素直にそれを言えないから。

だけどあの子には悪いけど、私にはもっと気がかりなことがある。シヨウさんのポケットの中に入りっぱなしの『ジュエルシード』。

「あの……」

「あとさつきから君は何視線をと、ん？どうした？」

あんなことをしたのにこれを聞くのは失礼かもしれない、だけど、どうしても必要だから……！

「あの、ジュエルシードをわたしゆちえくれましえんか!？」

囁んだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「わ、わたちえて、わたきめて、わたチュ……………」

「「……………」」

「あううう……………」

「いや、泣くな!？なんか僕が泣かせた見たいだから!！?」

「また女の子泣かせた……………」

「だまらっしゃい!!つか泣かせてないわい!…………フェイト嬢、一回深呼吸してみよっか」

「あ、はい……………」

「はい、すって」

「す～～～～」

「はい、はいて」

「は～～～～」

「すって」

「す～～～～」

「はいて」

「は～～～～」

「はい、用件どうぞ」

「ジュシエルシェーヂョを．．．．あう」

「だめだこりゃ」

「．．．．ねえ、この子ってもしかして天然？」

「．．．．かわいいだろ？アタシのご主人？」

「ムリに美化したよね今？」

あううう．．．．．

まあ、フェイちゃんの天然暴走を何とかした後、言いたかったことを聞く。

「この『ジュエルシード』を渡して欲しい、と？」

「はい・・・」

真剣な表情で頷く。

「フーム・・・だけど今頼むのはちょいとムリがあるんじゃない？」

「うう・・・」

しゅんと俯いてしまう。

「一応僕はあくまで『いやだと言っただけ？』って聞いたただだし、まあそれでも挑発するような発言だったとは言え、それでも渡す気がないと判断して襲ってきたにはそっちだしねえ・・・」

「・・・」

とうとうがつくりうなだれてしまった、ぐうもでないよう。

「ま別に渡してもいいんだけどさ」

「やっぱり、そうですねってえええっ!？」

落胆していたフェイちゃんが大きな声を上げて驚く。

「いや、僕『ジュエルシード』の事なんてどうでもいいし、集める理由も集めてのメリットもないし」

「え? え? ほ、ほんとにいいんですか？」

「うん」

「あなたってホントアツサリだよね……………」

「いやゝ、それほどでもゝゝっ」

「褒めてない褒めてない」

あり? そうなの?

「そんなアツサリに……………何か企んでないだろうねアンタ？」

「ムッ」

流石にアツサリ過ぎた僕の返事にアルちゃんが疑ってくる。確かにそれもそうだよな、見知らぬ相手が、そんな都合のいい事なんか言ってきたら疑うわな。あとなぜかソラちゃんが不機嫌そうにする。

「アルフ、それはどう言う事かな？」

「え？ いや、これはその……」

「その？ 何？」

「ええと……」

「……なんかアルフ、ソラちゃんに対して弱腰になってるんですが？」

「そもそもシヨウにそんな事考えてると思うの？」

「おい、そりゃどういう意味だ」

「まるで僕がバカだと言ってるみたいじゃないか！ この野郎、ほっぺムニムニの刑にしてやろうではないか！」

「ミユ、ふぁーにゃーせー」

「ふははは！ だがことわグベツ！？ 足を蹴んな、足を！」

「あの……」

「「ん？」」

「ギャーギャー二人で騒いでいるとフェイちゃんが声をかけてくる。」

「ジュエルシードを……」

「あーはいはい、これね。だけどその前に！」

ポケットからジュエルシードを取り出し、フェイちゃんの渡そうとしたけど、すぐ手を上げて届かない高さまで上げる。渡す前に聞いておきたい重要なことがある。

「フェイトちゃん、君はこの力を、どうするつもり？」

これだけは聞いておきたかった。ようは僕が聞いているのは『ジュエルシードの力を何に使うつもりなの？』だ。いわゆる目的を知りたいんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だけどフェイちゃんは黙ったままだった。言いたくない、か・・・・・・

「じゃあ、フェイトちゃん、僕とあることを約束してくれる？」

「え？」

「『この力を悪用しないこと』、これを守ることができる？」

フェイちゃんとアルフはキョトンとした顔で僕を見ている。ソラちゃんは僕の性格を分かっているからため息をつきながらも優しい顔で見守っている。

言っってしまった僕がしていることはいきなり強盗してきた相手に目的も良く知らずご親切に欲しがっているものをあげているのだ。お人が良すぎるとでも言われそうだけど、ただその相手が10歳も満たない女の子で悲しい瞳をしていることを知っておいて欲しい。

「これを守ること、できる？」

「・・・・・・・・はい！」

少し考え込んだ様子だったけど、力強い返事をする。その瞳には強い意志が宿っているような気がした。

「んならいいや、ホイ」

「ホイって、ひゃっ!？」

フェイちゃんの返事に嘘も何もないと確信すると、ぽいつ、とジュエルシードを彼女に投げ渡す。それを慌ててフェイちゃんがキャッチする。

「ジュ、ジュエルシードを投げるなんて・・・・・・・・」

「封印してあるからだいじょーぶ!！」

サムズアップをして答える。

「ワ、ワイルドな奴だね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あなたは人の事言えないよね？」

「わんこよ・・・・・・・・君は犬だよね？」

「狼だ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんさそのえ？って顔は！？」

「今まで犬だと思ってたの！？」

「いや、小学生の隣りに狼は早々いないと思うが……………」

「ア、アルフは優秀な子です！ただ時々人前でドッグフード食べた
りするけど……………」

「犬じゃん」

「おいしいから仕方ないんだよ！！」

「知るか！」

などとフェイちゃん達を巻き込んで漫才をしていると不意に僕の携
帯に電話がかかる。

「おおっと、ハイハイ、もしもし？」

『あつ、シヨウ？そろそろはよ帰ってこんとご飯冷めてしまうわ。
まだ帰ってこれへんの？』

「あー、だいじょぶだいじょぶ、もう帰るわ」

『ホンマやな？なら待つとるよ』

黒が強調的で妙にゴツゴツしている携帯をポチつとを切る。

「まあ、うちの家族との晩飯に遅れそうなので、そろそろこちらはおさらばとさせて頂くわ」

「!・・・・・・そうですか」

こちらの予定を伝えてそろそろ帰ろうとしている意思を伝える。その際、フェイちゃんが『家族』と言う言葉に妙な反応を示していたような・・・・・・?」

「その前に聞いておきたいことが・・・・」

「?」

「僕はさっきも言った通り、名前は左風 ショウ。・・・・君の名は?」

「!」

「名前を言うのは、結構大事なことだぜ?」

ピツ、と指鉄砲で指す。フェイちゃんは少し驚きを見せ、考え込んだ後。

「・・・・・・フェイト・テストロッサ」

そう答える。アルフは後ろで仕方ないかと言う顔をし、ソラちゃんには微笑ましい顔をしている。

「うむ!自己紹介もすんだし、これでフェイちゃんと呼べるな!」

「つて結局それなんだ・・・・・・・・」

「僕は女の子のことを大体名前の最初の二文字でちゃん付けで呼ぶのだよ！」

「胸張らなくていいから」

などと漫才を再開する。フェイちゃん達はその光景に苦笑いしている。

「んじゃあ、僕達は」

「またどこかで会お」

僕達は家に帰ろうとする。

「あ、そうだフェイちゃん」

「あ、はい？」

「『ごめんなさい』は、自分が今からすることに対しての、謝罪を言っていたんだね」

「あ・・・・・・・・」

優しく告げる。フェイちゃんはまさか聞こえていたとは思わず、声を漏らす。

「フフ、じゃあな！」

と僕は、風のように消えていった……

どうだ？ かつこいいだろ？ (v₁) b

———side フェイト

「行っちゃたね……」

「なんか忙しい奴らだったねえ」

アルフはやれやれと首を振っている。だけどどこか楽しんでた様子だった。

「わたし達も、帰ろっか。ジュエルシードは手に入れたし」

「そーだねえ」

「……ねえ、アルフ」

「ん？ どうしたんだいフェイト？」

「『家族』って、いいよね……」

「フエイト……」

ショウさんが自分の家族と話している時、どこか嬉しそうな様子だった。

……きっと、温かくて、優しい感じがするんだろう。

「わたしも早く、母さんに笑って欲しい……」

「フエイト……」

不安そうにわたしを見てくるアルフにわたしは微笑む。

「じゃあ、わたし達も帰ろ……」

マントを靡^{なび}かせ、来た道に戻っていく。

――――
母さん、待ってて！

――・・・少女の切ない願いは叶うのか、
それは、

誰にも、分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483v/>

魔法少女リリカルなのは ～Destiny's Joker～

2011年12月2日16時47分発行